金比羅山古墳発掘調査報告書

京　都　府　教　育　委　員　会

金比羅山古墳発掘調査報告書

京　都　府　教　育　委　員　会

巻頭図版第１

第１埋葬施設（粘土槨）副葬品出土状況（北から）

巻頭図版第２

第２埋葬施設（円筒棺）検出状況（南から）

巻頭図版第３

（１）埴輪棺（東棺・北から）

（２）埴輪棺（東北棺・東から）

（３）円筒棺・蓋

巻頭図版第 4

副葬品

巻頭図版第５

（１）勾玉・管玉・ガラス小玉

（２）斜縁二神二獣鏡

巻頭図版第 6

普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪

序

金比羅山古墳（こんぴらやまこふん）は、宇治市広野町にかつて所在した直径約40メートルの円墳です。数百メートル南には、京都府南部最大の前方後円墳である久津川車塚古墳（くつかわくるまづかこふん）を含む久津川古墳群（国史跡）があります。

昭和39年に金比羅山古墳で宅地開発が予定されたため、京都府教育委員会が全面的な発掘調査を実施しました。古墳の墳丘全体を調査の対象とし、多種多様な遺物が出土した発掘調査の意義は大きなもので、その成果は内外から注目を集めました。また、出土品の分析から、金比羅山古墳は、久津川車塚古墳よりも少し前の世代の古墳であることが判明しました。

発掘調査が実施された昭和39年度末には速やかに概要報告が刊行され、正式な報告書の作成が将来に期されました。しかし、高度経済成長期を迎えた当時、増加する一途であった開発行為への対応を最優先せざるをえず、報告書作成の機会は長年にわたって得られませんでした。

発掘調査から50年以上が経過し、調査担当者も既に他界されましたが、この度、文化庁の御理解によって出土品整理及び報告書作成作業が国庫補助事業として採択され、課題であった報告書がついに刊行されることとなりました。

報告書の刊行にあたって御協力いただいた多くの方々と関係機関に厚くお礼申し上げますとともに、本書が府の歴史や文化を御理解いただく上での一助となり、文化財の保存と活用に役立つこととなれば幸いです。

令和３年３月

京都府教育委員会
教育長　橋本　幸三

凡　例

1　本書は京都府教育委員会が昭和39年度に発掘調査を実施し、令和元年度から２年度にかけて出土品整理作業を実施した、金比羅山古墳発掘調査報告書である。

2　本書の執筆担当者は、吉本堯俊（故人）・古川匠・中居和志・北山大熙・川崎雄一郎である。

3　本書の執筆は各担当者が行い、文責についてはそれぞれ文末に記した。編集は各担当者が行ったものを古川がまとめた。

4　吉本堯俊氏の報文は、『京都府埋蔵文化財概報 1965』（刊行：京都府教育委員会）掲載文の再掲である。再掲した吉本氏の報文は、新規報文と区別するため、文字を小さくして記載した。

5　出土品のガラス小玉の分析結果について、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　田村朋美氏の報告を附編として掲載した。

6　斜縁二神二獣鏡の掲載図作図について、大手前大学史学研究所及び同大学森下章司氏、岡本篤志氏から三次元デジタル計測の技術協力を受けた。

7　本書に掲載した地図は、国土地理院発行の地形図である。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は京都府・市町村共同ポータルサイト（http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/index.asp）に掲載する文化財ＧＩＳデータを基に作成した。国土座標・方位のないものは、上位が北である。

8　本書で使用した方位記号は、矢羽根記号は座標北を表し、線書き記号で磁北を表している。

9　巻頭図版及び図版に掲載の金比羅山古墳出土遺物写真は、写房楠華堂 内田真紀子氏に撮影を委託した。著作権は当教育委員会、著作者人格権は委託者に帰属する。

目　次

1　はじめに……1
2　調査の経緯……2
3　位置と環境……5
4　現地調査……11
5　副葬品……20
6　円筒棺・埴輪類……40
7　総括……55
8　附編……64

CONTENTS

1　Introduction ……1
2　Investigation system ……2
3　Geographical and Historic environment ……5
4　Field investigation ……11
5　Excavated Articles ……20
6　Round shaped clay coffin and Haniwa ……40
7　Generalization ……55
8　Appendix ……64

挿図目次

第１図　金比羅山古墳・関連遺跡位置図（国土地理院『宇治』S=1/25,000）……6
第２図　金比羅山古墳　墳丘測量図（S=1/600・「概要」掲載図に一部加筆）……13
第３図　金比羅山古墳　墳丘模式図……13
第４図　第１埋葬施設棺内・棺外副葬品出土状況（縮尺任意）……15
第５図　第１埋葬施設棺内副葬品出土状況（縮尺任意）…16
第６図　第２埋葬施設棺内副葬品出土状況（縮尺任意）…18
第７図　斜縁二神二獣鏡　RTI 画像（S=4/5・大手前大学史学研究所提供）……21
第８図　斜縁二神二獣鏡　三次元計測放射輝度陰影図・断面図（S=4/5・大手前大学史学研究所提供）……22
第９図　斜縁二神二獣鏡細部写真……24
第 10 図　石製玉類１（S=1/1）……25
第 11 図　石製玉類２（S=1/1）……27
第 12 図　ガラス小玉（S=1/1）……28
第 13 図　ガラス小玉法量分布グラフ……28
第 14 図　ガラス小玉孔径分布グラフ……28
第 15 図　刀剣（S=1/4）……30
第 16 図　第１埋葬施設出土農工具１（S=1/2）……32
第 17 図　第１埋葬施設出土農工具２（S=1/2）……34
第 18 図　第２埋葬施設・墳丘出土農工具１（S=1/2）‥37
第 19 図　第２埋葬施設・墳丘出土農工具２（S=1/2）‥38
第 20 図　円筒棺（S=1/8）……41
第 21 図　円筒棺展開図（S=1/15）……42
第 22 図　埴輪棺１（S=1/6）……44
第 23 図　埴輪棺２（S=1/6）……45
第 24 図　普通円筒埴輪１（S=1/6）……46
第 25 図　普通円筒埴輪２（S=1/6）……47
第 26 図　普通円筒埴輪３（S=1/6）……48
第 27 図　形象埴輪１（S=1/6）……50
第 28 図　形象埴輪２（S=1/6）……51
第 29 図　南山城地域出土円筒埴輪の底部高と外面調整 58
第 30 図　Ⅱ・Ⅲ期の南山城地域出土円筒埴輪（S=1/15）59
第 31 図　金比羅山古墳と近隣地域の古墳……61
第 32 図　カリガラスの細分……65
第 33 図　ガラス小玉の顕微鏡写真①……67
第 34 図　ガラス小玉の顕微鏡写真②……68

付表目次

付表１　現地調査日誌（S39.8.19 ～ 10.18）……3
付表２　久津川古墳群を構成する古墳一覧……8
付表３　石製玉類一覧……27
付表４　ガラス小玉一覧……29
付表５　農工具一覧……38
付表６　円筒棺・埴輪棺・円筒埴輪観察表……52
付表７　形象埴輪観察表……54
付表８　蛍光Ｘ線分析結果……66

巻頭図版

巻頭図版第１
　第１埋葬施設（粘土槨）副葬品出土状況（北から）
巻頭図版第２
　第２埋葬施設（円筒棺）検出状況（南から）
巻頭図版第３
　（１）埴輪棺（東棺・北から）
　（２）埴輪棺（東北棺・東から）
　（３）円筒棺・蓋
巻頭図版第４
　副葬品
巻頭図版第５
　（１）勾玉・管玉・ガラス小玉
　（２）斜縁二神二獣鏡
巻頭図版第６
　普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪

図版目次

図版第１　（１）調査地遠景（南から）
　（２）第１埋葬施設検出状況（南西から）
　（３）第２埋葬施設検出状況（南から）
図版第２　第１埋葬施設被覆粘土検出状況（南から）
図版第３　第１埋葬施設副葬品出土状況（南から）
図版第４　（１）第１埋葬施設棺内中央部遺物出土状況（西から）
　（２）第１埋葬施設棺内中央部銅鏡検出状況（上が北）
　（３）第１埋葬施設棺内中央部玉類検出状況（上が北）
図版第５　（１）第１埋葬施設北小口部棺外刀剣出土状況（上が南）

（２）第１埋葬施設西部棺外刀剣・農工具類検出状況（上が東）
（３）第１埋葬施設南東部棺外刀剣・農工具類検出状況（上が西）
図版第６　（１）第１埋葬施設北小口部（南から）
（２）第１埋葬施設柱穴検出状況（北から）
図版第７　（１）第１埋葬施設南小口部柱穴検出状況（南から）
（２）第１埋葬施設北小口部柱穴検出状況（北から）
（３）第２埋葬施設被覆粘土検出状況（北から）
図版第８　（１）第２埋葬施設被覆粘土掘削状況（南から）
（２）第２埋葬施設被覆粘土東西断面（南から）
（３）第２埋葬施設被覆粘土南北断面（西から）
図版第９　（１）第２埋葬施設被覆粘土半裁状況（南東から）
（２）第２埋葬施設被覆粘土除去状況（西から）
（３）第２埋葬施設棺内遺物出土状況（北から）
図版第10（１）第２埋葬施設墓壙底部周溝内礫検出状況（北から）
（２）第２埋葬施設完掘状況（南から）
（３）埴輪棺１（東棺）（東から）
図版第11（１）埴輪棺２（東北棺）検出状況（北から）
（２）埴輪棺２（東北棺）（北から）
（３）埴輪棺２（東北棺）（北から）
図版第12　墳丘西側斜面（西から）
図版第13（１）墳丘西側上段斜面葺石検出状況（西から）
（２）墳丘西側基底平坦面埴輪列検出状況（北西から）
図版第14（１）西側基底平坦面埴輪列検出状況（北から）
（２）西側基底平坦面埴輪列検出状況（上が東）
図版第15（１）斜縁二神二獣鏡
（２）斜縁二神二獣鏡　鏡面
（３）勾玉
図版第16（１）管玉
（２）鉄剣・鉄刀
図版第17（１）第１埋葬施設出土　鉄製農工具
（２）第２埋葬施設・墳丘出土　鉄製農工具
図版第18（１）第２埋葬施設出土　鉇（刀子転用･表面）
（２）第２埋葬施設出土　鉇（刀子転用・裏面）
（３）普通円筒埴輪（集合）
図版第19（１）形象埴輪（集合）
（２）普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪（埴輪棺）
（３）線刻埴輪（埴輪棺）
図版第20　普通円筒埴輪（底部）
図版第21（１）普通円筒埴輪（体部）
（２）普通円筒埴輪
（３）普通円筒埴輪（（２）と同一個体）
図版第22（１）普通円筒埴輪ヘラ記号①
（２）普通円筒埴輪ヘラ記号②
図版第23（１）家形埴輪
（２）蓋形埴輪
図版第24（１）靫形埴輪
（２）不明形象埴輪
（３）円筒棺　蓋Ａ
（４）円筒棺　蓋Ｂ

1　はじめに

金比羅山古墳は、宇治市広野町寺山にかつて所在した直径約 40 mの円墳で、昭和 39 年（1964）に京都府教育委員会が墳丘全面を対象に発掘調査を実施した。そして、調査が実施された同年度末には速やかに調査概報が刊行された（京都府教育委員会 1965）。概報本文の末尾には、いずれ正報告を刊行する旨が記されている。しかし、当時は高度経済成長のただ中にあり、急増する開発行為に対応するため埋蔵文化財包蔵地の記録保存調査は増加し、調査体制の未整備な中で数少ない埋蔵文化財専門職員は対応に忙殺された。そして、その後も埋蔵文化財発掘調査件数は全国的に増加の一途をたどり、金比羅山古墳発掘調査の正報告を刊行する機会は長年にわたって得られなかった。

このたび文化庁から国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金の交付を受け、埋蔵文化財緊急調査事業の一環として金比羅山古墳の出土遺物整理作業及び正報告刊行が可能となった。発掘調査から 57 年を経て調査担当者は既に他界され、また、残念ながら失われた情報もあるが、ここに、昭和 39 年の発掘調査成果及び令和元年度から２年度にかけて実施した出土遺物整理の成果を報告する。

最後になりましたが、整理期間中にご協力を頂いた機関、学識経験者の方々には心から感謝を申し上げます。

（古川）

《調査組織・昭和 39 年度》

調 査 主 体　京都府教育委員会
調査責任者　京都府教育庁文化財保護課長　荒尾利就
調査担当者　京都大学大学院　吉本堯俊
　　京都府教育庁文化財保護課技師　堤圭三郎
調査事務局　京都府教育庁文化財保護課
調 査 指 導　京都大学名誉教授　梅原末治
調査協力者　京都大学考古学研究会会員・奥田哲通・置田正昭

《調査組織・令和元・２年度》

調 査 主 体　京都府教育委員会
調査責任者　京都府教育庁指導部文化財保護課長　森下　衛
調査担当者　京都府教育庁指導部文化財保護課　記念物係主幹兼係長　石崎善久
　　副主査　古川　匠・中居和志
　　技　師　北山大熙・川崎雄一郎
調査事務局　京都府教育庁指導部文化財保護課
調 査 協 力　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員　田村朋美
　　大手前大学総合文化学部教授　森下章司
　　同　現代社会学部准教授　岡本篤志

2　調査の経緯

（1）発掘調査

金比羅山古墳の所在する宇治市は、昭和30年代後半から京阪神の住宅都市として脚光を浴び、市内各地で宅地造成が相次いで行われた。これに伴って著しい人口増加がはじまり、昭和35年から45年にかけて人口は倍増した。南に隣接する城陽市も同様に、この時期に急激な人口増加期を迎えている。この過程の中で、多くの埋蔵文化財包蔵地が破壊された。

金比羅山古墳も、こうした開発ラッシュの一環で宅地造成の対象となり、京都府教育委員会が緊急発掘調査を実施することとなった。しかし、京都府教育庁文化財保護課で最初に埋蔵文化財専門職員として採用された堤圭三郎は、金比羅山古墳発掘調査の期間中、北に隣接する坊主山古墳群の発掘調査を既に担当していた。金比羅山古墳の発掘調査を主に担当したのは、当時、京都大学大学院生であった吉本堯俊氏（のち、筑紫女学園大学文学部教授）である。

発掘調査は昭和39年8月20日から10月18日まで実施された。(注1) 9月23日までは連日作業を行い、それ以降は調査参加者の都合のよい日時を選んで作業が行われた。

吉本氏が最初に現地を視察した8月19日から、調査が完了した10月18日までの現地調査日誌の内容は付表1のとおりである。

（2）整理作業

調査終了後、出土品は京都府立図書館に仮収蔵されたが、昭和59年（1984）に府立山城郷土資料館に移され、現在、同館の収蔵品となっている。同館では金属製品の保存処理も実施された。

令和元年度から2年度にかけて、当課職員が出土遺物の整理作業を実施した。また、昭和39年の発掘調査記録の整理作業も併せて行い、現地で撮影された記録写真(注2)と、調査日誌を確認した。ただし、現地で吉本氏をはじめ調査参加者が作図した実測図については、関係者にもご協力いただき2年間にわたって捜索を試みたものの、残念ながら発見することはできなかった。(注3)

なお、報告にあたっては将来の記録類の発見に備え、遺物が取り上げられた際の本来の注記内容を、極力記載することとする。

（古川）

（参考文献）

京都府教育委員会 1965「金比羅山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』（執筆者：吉本堯俊）

（注）

（1）「概要」には、「調査期間は昭和39年8月21日より10月17日」とされ、調査日誌とはわずかに齟齬がある。

（2）現存する写真は、堤が撮影したカラー写真（巻頭図版）が数枚あるが、大半が白黒写真である。

（3）出土品が山城郷土資料館に移管された際、既に図面は所在不明となっていたようである。

付表１　現地調査日誌（S39.8.19 ～ 10.18）

8/19	吉本一人で現地の下見に赴く。予想以上に墳丘の立派なのにおどろく。墳丘上は、宮址の基壇の土盛やコンクリートがあるだけでなく、瓦、木材などが散乱し、今後の調査の困難さが予想された。歩測で墳丘上の平坦部は径約 20 m、丘は約 40 m、濠を含めると 60 m位であろう。濠の中にも伐採した木材や枯木が投げこまれており、地形測量のおりの難渋がしのばれるような気がした。主体部は粘土槨、一基ならば大型、普通のものであるならば二基とにらむ。さて、この予想―当りますかな？ 〈打ち合わせ会〉実施。
8/20	現在の状態の撮影、カラー、モノクローム（ともに 35㎜）墳丘平坦部の清掃着手。堤技師は宿泊その他の事務に当たった。
8/21	中心点を設定。そこを基点として N―S、E―W の方位に一致せしめて、杭 N・S・E・W を設定。中心点は杭をうたない。 中心点を中心として一辺６ｍの正方形を設定。その範囲で基壇をはがす。本日は厚さ 20㎝のガラ（瓦・木片）層を除去。排土は N・S 側に積む。表面下約 30cm の赤色砂質土が墳丘の盛土を示すものかは、明日追求する。ハニワ片は主としてガラ層あるいは、ガラ層と灰色土層の間にあり、本墳のものであると断定出来ぬが、その蓋然性は高い。 出土遺物：埴輪片　円筒（タガある）、形象、家か楯かユギか・・・ヒレの端のような平板な破片あり　貨幣寛永通宝１ケ
8/21	測量（地形）　坊主山 No. 1 より高さを求める。本墳は＋３ｍ（約）が最高である。
8/22	〈作業〉６ｍ区画内で第二層（灰色土層、但しバラスを含むところあり）のはぎとりを行う。その結果―中心より少し西によってやや湿り気の多い柔い土の部分がみとめられた。盗掘坑かピット（坑）かは明日追及する。 〈測量〉N―S、E―W の方位に一致せしめて、〈E2,E3〉〈W2,W3〉〈N2,N3〉〈SW2〉の７本の杭を設定した。そのうち W3 は tent のそば、E2 は外堤の上、N3 は坊主山１号墳との境界である。本日は主として杭 E 上に平板を据え、東半分を行った。 出土遺物：ハニワ片　円筒、形象 不明鉄片、釘片→ともに新しいものと思われる。
8/23	〈測量〉地形測量続行　N2、W2 を中心に北と西側を主に実測。 〈発掘〉ついに主体部（のひとつか？）出現！粘土槨‼ 本日、中央区の土砂をあげたあと、東トレンチを掘らせたが坑の確認は出来なかった。そこで西トレンチを掘らせると粘土槨の一部が出土。NS － SW の方向にある。中央よりやや西よりであるし、中央区の坑らしいものとの関連は、追及したい。 出土遺物：ハニワ（形象（ユギかタテらしき破片あり）円筒）、方孔銭（不明）破片１
8/24	〈作業〉本日は墳頂の西半分の表土削りを行った。そして、粘土をかなり明らかにする事ができた。長さ約５ｍで、中央部は盗掘のせいか、よくわからない。但し、すぐ判明するだろう。中央部あたりにほぼ槨と平行に明らかに土質の異る境界線が見られる。これが何か、よくわからない。明日、追及する必要あり 〈測量〉小雨と強風のため中止 出土遺物：ハニワ（形象片をふくむ）数片
8/25	本日は小雨のため地形測量は中止、南北両側にそれぞれ１ｍ幅トレンチを拡大したが、しばしば小雨のため、北側の中心線（N － S）以東の部分が残った（この部分は明日 10 時半までに完了の予定）。そして、内部を追及したが、その結果、 ｉ）西側の粘土槨は思っていた程長くのびず、長さ 1.5 ｍ、内幅 50㎝程の小さいもので、その坑も長さ約４ｍ、幅２ｍ程のもので、とうていこの古墳の主体部と考えがたいので、追葬（もしくは並葬）と考え、第２号槨と呼ぶ事とする ⅱ）中央部の汚れた土とバラスの丸くなった部分は、どうやら盗掘坑らしい ⅲ）故に盗坑のもっと下に第１号槨が存在し、その後、第２号槨が形成されたと考えられる。この事は、盗掘坑の西側の線が第２槨の主軸とほぼ平行している事が、盗掘者が槨を発見し、それに沿って坑をひろげたと推測せしめるものと考えられる　出土遺物：埴輪片
8/26	〈測量〉南側を杭 S2 を中心として若干地形測量を行う。 〈作業〉北側の東に１ｍ幅の拡大する部分で、昨日残った部分を排土、同時に内部清掃。ヤグラを組んで写真撮影（槨と盗掘坑）。盗掘坑をほりはじめる、約 20 ～ 30 ㎝掘り下げたが、部分的に粘土が散入しているのみであった。部分的に約 60㎝掘り下げたが、盗掘坑は更に深い。但し、かなり大きな粘土塊が混入しており、またハニワ片がまじっているから、盗掘坑の下に粘土槨がある事は、うたがいあるまい。本日それを確かめる事ができなかったのは残念であった。 出土遺物：ハニワ片（口縁で窓の一部のある破片あり）
8/27	〈測量〉S2 を中心として墳丘の南側を実測、さらに W3 に移って継続したが、中途で終わった。 〈作業〉今日は、第１号槨の追及に終始したといってよい。盗掘の手は徹底的で、おそらく床を除く全体にわたって粘土は全て破壊されている。そして、北隅において、粘土と小バラスと赤土が混じた土塊が出土しているが、それが槨の北端を示すものかどうか？である。南端はまだわからない、おそらくもうすぐ出土するのであろう。今日槨土の混土中よりかなり大きい家とおもわれる埴輪片が出土した。その他タテ？の破片その他あった。 出土遺物：埴輪片、形象片あり
8/28	〈測量〉杭 S2 を中心とし、昨日の誤った部分を再測量した。明日続行の予定。 〈作業〉本日、とうとう第１号槨を確認した。全長 5.2m、内幅 50 ～ 70㎝、方位はほぼ第２号槨と平行。ほぼ北北西である。頭部（北端）と脚部（南端）に土まじりの粘土塊があるのみである。坑はごく狭く、ギリギリのものらしい。 出土遺物：埴輪（形象を含む）
8/29	午前中は雨のため測量は不可能。午後も測量に人手をとられるのが惜しかったので、発掘の方に従事し、本日は、とうとう測量は行わなかった。 〈撮影〉清掃を行い、１・２槨の撮影を行った。 〈発掘〉内部をいよいよほりはじめた ２号―型どおり粘土槨、但し、南端に土器片が封じ込めてある。かなり大きい １号―まだよくわからない、おそらく新開古墳の様な土まじりの粘土塊を両端におくのみという形式のものであった様である　出土遺物：ハニワ破片
8/30	本日は、二槨の清掃を終始した ｉ第１槨のすぐ東に地山の端を発見、それが１ｍほど下がって、西の方へ水平にのびている模様である ⅱ故にそれより東には主体部はないといってよかろう。 ⅲ第２槨　排水溝かも知れぬ石塊が南西と南東（この方は怪しい）に発見―どうのびるのであろうか。 ⅳ槨の南端にちかく（土器に接してすぐ北側に）に何か板状の黒っぽいものがあった、何か不明 出土遺物：ハニワ片
8/31	第２槨においてついに粘土中に陶棺（おそらく亀甲だろう）出現！！第２号の実測を行う。５時以後、槨内を掘りはじめる―そして陶棺出現、一方、第１号槨の坑の平面図を平行して実測
9/1	第１号―坑、トレンチ実測 第２号―落込み粘土（但し、粘土は少ない）を排除、撮影、1/4（西南）切断、裏図の如き粘土を多量に使用し、二回にわたって朱を塗布した様子が明らかである。
9/2	２号槨　1/4 区画を清掃―撮影 坑底は周囲に溝（粘土でみたされている）がめぐっている。1/4（のこりの西側）区画において朱の面まで表面の粘土をはぐ、朱面の端（坑壁に接するところに）に小型の鉄器（ヤリガンナ・カマ）が約 10 ～ 20 点位出土 出土遺物:鉄器、いずれも小型のカマ、ヤリガンナ、（刀子？）
9/3	排土溝上の粘土を除くと下からバラスが姿を見せた。そして側面の朱を追及し、朱の切れたところで、清掃、撮影。その後、朱のついた側面を残して、両端の粘土を排除を始める。

9/4	昨日の清掃の継続、撮影、実測（朱の面）
9/5	SE1/4 区画を清掃、撮影。実測をはさみながら、粘土をほり下げながら中央横断面以南をすべて粘土を排除
9/6	清掃―撮影（断面）、残していた北半分の粘土を排除
9/7	清掃ののち、撮影。平面図（1/5 縮尺）実測―未完了
9/8	昨日未完了の平面図（1/5）を続行し、午後２時に完成。おちこみの上部破片をとりあげはじめる。未完了。
9/9	昨日にひきつづいて破片（おちこみ）のとりあげを続行。ついに筒内遺物―管玉 17 個の検出につとめた。管玉は棺内で移動した模様で、とくに端（南）の１個などは蓋との境にまで至っている。
9/10	清掃―撮影、管玉 1/5 平面図、1/5 平面図―棺底、筒の下底部のみとりあげ完了、東西トレンチ設定、葺石・埴輪出土
9/11	筒の部分の下底の圧痕（粘土上）を実測、撮影。南北端の蓋の下底の部分のとりあげ―これですべての棺の破片をとりあげた事になる。断面図を作成。粘土（棺下）を削除―これですべての粘土を排除。ついにバラスの排水溝にとりかこまれた台のみとなる。なお、本日トレンチの作業は人夫が１号にまわったため延期された。
9/12	排水溝のバラス実測、断面図作成（台） 出土遺物：ハニワのとりあげ
9/13	断面図を作成しつつ、バラスを排除する。１号の土塊を縦断面線に沿って二分し、その断面図をかく。一方、測量班は墳丘の周縁地帯を実測。
9/14	清掃、撮影（１号の半裁土塊断面、２号（全））、半裁土塊排除 出土遺物：ハニワ片、土塊の端より出土。
9/15	１．東側の濠中をつらぬくトレンチはどうやら地山がすぐ出ている様子である。そしてなめらかに濠に達し、そこに角はなかったらしい ２．12 個の円筒ハニワ清掃
9/16	１．円筒ハニワ列清掃完了、 ２．東トレンチ調査―柿木（東周堤上）のところで地山高くなっている、 ３．フキ石清掃未完了。フキ石は家ハニワ出土の中途までで、それ以下にはない。 ４．北側のハニワは出土せず、濠の状態は同一（東側）
9/17	（西側）フキ石およびハニワ清掃、ハニワ列の追及―失敗、確認しえず、円周をなして墳丘をまわっていたのかどうか不確かになった。直線的なものか？ （南側）中段のハニワ列が出土　完全に囲繞している
9/18	あゝ、ついに第一槨―本当の粘土槨出現！夕刻―坊主山１号のうめもどしから戻った人夫が墳丘中央の切断にかかるや、かつて試掘の直下より長大な（６ｍ以上）槨が判然と姿をみせた。あゝ、やんぬるかな！！今にして思えば、怪しいしるしは十分に伺えたものを！冷静に反省の要あり。
9/19	本日は全く第一号槨上の土とりに専心。槨の輪郭線をほゝ〝つかむ。長さ７ｍに及ぶ大きさにおどろく。坑はおそらく９ｍに達するであろう 出土遺物：排土中より家のハニワ片若干
9/20	排土を続行、坑の四周を確認、中央東よりに大きな盗掘坑あり、かなり浅いところで槨の周囲の第一面があるが、明日検討の要あり
9/21	粘土槨の全貌ようやく明らかになる。7.5 ｍに達する壮大なものである 主体部粘土槨の粘土面を出す作業を行なう。槨、中央部東側に直径約１ｍの盗掘抗あり、中から形象はにわ片出土。槨四方、槨外粘土下に刀剣の一部と思われるもの発見されるも詳細不明。
9/22	今日は雨の為、作業を中途で中断したらしい。もう少しであがるのに残念である。
9/23	ふりしきる雨の為、割りつけを中途にしてよす。
9/26	吉・本の２人で平面図作成。１号墳（坊主山）より遺構が出土したので、その方にとられて半分しか出来なかった。
9/27	雨中、テントの下で槨内の発掘をつづける。鏡１、勾玉１、管玉・ガラス玉などが出土。鏡は 15.7㎝径の三角縁にちかいもので、２神２獣、２神のうち、西王母らしいものは三日月状のものを頭部にもつ。勾玉は大型であるが質は悪く、おそらく粗質の碧玉だろう。管玉は良質・大型である。槨端は土の突起があり、我々が「ヘソ」と呼んでいる棺端の小口板のおさえであろう。そのところがいちじるしく上表の粘土面が陥没していた。
9/30	遺物の実測、取り上げ
10/1	遺物はすべてとりあげを完了、西側ハニワは階段下にさらに３個ある、ハニワ棺２ケ出土
10/2	１．第１号槨の南北端を半裁する。断面図の補足（北端）、南側のバラス（粘土中）の 1/10 プラン、N、S の端ですこし作り方がちがう様である。 ２．第２槨下をほる。 ３．ハニワをさがす、東側 ４．埴輪棺の清掃と撮影（但し、明日とりなおし）、北東棺（1/2 プラン）作成、東棺は円筒列中のものやもしれぬ、北東棺はとくにしかり、北東棺は普通の円筒をこわして補足しており、基（または「其」）棺が何かは不明。
10/3	北東棺：撮影・実測―出土状態、補足破片をとりのぞいた状態、下半部のみ、坑 粘土槨：南端のバラス　撮影、実測（1/10）
10/4	北東棺の残っていた仕事を完了、東棺を清掃、東棺付近のハニワを出す、 高校生―南側ハニワを清掃、４個もってかえる
10/5	ハニワ棺・東棺　清掃―撮影　1/2 縮尺実測（平面・断面）とりあげ、坑―撮影、実測　バラス　中央線より西半分を排除
10/6	東ハニワ列４個を取り上げる。粘土槨の南端のバラスのそうじ撮影する
10/10	〈作業〉清掃、バラス撮影、バラス実測（断面図）、朱採集
10/11	粘土槨の両端を清掃し、撮影。粘土をはぐ―途中未完。断面図作成。〈明日〉ハニワをとりあげ、ウルシ（くし）・鉄とりあげ
10/12	記載なし
10/14	記載なし
10/15	記載なし
10/17	バラス（葺石）平面図（1/10）
10/18	調査完了

3　位置と環境

（1）自然環境

京都府南部の山城地域の中央部には、南北約 20 km、東西５～６km の、ほぼ長方形を呈する山城（京都）盆地が所在する。山城盆地は概ね北に高く南に低い地形をなし、中央部の東西を宇治川、南部の南北を木津川が貫流している。宇治市域南部から城陽市域にかけて、山城盆地南部の東縁部では、南北方向の醍醐山地の縁辺部で標高 300m 未満の宇治丘陵が存在し、盆地の平坦な地形に面する低い丘陵地形を形成する。

宇治丘陵は、鮮新～更新統の大阪層群から構成される。丘陵の盆地側には段丘化した何段かの開析扇状地が分布しており、台地の侵食と同様の現象が進むことで丘陵が出現したと想定されている。宇治丘陵では、昭和 40 年代以降、土木建設資材としての山砂利採取が急激に進み、地形の人工改変と破壊が極めて著しい。

宇治丘陵の西部は西に向かって傾く高位段丘堆積物が広く分布している。金比羅山古墳は、西側の山城盆地への眺望の開けた、東から西に傾斜の下がる宇治丘陵の西端部に形成された古墳で、墳頂の標高は約 55.5 mである。

（2）歴史的環境

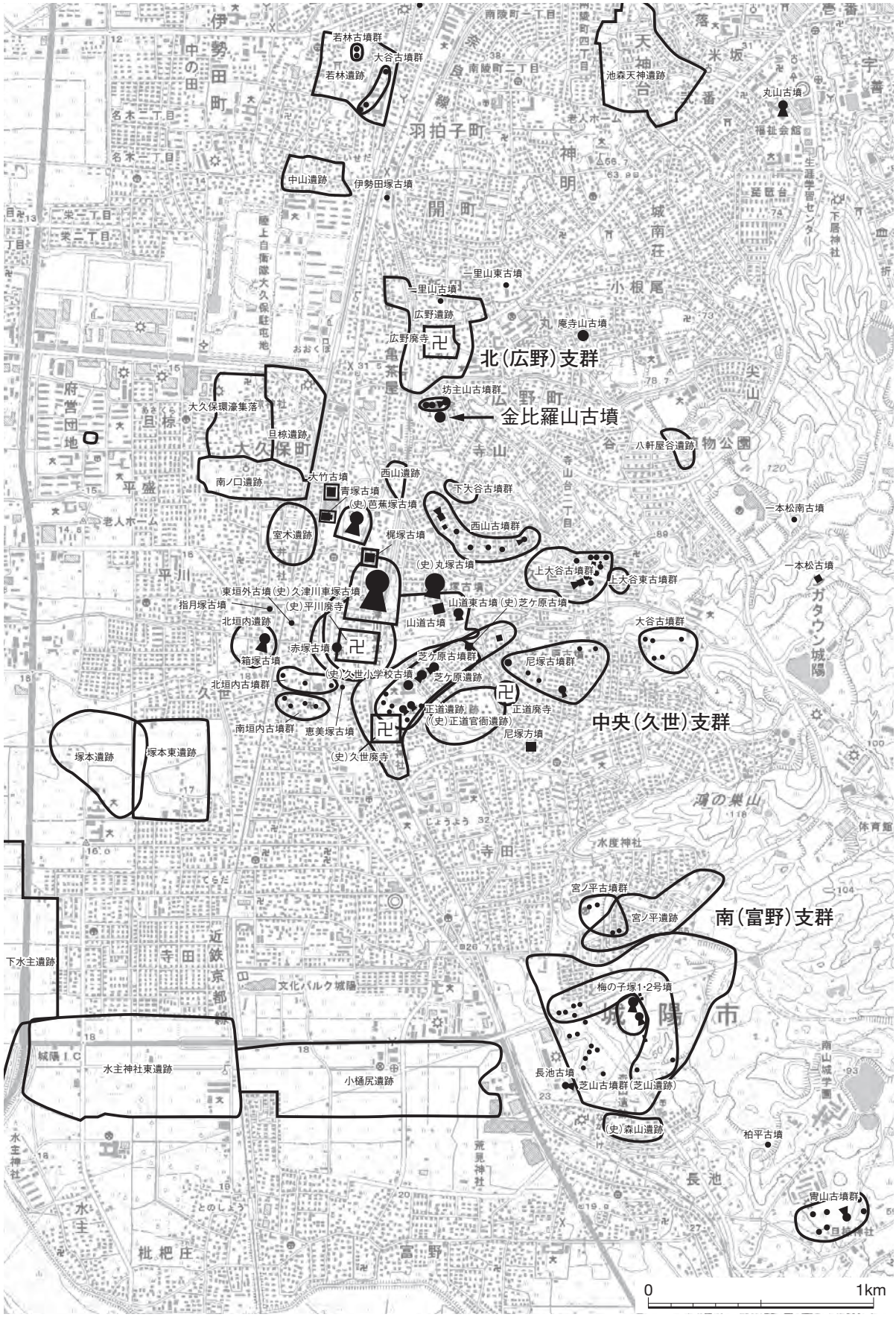
①古墳

金比羅山古墳の位置する宇治市南部から城陽市にかけて、南山城地域で最大級の古墳群である「久津川古墳群」（第１図）が形成された[注1]。各古墳の詳細は付表２のとおりである。金比羅山古墳も久津川古墳群を構成する首長墓の一つに数えられる。

金比羅山古墳の所属する支群は、これまで、「北群」、「広野支群」等と呼称されてきた（杉本 1991・小泉 2002 ほか）。金比羅山古墳の北に近接する後期の坊主山古墳群、金比羅山古墳から約 1.5km 東の山中に位置する前期中葉の 28 m方墳または径 35 m円墳とされる一本松古墳、そして約 700m 北東に位置する前期末の大型円墳、庵寺山古墳等から構成される。この支群は、地形的には宇治川南岸の宇治丸山古墳（37 m前方後円墳）まで含むことも可能である。広範囲に古墳が散在し、地理的なまとまりには欠ける。

久津川古墳群の中心部は、金比羅山古墳が位置する丘陵の南側の、大谷川が形成した扇状地に形成された首長墓群（「中央支群」・「久世支群」）である。古墳時代前期初頭の史跡芝ヶ原古墳（芝ヶ原 12 号墳）をはじめ、前期の西山古墳群、墳長約 180 mを測る南山城地域最大の前方後円墳である中期前半の久津川車塚古墳、中期中葉の前方後円墳である芭蕉塚古墳、大型方墳の梶塚古墳と青塚古墳、大型円墳の山道東古墳などから構成される。久津川車塚古墳は埋葬施設に大和、河内の大型前方後円墳と共通する長持形石棺を採用し、副葬品の質、量も圧倒的である。

南部の「富野支群」では、前期前葉から後葉の首長墳はいまのところ確認されていない。確実な首長墳としては最も古い梅の子塚１号墳は全長 87 mの前方後円墳（前期末葉）、２号墳は全長 69 mの



第１図　金比羅山古墳・関連遺跡位置図（国土地理院『宇治』S=1/25,000）

帆立貝式墳（中期前葉）である。梅の子塚１・２号墳の周囲には中小規模の円墳、方墳から構成される芝山古墳群が形成される。形成時期は前期末から後期末までである。近年、芝山古墳群の発掘調査で埋没古墳がいくつか見つかっており、令和元年の段階で芝山古墳群を形成する古墳は 26 基が確認されている。横穴式石室の増加する後期でも木棺直葬を継続する墓制が特徴的である。

②集落遺跡

集落遺跡では、沖積平野に位置する塚本遺跡や塚本東遺跡、水主遺跡、下水主遺跡で弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器が出土している。塚本東遺跡では、北東から南東に流れる溝から大量の土器が出土し、丹後・丹波地域の特徴を持つ土器が多数含まれる。下水主遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の、木津川に通じる東から西に流れる水路が検出されている。東海系をはじめとする外来の土器が多く出土し、水辺の祭祀を示す遺物も出土した（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018）。小樋尻遺跡では前期初頭の竪穴建物跡が 10 棟検出され、南東から北西に流れる流路では、導水施設と祭祀遺物が多く出土している。ほかに、前期の集落では方形周溝状遺構と竪穴建物が検出された史跡森山遺跡が挙げられる。方形周溝状遺構は首長居館に伴う可能性がある。

久津川古墳群の最盛期である中期前葉から中葉に、集落は激減する（同志社大学歴史資料館 2017）。この時期の集落の減少は山城地域全体に共通するが、久津川古墳群をはじめ古墳造営は活発に行われている。前期の集落が古墳の近くに存在したのとは、様相が大きく異なる。

飛鳥時代以前に、この一帯には「栗隈県」が置かれた（角田・上島・足利編 1982）とされ、『日本書紀』の仁徳紀と推古紀には、「栗隈県」または「栗隈」に大溝を掘るという記述がある。沖積地における古墳時代から飛鳥時代の開発を物語る記事である。

古墳時代後期後半になると、集落の検出件数が一転して増加し、特に芝ヶ原遺跡では 150 棟以上の竪穴建物が検出されるようになる。

③古代寺院・官衙遺跡

古墳時代の首長墓群に次いで建造されるのが、古代氏族の氏寺であった古代寺院である。

北（広野）支群と位置の重複する古代寺院は、広野廃寺である[注2]。中心伽藍は不明であるが、飛鳥時代に創建された。掘立柱建物や井戸の遺構が検出されている。

中央（久世）支群と位置の重複する古代寺院は、史跡久世廃寺と史跡平川廃寺である。久世廃寺は、法起寺式伽藍配置の塔跡・金堂跡・講堂跡が土檀として良好に残る古代寺院跡である。平川廃寺は奈良時代に法隆寺式の伽藍が整備されるが、飛鳥時代まで遡る可能性のある前身施設が存在したとされる。西に赤塚古墳が隣接するが、平川廃寺の築地塀は、赤塚古墳の墳丘を避けて建造されている。古墳を保護する意識があったようである。

南（富野）支群と重複する古代寺院はいまのところ確認されていない。この支群の集団は、飛鳥時代には寺院を造営する力を失っていた可能性がある。

官衙遺跡では、久世評衙・郡衙跡に推定される史跡正道官衙遺跡が挙げられる。同遺跡では、７世

紀後半に総柱掘立柱建物を中心として形成され、７世紀末から８世紀初頭には掘立柱建物を「コ」字形に配置する区画が形成される。

（古川）

（注１）金比羅山古墳を含む一帯の地域に形成された首長墓群の範囲認定及び名称は、研究者によって異なるが、本稿では、現在の宇治市広野町から城陽市富野にかけて展開する一連の首長墓群の総称として、「久津川古墳群」を用いる。

（注２）当地域の古代寺院については、（同志社大学歴史資料館 2010）で各自治体の担当者が内容を整理して記述しているため、主に参照した。

（参考文献）

角田文衛・上島有・足利健亮編 1982『角川日本地名大辞典 26-1 京都府 上巻』総説・地名編

杉本宏 1991「宇治二子山古墳とその周辺」『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市教育委員会

小泉裕司 2002「古墳時代の城陽」『城陽市史』第１巻

同志社大学歴史資料館 2010『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告第９集

京都府立山城郷土資料館 2016『山城の二大古墳群－乙訓古墳群と久津川古墳群－』

同志社大学歴史資料館 2017『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館調査研究報告第 14 集

立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻 2017『畿内の首長墳』

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊

付表２　久津川古墳群を構成する古墳一覧

北（広野）支群

古墳名	所在地	規模・墳形	現状	時期	埋葬施設・出土遺物
若林古墳群	宇治市伊勢田町若林	１号墳 14 m方墳、２号墳 8m 方墳	消滅	後期	須恵器、紡錘車
丸山古墳	宇治市宇治琵琶	37 m前方後円墳	消滅	前期後葉～中期	四獣鏡・刀２・剣１・鉄鏃 50 以上・鉄斧・棒状鉄器・（伝）土師器・須恵器
西山古墳	宇治市小倉町西山	12m 円墳	完存	後期末	横穴式石室
伊勢田塚古墳	宇治市開町		消滅	後期	合口式四注屋根形陶棺
一里山古墳	宇治市広野町一里山		消滅	前期前葉？	円筒埴輪
一里山東古墳	宇治市広野町一里山		消滅	後期	須恵器
一本松古墳	宇治市広野町八軒屋谷	28m 方墳または径 35 m円墳	完存	前期後葉	竪穴式石槨（割竹形木棺）、鏡・土師器・管玉・鉄剣・鉄製工具
庵寺山古墳	宇治市広野町丸山（宇治市指定史跡）	56m 円墳	完存	前期末	粘土槨（箱形木棺）・神獣鏡・刀・剣・土師器・円筒埴輪・形象埴輪（家・盾）・鉄製農工具・漁具
金比羅山古墳	宇治市広野町寺山	40m 円墳	消滅	中期前葉	粘土槨（割竹形木棺･円筒棺）･埴輪棺､斜縁二神二獣鏡･玉類・刀・剣・農工具類・円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（家・蓋・靫）
坊主山１号墳	宇治市広野町寺山	45m 前方後円墳	消滅	後期中葉	組合式木棺直葬、須恵器・埴輪・銅釧・金環・三輪玉・玉類・刀・鉾・鉄鏃・鉄斧・装飾馬具
坊主山２号墳	宇治市広野町寺山	25m 円墳	消滅	後期中葉	須恵器・金環・玉類・鉄鏃
坊主山３号墳	宇治市広野町寺山	径 5m		後期	
一本松南古墳	宇治市広野町八軒屋谷	20m 円墳		－	

中央（久世）支群

古墳名	所在地	規模・墳形	現状	時期	埋葬施設・出土遺物
大竹古墳	宇治市大久保町大竹／城陽市	70m 方墳	半壊	中期	須恵器・形象埴輪
箱塚古墳	城陽市平川古宮・久世北垣内	90m 前方後円墳	全壊	前期末葉～中期前半	三角縁神獣鏡・画文帯四獣鏡
丸塚古墳（史跡）	城陽市平川鍛治塚・車塚	80m 帆立貝形墳（周濠・周堤）	完存	中期	円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（家・甲冑・蓋）
久津川車塚古墳（史跡）	城陽市平川車塚・鍛治塚・横道・山道	180 m前方後円墳（周濠・周堤・造出）	完存	中期中葉	竪穴式小石槨（長持形石棺）、三角縁神獣鏡・画文帯神獣鏡・四獣鏡・玉類・石製模造品（合子・盤・刀子）・滑石合子・鉄製甲冑・刀・剣・槍・鉄鏃・円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（家・蓋・盾・草摺・靫・馬）、土師器、土製品
梶塚古墳	城陽市平川鍛治塚・横道	51 m方墳（周濠・周堤）	半壊	中期中葉	竪穴式石槨（木棺）、籠形土器・鉄製農工具（ミニチュア）・石製模造品（鎌）・形象埴輪（家・蓋・草摺・靫・馬）
芭蕉塚古墳（史跡）	城陽市平川室木・茶屋裏	114m 前方後円墳	完存	中期後半	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（家・盾・甲冑・蓋・靫・囲形）鉄製甲冑
山道古墳	城陽市平川山道	35m 方墳	全壊	中期前半	埴輪（短甲・草摺）
山道東古墳	城陽市平川山道	57m 円墳	完存	中期中葉	円筒埴輪・形象埴輪
指月塚古墳	城陽市平川指月	円墳	全壊	後期	（伝）須恵器・埴輪・鉄刀
青塚古墳	城陽市平川室木	35m 方墳	半壊	中期後半	乳文鏡・四獣鏡。横剥板革綴短甲・玉類・鉄製武器・埴輪（靫・蓋・家）
赤塚古墳	城陽市平川古宮	32m 円墳	全壊	中期	須恵器・形象埴輪（家・動物・人物）・小札（挂甲）・鉄製武器・鉄製農工具・玉類
東垣外古墳	城陽市平川東垣外	円墳	半壊	後期	須恵器
芝ヶ原 1 号墳	城陽市久世芝ヶ原	17m 円墳	完存	後期	
芝ヶ原 2 号墳	城陽市久世芝ヶ原	20m 円墳	完存	後期	
芝ヶ原 3 号墳	城陽市久世芝ヶ原	16m 円墳	完存	後期	
芝ヶ原 4 号墳	城陽市久世芝ヶ原	16m 円墳	完存	後期	
芝ヶ原 5 号墳	城陽市久世芝ヶ原	34m 前方後円墳	完存	後期後葉	
芝ヶ原 6 号墳	城陽市久世芝ヶ原	45m 前方後円墳	完存	後期中葉	
芝ヶ原 7 号墳	城陽市久世芝ヶ原	25m 円墳	完存	後期	
芝ヶ原 8 号墳	城陽市久世芝ヶ原	円墳	半壊	後期	短甲
久世小学校古墳（史跡・9 号墳）	城陽市久世芝ヶ原	25m 円墳	完存	中期後半	埴輪
芝ヶ原 10 号墳	城陽市久世芝ヶ原	35m 円墳	消滅	中期前葉	粘土槨（割竹形木棺）、剣・槍・鉄鏃・針・埴輪（竪・甲冑・蓋・家・動物）
芝ヶ原 11 号墳（狐塚古墳）	城陽市寺田大谷	58m 帆立貝形	消滅	中期前葉	粘土槨（割竹形木棺・箱形木棺）、三角縁神獣鏡・短甲・滑石刀子・形象埴輪（囲形・家・蓋・盾）・鉄製農工具
芝ヶ原古墳（史跡・12 号墳）	城陽市寺田大谷	21m 前方後方墳	半壊	～前期初頭	四獣形鏡・銅釧・玉類・鉄鏃・鉇・刺突具・土師器
芝ヶ原 13 号墳	城陽市寺田大谷	方墳 24m	完存	後期	須恵器
恵美塚古墳	城陽市久世南垣内	14m 方墳	消滅	後期後半	土師器・須恵器・鉄鏃
上大谷 1 号墳	城陽市久世上大谷	前方後円墳	完存	後期中葉	横穴式石室か
上大谷 2 号墳	城陽市久世上大谷	12m 円墳	完存	後期	
上大谷 3 号墳	城陽市久世上大谷	18m 円墳	完存	後期	須恵器
上大谷 4 号墳	城陽市久世上大谷	11m 円墳	完存	後期後半	土師器
上大谷 5 号墳	城陽市久世上大谷	11m 円墳	完存	後期	
上大谷 6 号墳	城陽市久世上大谷		消滅	～前期初頭	き鳳鏡・土師器・鉄製農工具
上大谷 7 号墳	城陽市久世上大谷	16m 方墳	消滅	～前期初頭	
上大谷 8 号墳	城陽市久世上大谷	33m 前方後円墳	完存	前期後葉	粘土槨？
上大谷 9 号墳	城陽市久世上大谷	16m 方墳	消滅	中期	
上大谷 10 号墳	城陽市久世上大谷	14m 方墳	消滅	中期	鉄剣・鉄鎌
上大谷 11 号墳	城陽市久世上大谷	方墳	消滅	須恵器	
上大谷 12 号墳	城陽市久世上大谷	15m 方墳	消滅	後期後半	須恵器・土師器・金環・玉類・鉄釘
上大谷 13 号墳	城陽市久世上大谷		消滅	中期後半	珠文鏡・土師器・埴輪・刀子・鉄釘
上大谷 14 号墳	城陽市久世上大谷	方墳	完存	後期	
上大谷 15 号墳	城陽市久世上大谷	10.5m 方墳	消滅	前期後半	飛禽文鏡・刀子・玉類・竪櫛
上大谷 16 号墳	城陽市久世上大谷	消滅	埴輪		
上大谷 17 号墳	城陽市久世上大谷	13m 円墳	消滅	後期後半	金環・鉄釘・須恵器・土師器
上大谷 18 号墳	城陽市久世上大谷	円墳	完存		
上大谷 19 号墳	城陽市久世上大谷	16m 円墳	完存	埴輪（形）	
上大谷 20 号墳	城陽市久世上大谷	12m 円墳	完存		
上大谷東 1 号墳	城陽市久世上大谷	円墳	完存		
上大谷東 2 号墳	城陽市久世上大谷	円墳	完存		
上大谷東 3 号墳	城陽市久世上大谷	円墳	完存		
上大谷北古墳	城陽市久世上大谷	円墳	完存		
西山 1 号墳	城陽市久世下大谷	82m 前方後方墳	消滅	前期後葉	粘土槨（割竹形木棺）、土師器・針状鉄器
西山 2 号墳	城陽市久世下大谷	25m 方墳	消滅	前期中葉～	粘土槨（組合式木棺・割竹形木棺）、三角縁神獣鏡・四獣鏡・剣・鉄鏃・銅鏃・石釧・靫残欠・農工具
西山 3 号墳	城陽市久世下大谷	円墳	消滅	前期	

古墳名	所在地	規模・墳形	現状	時期	埋葬施設・出土遺物
西山４号墳	城陽市久世下大谷	25m 円墳	消滅	前期後葉	粘土槨、画文帯神獣鏡・内行花文鏡・玉類・槍・鉇
西山５号墳	城陽市久世下大谷	18m 円墳	消滅	前期	
西山６号墳	城陽市久世下大谷	円墳	消滅	前期	
西山７号墳	城陽市久世下大谷	55m 前方後円墳	消滅	前期後半	石釧・（伝）銅鏡 , 石臼
下大谷古墳群	城陽市久世下大谷	１号墳 18 m方墳、２号墳 16 m方墳		中期前半	１号墳：埴輪・蓋形埴輪・管玉・鉄製農具・鉄製武器・人骨２号墳：管玉・土師器
南垣内古墳群	城陽市久世南垣内		全壊		２号墳：須恵器、鉄刀
北垣内古墳群	城陽市久世北垣内		消滅・全壊		１号墳：須恵器、埴輪
尼塚１号墳	城陽市寺田尼塚	30m 円墳	消滅	前期後半	組合式木棺直葬、鉄製工具
尼塚２号墳	城陽市寺田尼塚	16m 円墳	消滅	前期～中期前半	刀子・玉類・土師器
尼塚３号墳	城陽市寺田尼塚	18m 円墳	消滅	前期～中期	土師器・銅鏃・石製鏃・鉄槍・漆塗弓
尼塚４号墳	城陽市寺田尼塚	35m 前方後円墳	消滅	前期後半	粘土槨（割竹形木棺）、内行花文鏡・石釧・管玉・ガラス玉・鉄製工具・不明鉄器
尼塚５号墳	城陽市寺田尼塚	8m 円墳	消滅	奈良	和同開珎・土師器
尼塚６号墳	城陽市寺田大谷	15m 円墳	完存	前期	（伝）石釧
尼塚７号墳	城陽市寺田大谷	15m 円墳	完存	前期	
尼塚古墳	城陽市寺田尼塚	40m 方墳	半壊	前期後葉	粘土槨（割竹形木棺）、土師器・石釧・管玉・筒形銅器・銅鏃・鉄槍・鉄製農工具

南（富野）支群

古墳名	所在地	規模・墳形	現状	時期	埋葬施設・出土遺物
梅の子塚１号墳	城陽市富野北ノ芝	87m 前方後円墳	完存	前期末葉	土師器・鉄剣・円筒埴輪・朝顔形埴輪・鰭円筒埴輪
梅の子塚２号墳	城陽市富野中ノ芝	65 m前方後円墳	完存	中期前葉	円筒埴輪・朝顔形埴輪
芝山１号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	10m 方墳	消滅	中期～後期	須恵器・鉄斧
芝山２号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	8.5m 方墳	消滅	中期～後期	
芝山３号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	11m 方墳	消滅	中期～後期	須恵器・土師器
芝山４号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	17.4m 円墳	消滅	中期～後期	須恵器・鉄製品
芝山５号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	20m 円墳	消滅	中期～後期	
芝山６号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	7.4m 円墳	消滅	中期～後期	須恵器
芝山７号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	9.3m 円墳	消滅	中期～後期	須恵器・刀子
芝山８号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	5m 方墳	消滅	中期～後期	須恵器
芝山９号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝		消滅	中期～後期	須恵器・土師器
芝山 10 号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝			中期～後期	
芝山 11 号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	10m 方墳	消滅	中期～後期	須恵器・銀環
芝山 12 号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	10m 方墳	消滅	中期～後期	須恵器
芝山 13 号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	方墳	消滅	中期～後期	須恵器
芝山 14 号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	方墳	消滅	中期～後期	須恵器
芝山 15 号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝	方墳	消滅	中期～後期	埴輪（形）
芝山 16 号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝		消滅	中期～後期	埴輪
芝山 17 号墳	城陽市富野北ノ芝・中ノ芝				
柏平古墳	城陽市富野柏平	20m 方墳か	消滅	後期	須恵器
宮ノ平１号墳	城陽市寺田宮ノ平	25m 方墳	消滅	中期後半	粘土槨（割竹形木棺・組合式木棺）、紡錘車・有孔円板・形象埴輪（盾・靫・草摺）・玉類
宮ノ平２号墳	城陽市寺田宮ノ平	29m 方墳	消滅	中期後半	砥石・鉄製武器・鉄製工具・不明鉄器・臼玉・形象埴輪（家・盾・鉄刀・鶏）・刀子
宮ノ平３号墳	城陽市寺田宮ノ平	33m 円墳	消滅	中期後葉	円筒埴輪、土師器、須恵器
宮ノ平４号墳	城陽市寺田宮ノ平・大川原	15.5m 方墳	消滅	中期後半	須恵器・埴輪（家）
宮ノ平５号墳	城陽市寺田宮ノ平・大川原	10.5m 方墳	消滅	中期後半	須恵器
宮ノ平遺跡	城陽市寺田宮ノ平・大川原			後期～平安	土師器・須恵器・埴輪・臼玉・刀子・鉄釘・石鏃
長池古墳	城陽市富野中ノ芝	50m 前方後円墳	消滅	後期中頃	櫛目文鏡・須恵器・土師器・鉄鏃・玉類・耳環
冑山１号墳	城陽市観音堂冑畑	30m 前方後円墳	消滅	後期中葉	横穴式石室（木棺）、須恵器・形象埴輪（家・蓋・靫・鶏・動物・人物）・馬具・鉄製武器・鉄鎌・玉類
冑山２号墳	城陽市観音堂冑畑	15m 円墳	消滅	後期	須恵器（装飾付須恵器）・土師器・馬具・鉄鏃・U 字鋤先・鉄製工具
冑山３号墳	城陽市観音堂冑畑		消滅		須恵器
冑山４号墳	城陽市観音堂冑畑	（伝）50 m前方後円墳	消滅		埴輪・（伝）須恵器
冑山５号墳	城陽市観音堂冑畑				（伝）埴輪
冑山６号墳	城陽市観音堂冑畑		消滅		須恵器・土師質亀甲形陶棺
冑山７号墳	城陽市観音堂冑畑	10m 墳形不明			

※京都府遺跡地図第４版の掲載項目に、山城郷土資料館 2016、立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻 2017 に掲載された情報を加筆して作成した。

4　現地調査

現地調査については、先述のとおり調査担当者が既に他界され、現地で作図された実測図も行方不明であるため、正確な情報を得ることはできない。しかし、詳細な調査日誌と記録写真が残っているため、以下、項目ごとに「概要」の報文を一部再録し、さらに記録の検討から判明した新たな情報をつけ加えることとする。再録文は、字体を小さくし、「」付きで表記することとする。

なお、調査日誌に書かれた情報は、本来、来るべき正報告書の刊行に備えて記述された内容で、日誌に描かれた模式図等を公表する意図は無かったと思われる。しかし、古墳が消滅し現地の図面類が失われた現状では、客観的な事実を報告するためには日誌の情報に頼らざるを得ない。したがって、必要な図面に限り、情報を補足した上で提示するものとする。

（1）墳丘の調査

①墳丘本体

「墳丘は径約 40 m、墳頂平坦部は径約 20 mの円墳である。墳丘の斜面には葺石がしかれており、さらに葺石の最下段にそって円筒埴輪列がめぐっている。この円筒埴輪列には家形その他の形象埴輪をふくむ。また墳丘の西側では、直線的な配列をもつ約 30 個の円筒埴輪列があり、おそらく墳丘の墓域を劃する目的のために設置されたもので、東側の周濠と共通する意義を有するものではあるまいか。葺石最下段以上（円筒埴輪列で囲繰されている範囲）の墳丘、つまり墳丘全体がほとんど盛土で築成されており、丘陵端の自然地形を利用してはいるが、それは盛土の土量軽減のためのものではなかったようである。そして約 10 mの幅を有する外壕は墳丘を半周して、墳丘と東側の丘陵とをへだてている。」（吉本・「概要」）

発掘調査着手前の写真及び日誌の内容によると、金比羅山古墳の宅地造成が決定されるまで、墳頂部には神社の社殿が建てられていた。そして、社殿基壇の築造に伴う墳丘上平坦面の削平が為され、側面は土盛で拡張され、墳丘上部の地形は改変されていた（第 2 図・第 3 図）。

「概要」本文の「墳頂平坦面は径約 20 m」という記述は、昭和 39 年の調査当時の現況を記述したものであり、本来の墳頂部平坦面の標高はより高く、平面規模はもっと小さかったと考えられる。

平坦面は既に削平されていたが、第 1 埋葬施設の盗掘坑から家形埴輪、靫形埴輪等の形象埴輪破片、円筒埴輪片が出土しており、墳頂部平坦面に樹立されていたものと推測される。

墳丘斜面の調査は、墳頂部平坦面から東西南北の斜面に一本ずつ細いトレンチを設定して実施したようである（昭和 39 年 9 月 17 日付け日誌・第 3 図）。北側斜面の様相は不明だが、東、西、南斜面には葺石が残存していた。そして、墳丘斜面テラス及び基底平坦面で埴輪列が検出されると、トレンチを拡張して埴輪列を追求している。

西斜面では基底平坦面で埴輪列を確認し、上述の「概要」本文のとおり、直線的な配列の約 30 個の埴輪を検出している。また、西斜面では、墳丘斜面テラス面で家形埴輪と蓋形埴輪の破片が出土している。このうち、家形埴輪はテラス面に樹立されたものと判断された。

南斜面では、墳丘斜面テラス面で円筒埴輪列を検出している。「概要」図面（第 2 図）では、26 本

の埴輪が図示されている。

北斜面のトレンチについては記述がなく、葺石及び埴輪は検出されなかったようである。

東斜面では、墳丘斜面テラス面では埴輪が出土していないが、基底平坦面で円筒埴輪列が検出されている（第２図）。

埴輪列と墳丘斜面の写真が撮影されたのは西斜面が主であるが、複数の写真を参照すると、西斜面最下段の埴輪列は、設置に際して、事前に布堀が施されたことが写真から読み取れる（巻末図版第12～14）。また、葺石は、上段斜面で検出されたが、下段の斜面では確認されていない（９月10日付け日誌・第３図）。

なお、「概要」報文には、「葺石より上、すなわち墳丘全体が盛土で成形されていた」という記述があるが、日誌には、墳頂部の盛土をある程度掘り下げた段階で「地山」が検出されたとある（８月30日付け日誌･付表１）。調査中に堆積状況の認識が変わった可能性があるが､それを示す記録は無い。

以上の検討から、「概要」で墳丘について報告された内容に補足すると、①墳頂部平坦面が神社建物の基壇造成に伴い削られるなど､墳丘上部の地形は改変されていた､②墳丘の構造は二段築造であった、③上段斜面には葺石が検出されたが、下段斜面では葺石が確認されなかった、④墳頂部平坦面、テラス面、基底平坦面には埴輪列が樹立されたと推定され、墳頂部平坦面とテラス面の埴輪には、形象埴輪が含まれていた、ということが挙げられる。

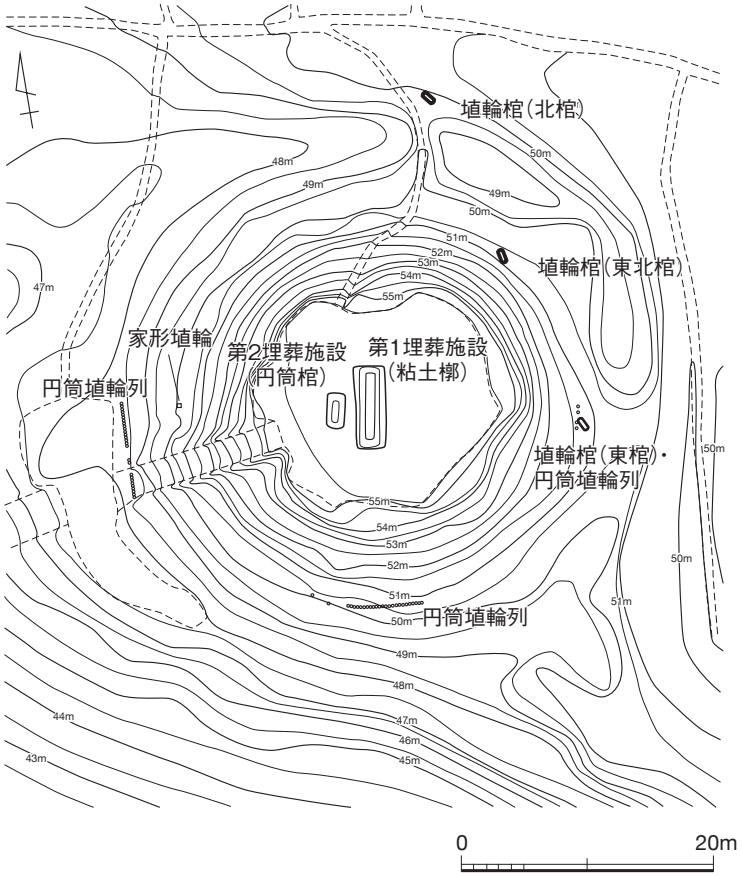
（２） 第１埋葬施設（粘土槨）

①墓壙及び粘土槨

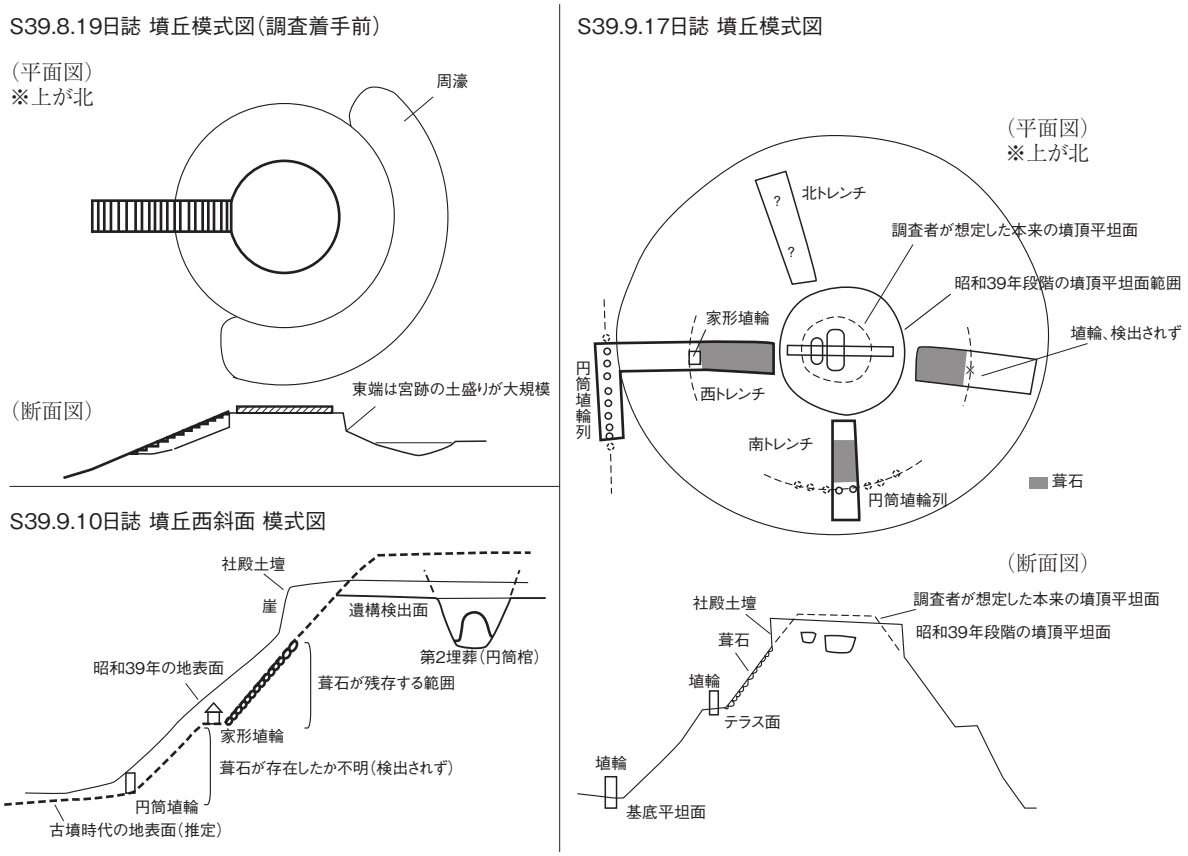
「墳頂平坦部のほぼ中央に位置し、主軸がほぼ南北に平行する全長７ｍ を越す粘土槨である。南北約８ｍ、東西約３ｍ、深さ約１ｍの壙を穿ち，その壙底に幅約１ｍ、深さ約 35cm の断面Ｕ字形の溝を穿ち、そこに粘土をしいて棺床となし、その上に木棺を安置し、更に粘土を被覆した遺構であったと考えられる。木棺は、朱の附着範囲から南端の幅約 80cm、北端の幅約 90cm、全長 6.7 ｍの割竹形であり、木棺の身部（下半部）が先述の溝状の粘土棺床中におさめられるという安置の方法をとったと推定される。また南に傾斜しているところから北枕ではなかったかと考えられる。先述の溝状のくぼみが壙の南壁に接するところが、更に 20cm ほど深く掘りこまれ、その中に礫がつめられていて、一種の排水施設と考えられるが、外部には通じていない。（中略）粘土を全て排除すると、壙底に４個の孔を発見した。孔は径 15～20cm、深さは約 20cm の柱穴状で、棺の四隅に接する如く壙底に穿れたものである。その間隔は、北端の二孔間は 1.2 ｍ、南端は 1.5 ｍで、南北は西側が 5.9 ｍ、東側が 6.05 ｍの間隔を保っている。孔中は粘土で充填されていたが、もしこの粘土が棺を被覆する際に充填されたものであるならば、棺の安置の前後いずれかの時に、何か柱状の物体が棺の四隅に樹立されていたと考えねばならないであろう。それが棺の安置のためのものか、それとも棺をおおう施設の類のものであるかは、にわかに判別しがたい。」（吉本・「概要」）

遺構面の検出時、第１埋葬施設直上の広い範囲に盗掘坑が検出された。しかし、幸い、盗掘坑は粘土槨本体には至っておらず、東側が一部破壊されたに留まった。

第１埋葬施設は掘り込み墓壙である。墳頂部上面が削平されていたため、盛土の途中から掘り込ま



第２図　金比羅山古墳　墳丘測量図（S=1/600・「概要」掲載図に一部加筆）



第３図　金比羅山古墳　墳丘模式図

れたのか、墳丘完成後に掘り込まれたのかは定かではない。粘土槨の木棺木質は全く残っていなかったようである。木棺の平面形状は、側板が小口板の位置よりも突出した「H」形となり、一見、組合式木棺のようにも見えるが、撮影アングルの低い写真を見ると、木棺の断面形状が弧を描くことは明らかである。したがって、「概要」のとおり割竹形木棺として差し支えはない。

昭和 39 年 9 月 27 日付け日誌（付表１）では、割竹形木棺の小口板が小口部より内側にあり、抑えの土が充填される構造と記述されている。また、同日誌には、両小口部直上の被覆粘土が著しく陥没していたことも指摘されている。

粘土除去後に検出された四隅の柱穴については、「概要」本文の説明が簡潔で要を得ている。ただし、その後増加した粘土槨の調査事例では、粘土槨内の棺設置に確実に伴う柱穴が検出された例は見られない。その一方で、覆屋の可能性が指摘される事例は、一定、蓄積されている。金比羅山古墳と近い時期では、八幡市ヒル塚古墳第１埋葬施設（粘土槨）が挙げられ（八幡市教育委員会 1990）、二段墓壙のテラス上でごく浅い柱穴が検出されている。この柱穴については、主体部に構造物を作って殯が実施されたとする説（土生田 1998）、さらに、天蓋や垂帳、衣帛と同様なものを主体部上に覆う柱と推測する説（日高 2012）がある。後期になると類例がさらに各地で増加するが、府内では、与謝野町滝岡田古墳で横穴式石室内部の四隅に柱穴が検出され、殯屋の可能性が指摘されている（加悦町教育委員会 1995）。金比羅山古墳の柱穴も上記と同様の施設に伴う遺構の可能性が高いと推測する。

②副葬品（棺内）・棺内の状況

「（棺内出土品）鏡　玉類　硬玉の勾玉 2 個。碧玉の勾玉 2 個。碧玉の管玉約 20 個。ガラス小玉（紺色）約 30 個。なおガラス小玉と碧玉管玉は破砕していたものがあり，正確な総数を期しがたい。棺内の遺物は，移動した管玉破片若干をのぞけば，すべて南半にかたよって存在し，北半には見られなかった。」（吉本・「概要」）

出土状況については、近景写真（モノクロ）の組み合わせやカラー写真から、ある程度の情報を得ることができる（第５図）。

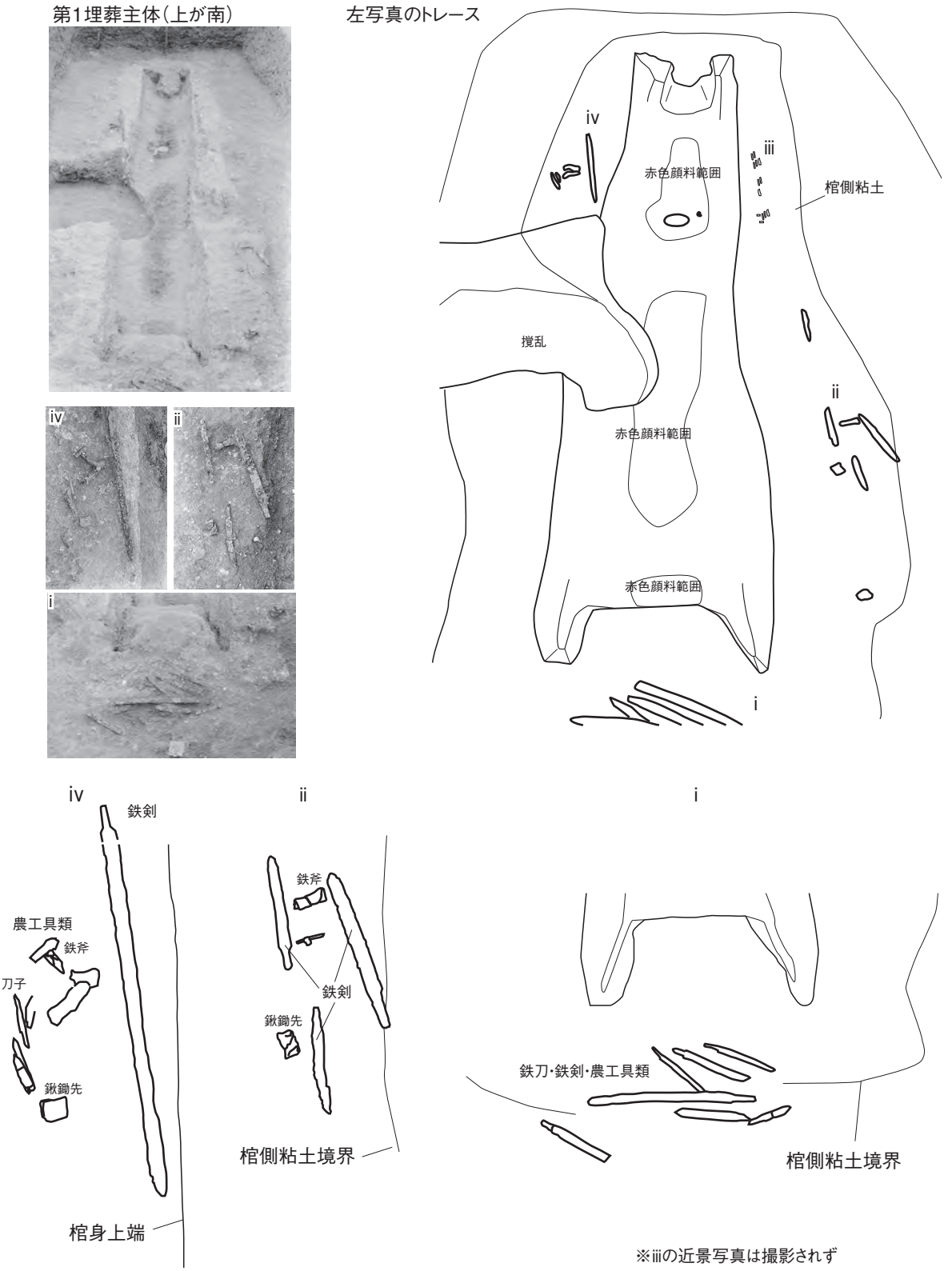
鏡は鏡面を表にした状態で出土した。また、カラー写真を見ると、鏡の周囲には黒褐色土が分布する。詳細を知るすべは無いが、仮に黒褐色土が漆膜の痕跡であれば、鏡が漆塗の有機質容器に入っていた可能性がある。または別の有機質の副葬品の痕跡であろう。

勾玉のうち、「碧玉の勾玉」２点は、碧玉製勾玉１点と緑色凝灰岩製勾玉１点である。鏡の近くから出土したのは緑色凝灰岩製勾玉で、碧玉製勾玉はそれより南の位置から出土した。また、翡翠製勾玉２点は、さらに南から出土している。勾玉はそれぞれ離れた位置から単体で出土した。

管玉は、大型の管玉が翡翠勾玉（第５図２）からやや西の地点で出土している。また、小型の管玉は翡翠製の勾玉（第５図３）の付近で出土しているが、この管玉が現存するどの資料にあたるのかは不明である。管玉も、散らばった状態で出土している。

ガラス小玉の正確な出土位置は、残された写真からは細かな土塊との区別が付き難く、不明である。

副葬品の周囲に広がる赤色顔料の成分は不明である。鏡から勾玉３までの赤色顔料は濃く、それより南では薄くなる。「概要」では、棺は北側が高いとされ、被葬者の頭位は北向きで鏡の付近と推定



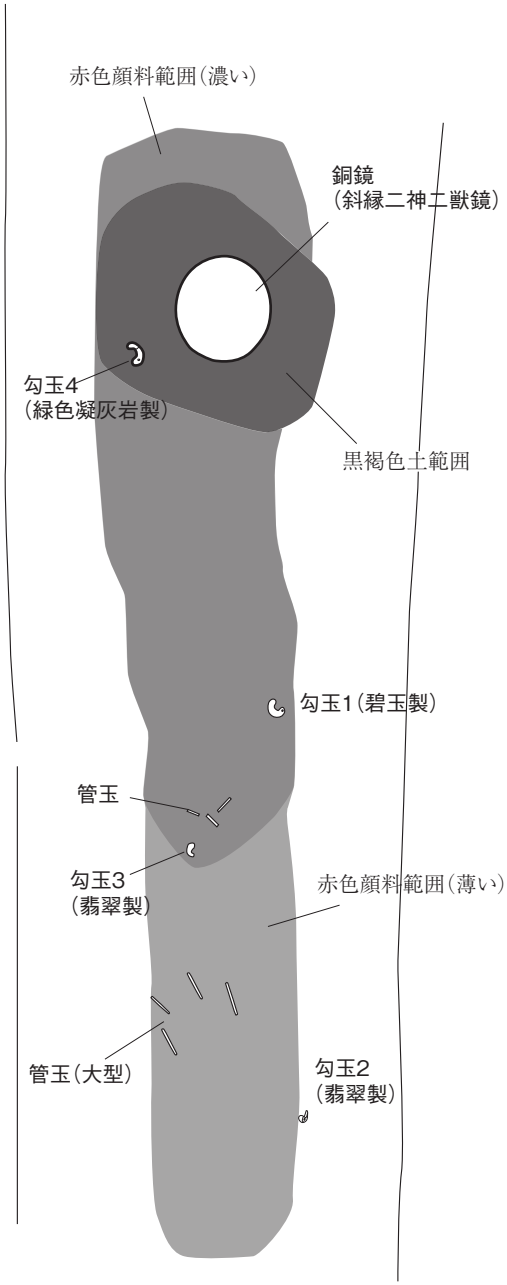
第４図　第１埋葬施設棺内・棺外副葬品出土状況（縮尺任意）

されるため、被葬者の上半身側に赤色顔料を多く塗布したと考えられる。

なお、特に「概要」では指摘されていないが、鏡ほかの副葬品が出土した地点だけではなく、その北側にも同規模の赤色顔料の分布が認められる（第４図）。したがって、第１埋葬施設には二体埋葬

棺内出土状況近景写真（上が北）

(左写真　トレース図)



第５図　第１埋葬施設棺内副葬品出土状況（縮尺任意）

の可能性が想定される。また、棺内北小口部付近にも小さく赤色顔料が分布するが、他の二地点と比べると色調は薄い。

③副葬品（棺外）・棺外の状況

「棺外　櫛　竹製の竪櫛５個、鉄器　刀剣　刀１本と剣 15 本、 農工具約 50 点、棺外の遺物は、先述の溝状のくぼみの肩のところに棺をとりまくように並置されて、粘土中より出土した。但し、南端および東西両側面の南半分には存在しなかった。出土状態から次の４グループに区分できよう。ⅰ北端部　剣を中心とし若干の農工具をふくむ。ⅱ西側北半部　剣５本と若干の農工具。ⅲ西側中央部　農工具類。ⅳ 東側中央部　刀１ 本、農工

具類、櫛。（吉本・「概要」）

棺外出土副葬品について補足すると、北端部（ｉ）の出土刀剣類は、剣だけではなく刀２点を含む。西側中央部（iii）で出土した農工具は、遺物注記から推測すると（p.38 付表５）、鉈１点、刀子１点、器種不明鉄製品１点、さらに写真から、鉄斧と鍬鋤先を含むようである。東側中央部（iv）で出土した武器は刀ではなく、剣が正しい。また、東側中央部で出土した農工具は、遺物注記から刀子１点、蕨手刀子４点、鎌２点、器種不明鉄器３点、さらに出土状況写真から、鉄斧、鍬鋤先も含むようである。

（２）第２埋葬施設（円筒棺）

①墓壙及び円筒棺

「第一槨の西側に位置し、主軸線もほとんど平行している。南北約４m、東西約２m、深さ約１m の壙は、第一槨の壙と接してはいるが、それを犯してはいない。壙の底部周辺に排水溝を設けて礫をつめているが、外部には通じていない。壙中には粘土槨を設け、その中に埴製円筒棺が埋置されていた。この棺は、長さ 1.65 m、径 55cm の円筒形をなす主体部の両端に、径 60cm、高さ 25cm の半球形の蓋部をかぶせたもので、組み合せた全長は約２mに達し、優に成人を埋葬しうる大きさをもっている。」（吉本・「概要」）

墳頂部平坦面が削平を受けていたため、地表面をわずかに掘り下げた段階で、墓壙掘方と被覆粘土が検出された。被覆粘土と円筒棺の中央部が陥没していたが、それ以外は旧状を保っていたようである。

第２埋葬施設の墓壙は第１埋葬施設の墓壙と主軸方向が一致している。第１埋葬施設と同様に、北頭位で埋葬されたと考えられる。また、赤色顔料が棺床粘土上面と棺側粘土上面に塗布された（第６図上段）。そして、円筒棺の棺身及び棺蓋内面にも赤色顔料が付着している。

こうした情報から埋葬施設部の構築順序を次のように復元する。ｉ　墓壙を掘削。ii　墓壙底面の四周に溝を堀り、礫を充填する。iii 棺床粘土を敷き赤色顔料を塗布。iv 円筒棺を設置。ｖ 棺側粘土を敷き、周溝を埋めて赤色顔料を塗布し、農工具を副葬する。そして、ivからｖの間に被葬者と副葬品を棺内に納める。円筒棺内の赤色顔料は、埋葬施設内への棺の設置前、あるいは被葬者と副葬品の納入直前に埋葬施設内で塗布される。そして、vi 円筒棺を被覆粘土で覆って密封。vii 墓壙を埋め戻す。

②副葬品（棺内）・棺内の状況

「棺内　玉類　碧玉管玉 17 個　移動しているので原位置は不明である。その色、質、大きさは第一槨のものに非常に類似している。棺内の遺物はこの一種のみである。」（吉本・「概要」）

棺内で管玉が移動した理由は記されていないが、円筒棺の中央部が陥没していることから、その際に移動した可能性が高い。１点は、南側の蓋まで移動していた。

また、出土状況近景写真を見ると、淡色の管玉と濃色の管玉が混在する状況が見て取れる（第６図下段）。前者が緑色凝灰岩製、後者が碧玉製である可能性が高い。

③副葬品（棺外）

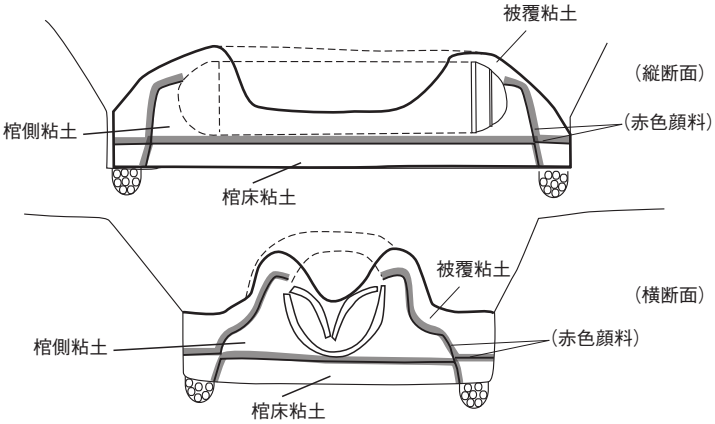
被覆粘土分割状況（南から）

棺側鉄製農工具・墓壙底面周溝礫（南から）

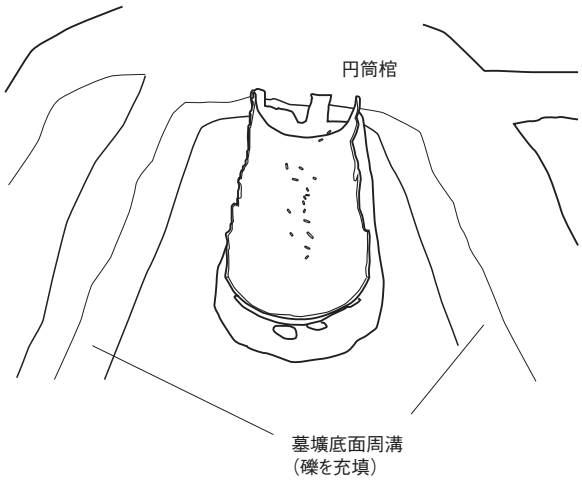
鉄製農工具出土状況（左:南から・右:上が北）

墓壙底面周溝上面（北から）

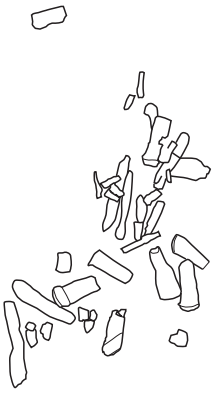
S39.9.1日誌 第2埋葬施設
模式図（写真情報等をもとに原図表現に一部加筆）



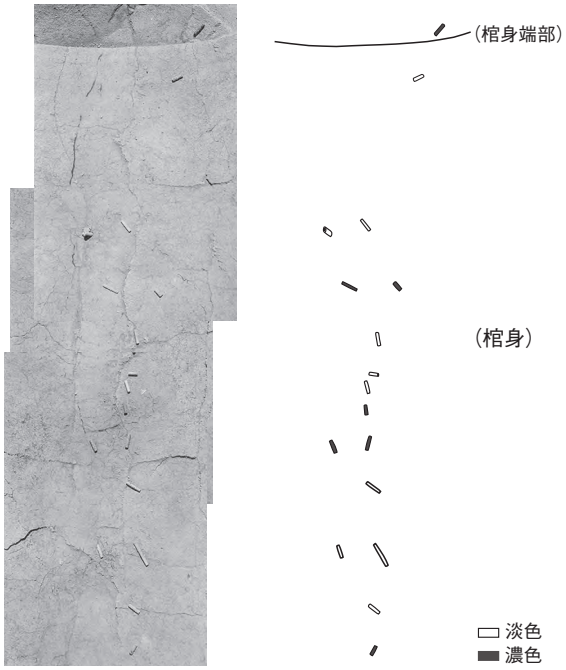
棺内管玉検出状況(上が南)



棺外農工具検出状況（上が北）



棺内管玉検出状況近景(上が南)



第６図　第２埋葬施設棺内副葬品出土状況（縮尺任意）

「棺外鉄器農工具約 30 点　槨の北西端の粘土中よりかたまって出土した。」（吉本・「概要」）

第２埋葬施設では、棺外の副葬品は、一箇所からまとまって出土した農工具である。このうち器種が判明した資料として、鉇、鉄斧、刀子、蕨手刀子、鋸、錐、鎌、手鎌が挙げられる。

（３）埴輪棺

「墳丘をめぐる円筒埴輪列と同じ位置に２基，外湟をへだててその堤上に１基，計３ 基の円筒埴輪棺が出土した。

東棺　墳丘の東側の円筒埴輪列中にあり，主軸を北北西に置いている。主体部は花形部をうちかいた朝顔形円筒埴輪の円筒部で，その花形部をのぞく長さ 75cm，底径 32cm である。５条の突帯がめぐらされ，円孔を有する。周囲には主体部の花形部および他の円筒埴輪片が添加されているが，全長は約１ m にすぎない。

東北棺　墳丘の東北の円筒埴輪列中にあり，主軸を東棺と同様に北北東においている。高さ 65cm，口縁部径 28cm，底径 23cm の通常の円筒埴輪を転用したもので，これも他の円筒埴輪片を添加しているが，全長は約 90cm にすぎない。

北棺　調査終了後にブルドーザーによる工事がはじめられたが，それによってもう１基の円筒埴輪棺が出土したという知らせを城南高校生の山崎時叙・安田恒雄両君より得，直ちに赴いて辛うじて下半部の破片を採集した。位置は墳丘の北側の外湟をへだてた堤の上で，主軸は北西の方向を指している。東棺と同様に朝顔形円筒埴輪を転用して主体部となし，それにその花形部や他の円筒埴輪片を添加して全長約 1.2m の棺を構成していたものらしい。以上各棺とも棺ぎりぎりの壙を浅く穿って埋置しており，遺物はまったく見られなかった。」（吉本・「概要」）

「概要」では、第一・二埋葬施設と埴輪棺はさほど時期をへだてないと推定している。実際には、墳丘築造から数世代の期間を経て埴輪棺が埋葬される事例が他にあるが、発掘調査時の記録写真を見ると、埴輪棺東棺は墳丘埴輪列と隣接しており埴輪列を意識して配置した可能性が高く、埴輪の樹立と埴輪棺の埋葬時期は近いものと想定される。実際に、第６章で報告する埴輪の検討でも、埴輪棺に使用された埴輪と、墳丘に樹立された埴輪の間に、明確な時期差は認められない。

なお、「概要」や調査日誌には記されていないが、「概要」に掲載された墳丘平面図（本報告第２図に再掲）の周濠の等高線を見ると、埴輪棺東北棺の南側と東棺の東側は、周濠内ではあるが土橋状に地形が高まっている。他の記録が無いため詳細は不明であるが、周濠の渡り堤だった可能性がある。

（古川）

参考文献

八幡市教育委員会 1990『ヒル塚古墳調査概報』

加悦町教育委員会 1995『滝岡田古墳』加悦町埋蔵文化財調査報告書第 22 集

土生田純之 1998『黄泉国の成立』　学生社

日高慎 2012「葬送儀礼」『古墳時代研究の現状と課題』上　同成社

5　副葬品

「概要」で報告された埋葬施設出土品の数量は下記のとおりである。

・第一埋葬施設（粘土槨）

（棺内）　銅鏡（舶載・斜縁二神二獣鏡）１面・硬玉製勾玉２個・碧玉製勾玉２個・碧玉製管玉約 20 個・ガラス小玉約 30 個

（棺外）　竪櫛５個・刀１本・剣 15 本・農工具約 50 点

・第二埋葬施設（円筒棺）

（棺内）　碧玉製管玉 17 個　（棺外）　農工具約 30 点

ただし、発掘調査終了から現在に至るまで脆弱な遺物が風化して滅失し、さらに一部の遺物が混在した。また、整理作業で器種認定が変更になったものもある。現在、確認されている副葬品は下記のとおりである。

・第一埋葬施設

（棺内）斜縁二神二獣鏡１点、翡翠製勾玉２点、碧玉製勾玉１点、緑色凝灰岩製勾玉１点、ガラス小玉 32 点（実測可能資料 30 点及び２個体分の破片）

（棺外）鉄刀２点、鉄剣 10 点、鉄製農工具類（鉇１点、斧４点、刀子４点、蕨手刀子５点、鑿２点、針６点、鎌４点、鍬鋤先４点、器種不明４点）

・第二埋葬施設

（棺外）鉄製農工具類（鉇４点、斧２点、刀子１点、蕨手刀子５点、鋸１点、錐１点、鎌４点、手鎌２点、器種不明３点）

・墳丘

（墳丘南側テラス埴輪列か）鎌１点

・帰属不明（第１及び第２埋葬施設出土品が混在）

管玉 27 点（実測可能資料 24 点及び３個体分の破片）

（１）斜縁二神二獣鏡

第１埋葬施設棺内中央部から出土した[注1]（第７図・第８図）。直径 15.7cm、重さ約 455g である（保存処理後の重量）。厚さは外縁で 0.60cm、外区内縁で 0.35cm、内区の図像のない部分で 0.10cm をはかる。斜縁二神二獣鏡の出土例は国内外で 50 例以上が知られ（村松 2004・実盛 2009）、金比羅山古墳の近隣では大阪府安満宮山古墳、弁天山Ｃ１号墳出土鏡などがある。

この資料の三次元計測にあたっては、大手前大学史学研究所の技術協力を得た。[注2]

本資料は完形で、遺存状況は概ね良好であるが、外縁部および外区外側の表面が劣化して剥落している箇所がある。鏡面及び鏡背面ともに、柔らかい金属光沢を放つ濃緑灰色の安定した色調を呈する。鋳上がりも良好できめの細かい均一な鋳肌である。鏡背面は獣像の文様表現は比較的鮮明であるが、神像は、顔面など肉厚な部分の文様表現が曖昧で不鮮明である。

第７図　斜縁二神二獣鏡　RTI 画像（S=4/5・大手前大学史学研究所提供）

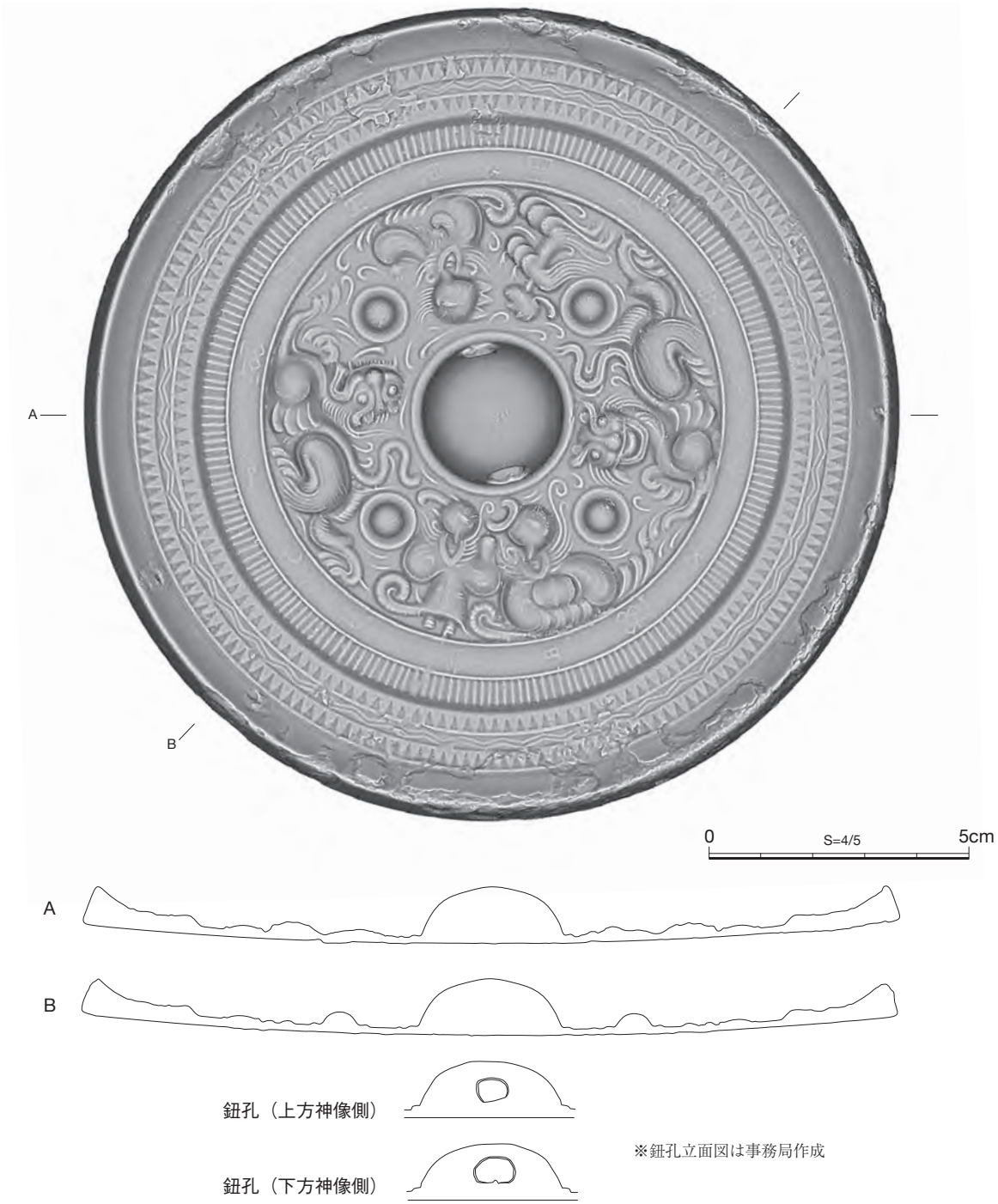
鋳造後の研磨は、鏡面、外縁、外区、乳、鈕に施されている。また、内区の図像では、神像の顔面や袂、獣像の目鼻や前後肢などの肉厚な箇所も光沢がある。特に、最も高く隆起して面積も大きい獣像の前肢付け根と後脚部分は顕著である。光沢の度合いがほかの箇所と似ることから、図像にも研磨が施されている可能性が高いが、手ずれの可能性もある。

①鏡背面の構成

中央に鈕と鈕座があり、内区は乳によって４つに区画され、侍仙を伴う神像と獣像を交互に１体ずつ配置し、圏線を介して銘帯、さらに固線を介して櫛歯文帯で構成されている。外区内側斜面は無文で、外区は鋸歯文＋複波文＋鋸歯文＋外周突線で構成され、短く立ち上がって斜縁となる。

②鈕

鈕は、扁平な半球状を呈し直径 2.67cm、高さは鏡背面から 1.05cm をはかる。鈕孔は図の上を起点として 11.5° 左に傾く。鈕孔の径は縦 0.45cm、横 0.51cm である。鈕孔の形状は、下辺部がやや直線だが全体的には楕円形を呈する半球形である。その下辺は鈕座の約 0.1cm 上にある。孔縁は整えられ、平滑で丸みを帯びているが、下方神像側の下辺部に鋳張の痕跡が残る（第９図②）。鈕座は素文で、



第８図　斜縁二神二獣鏡　三次元計測放射輝度陰影図・断面図（S=4/5・大手前大学史学研究所提供）

径 3.08cm、鏡背平坦面からの高さは 0.15cm ある。縁は圏線状に小さく隆起している。

③乳

乳は 4 個ある。半球形で、素文の円座をそなえる。乳の底径 0.60cm、鏡背面からの高さ 0.40cm。径 1.04cm の円座の縁は、鈕座と同様に圏線状に小さく隆起している。

④内区図像

神像は、侍仙を伴い２体ある。図上側の像は、鋸歯状の三山冠をかぶり、丸顔で頬鬚と顎鬚があり、頸を向かって右に 90° 近く上方に傾け鈕を見上げる。両袂は大きく隆起し、両手は裾から出して胸前へかざす。下部左端に細かい刻みをもつ尾の形に似た雲気表現がなされる。「東王父」である。左側に側面形の正座をした侍仙を配している。

図下側の像は、双巻冠をつけ、上の像と同様に丸顔で、やはり頸を傾げているが傾きは上の像ほどでない。両手は袂中にあり、腹部が膨らむ。「西王母」である。下端左端に上の像と同じ雲気表現が取り付く。侍仙は正面形で左手を挙げるが、手指は表現されない。頭部には中央の突起が大きい冠が表現される。単抱の裾からは、神像と同様に雲気が伸び、両足も表現されている。

獣像は、図右側の像の頭部が正面を向き、左側の像が斜め上方を見上げる。頭部以外の姿勢と胴体の形状は共通だが、右側の像の尾は筋状に表現され、先端が二股に分かれる。左側の像の尾は筋がなく、先端も丸く収まる。また、右側の像は後肢から伸びる毛が大きく立体的に表現されるのに対し、左側は少し小さく控えめな表現である。

そしてこれら図像の余白は、渦文や巴文で埋められている。いずれも描線は流麗であるが細く、力強さには欠ける。

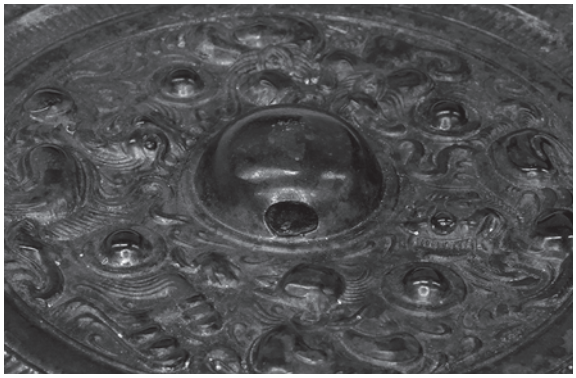
⑤銘帯

銘帯は、蒲鉾形にふくらむ形態が特徴的で、幅 0.45cm を測る。銘文の最初の「吾」字体の中央は、図の上からは右に 52°、鈕孔の主軸方向からは右に 63.5° の位置からはじまり、逆時計回りに「吾作明竟自有紀。令人長命宜孫子。大吉。」の 16 字が鋳出される。隷書風の字体でやや不鮮明であるが、十分判読は可能である。字の大きさは不均一で、中ほどの「紀」、「令」が高さ 0.72 ～ 0.73cm、最も小さい末尾付近の「大」が 0.24cm と開きがあり、他の字の大きさはこの範囲内に散在する。字間は文頭「吾」と「作」の間が 0.17cm、中盤の長と命の間が 0.16cm と広いが、その他はほぼ 0.11 ～ 0.13cm で揃っている。櫛歯文は放射状に、圏線より低く鋳出される。櫛歯一単位の幅は 0.08cm で、1.0cm の幅に 6 本程度の密度で施文されている。左に 163° の箇所で櫛歯が潰れ、隣と一部がつながっている。

⑥外区

外区は、外向きの鋸歯文、複波文、外向きの鋸歯文の 3 帯で構成され、その外側に外周突線をめぐらしている。鋸歯文は全般に凸部が丸みを帯びる。鋸歯文は一単位の幅が約 2mm で、整然と割り付けられている。内側の鋸歯文は、左に 12° の箇所で単位が不明瞭となる（第 9 図③）。鈕孔と同じ方向である。また、同方向で、内・外区の境界の段差と外縁が、他の部分と比してわずかに低い。錆による変形の可能性もあるため確証は無いが、湯口を示す可能性がある。複波文は右に 83°、左に 53°、68° の箇所で内と外の波線の境界が曖昧になる。外縁内側斜面は、ゆるく湾曲して頂部にいたる。外縁はよく研磨がほどこされていて、外側斜面と内側斜面・鏡面のなす 2 稜は軽く面取りされている。

（古川）


①鈕孔（上方神像側）

②鈕孔（下方神像側）

③外区鋸歯文（鈕孔方向）

④内・外区段差・外縁（鈕孔方向）

第９図　斜縁二神二獣鏡細部写真

（２）石製玉類

出土した石製玉類は、勾玉４点、管玉 30 点を確認した。石材の認定はいずれも目視での確認であり、理化学的分析を経たものではない。

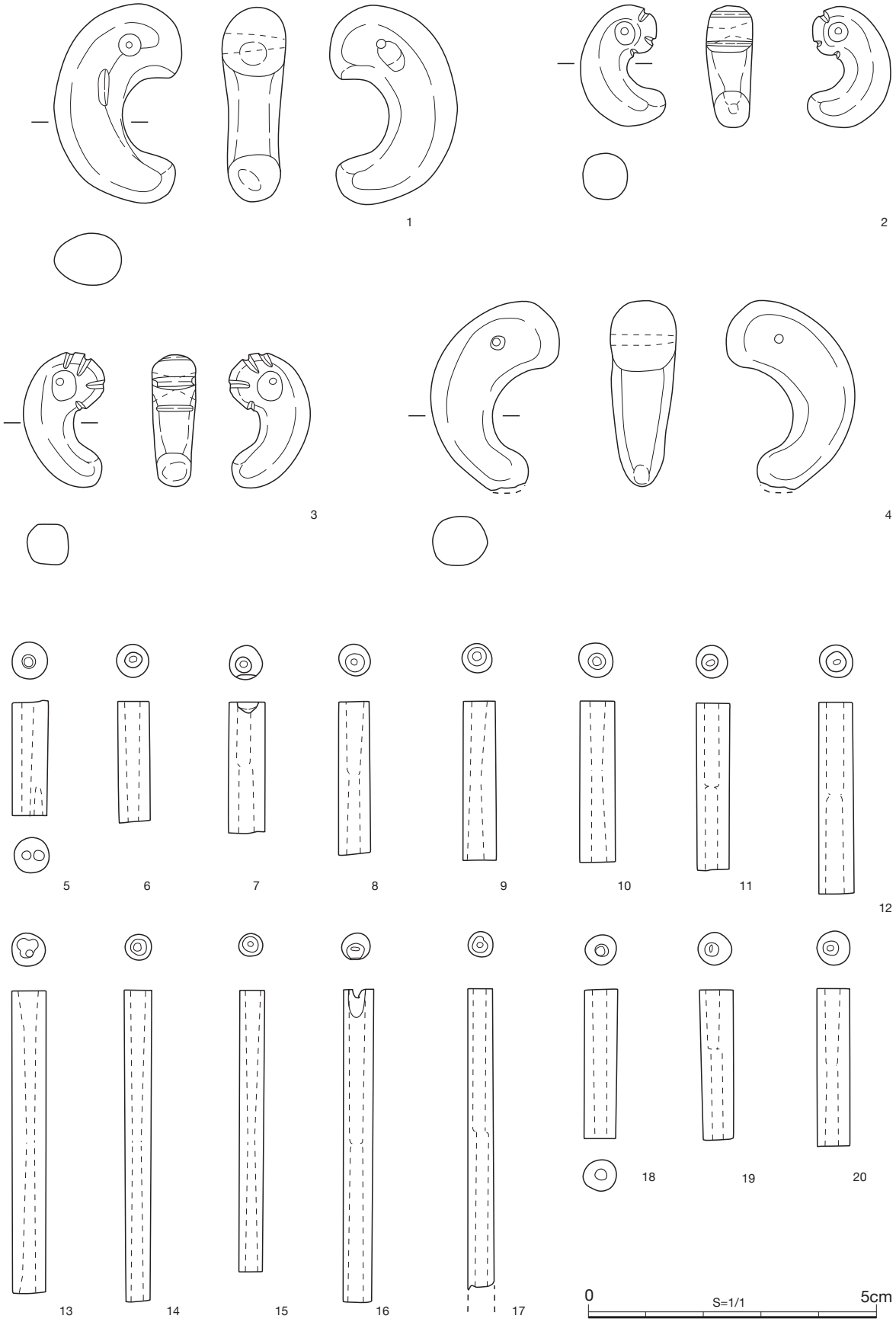
①勾玉（第 10 図）

勾玉は、碧玉製１点、翡翠製２点、緑色凝灰岩製１点である。いずれも完形またはほぼ完形である。

１は、碧玉製の勾玉である。全面研磨による整形により、断面は楕円形となり、素材または整形時の稜は残らない。片面穿孔であり、穿孔部は断面すり鉢状に開く。穿孔部は表面が径 0.4cm、裏面が 0.15cm となり、裏面には穿孔時の剥離と見られる窪みが残存する。

２・３は、翡翠製の勾玉であり、他の２点に比べて小ぶりの勾玉である。色調はいずれも濃緑色で、透明感のある石材を使用する。両者とも、いわゆる丁子頭の勾玉であり、表面穿孔部から裏面穿孔部にかけて放射状に直線的な線刻が入る。線刻は断面 U 字型で幅 0.1cm 程度であり、２は３本、３は４本の線刻を有する。平面形は概ね同形であるが、２に対して３の方が腹部の抉りが浅く直線的な平面形をとる。断面形は２が円形に近い形状となるのに対して、３は隅丸方形に近い形状となる。穿孔は両者とも両面穿孔であり、穿孔部は、１、４にくらべて大きくすり鉢状に開く。

４は緑色凝灰岩製の勾玉である。中央部で二つに割れ、下端部 0.1cm 程度を欠損する。出土状況写真を見るに副葬時は完形であったものと推定される。穿孔部は片面穿孔である。研磨面の剥落が顕著



第 10 図　石製玉類 1 （S=1/1）

であるが、剥落を免れた背面および腹面に朱とみられる赤色顔料が付着する。本来は広範囲に付着していた可能性が高い。本資料は棺内に塗布された赤色顔料に接触した状態で出土していることから、この顔料が付着したものと推測される。法量は１と共通するが、材質の違いにより密度が低く、重量は１の 9.4 ｇに対して、4.3 ｇと半分にも満たない。

②管玉（第 10 図・第 11 図）

管玉は、実測可能な資料が 24 点現存する。碧玉製８点（５～ 12）、緑色凝灰岩製 15 点（13 ～ 26、28）、朝鮮半島系の「未定Ｃ群」（藁品 1997・大賀 2010）とされる資料１点（27）となる。(注3)

碧玉製管玉（5 ～ 12）は、色調が深緑色を呈する。外径は 0.55 ～ 0.6cm、全長 2.0 ～ 3.3cm でほぼ均一である。

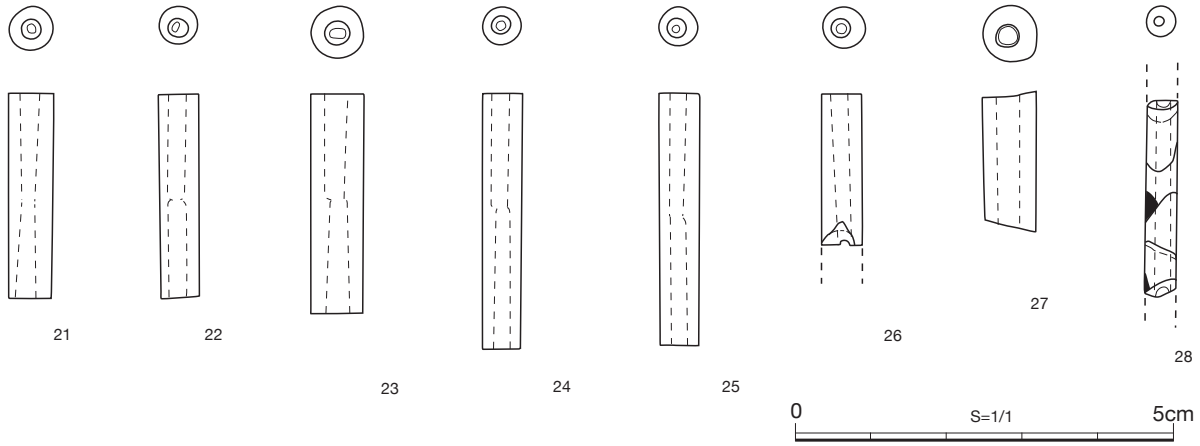
緑色凝灰岩製管玉（13 ～ 26、28）は、色調が淡い灰緑色を呈する。外径が 0.4cm から 0.7cm までばらつきがあるが、全長は、碧玉製管玉と近似する、２cm から３cm 程度の短身の一群と、５～ 5.5cm 程度の長身の一群に二分される。 28 は４の勾玉と似た密度の低い質感で重量が軽く、４と同様に剥落が激しいが、表面の一部に赤色顔料の付着が確認された。

未定Ｃ群管玉（27）は、色調が灰緑色で、淡い色調をベースとし、濃い色調の部分が混ざる。光沢と重厚感がある。また径が大きく身が厚い。

出土品は全て完成品であり、未製品は含まれない。器体は側面と端面が全て研磨により平滑に整形され、研磨工程以前の製作痕跡はほとんど確認できない。19、20 は、一部に整形工程時の稜が薄く残るが、研磨工程が抜け落ちているわけではないため、稜の残存は研磨の精度の違いであると判断し、完成品とした。遺存状態は良好で完形品が大半を占めるが、16、26 は片方の端部が折損し、28 は両端を折損している。また、16、７は端部の縁辺が欠けている。破損はすべて研磨面の上からであり、研磨工程を終えた後の破損である。

５、18、６、26、27 は片面穿孔であるが、それ以外はすべて両面穿孔である。穿孔部の径は、最大 0.2cm から 0.3cm 程度で、穿孔が進むにつれて穿孔部の径が窄まるものと、穿孔の始まりと終わりで穿孔部の径が大きく変わらないものがある。穿孔方向は器体の長軸に対して平行かわずかに斜行し、両面穿孔の場合は器体の中央部付近で貫通する。穿孔が長軸に対して斜行するため、上端からの穿孔と下端からの穿孔がそれぞれ食い違うように接する場合があり、貫通部分の径は最も狭いもので 0.1cm 程度である。５、13、16 は、穿孔のやり直しが確認される。５は穿孔の失敗を受け、反対側の端部から改めて穿孔を行い貫通させている。13 は同一の端部に対して最低３回の穿孔をやり直した痕跡が確認される。

（川崎）



第 11 図　石製玉類２（S=1/1・黒塗りは赤色顔料）

付表３　石製玉類一覧

勾玉

報告番号	実測番号	全長（cm）	全幅（cm）	厚さ（cm）	石材	重量（g）	備考
1	勾玉１	3.4	2.2	1.1	碧玉	9.4	完形、片面穿孔
2	勾玉２	2.1	1.5	0.8	翡翠	3.9	完形、丁子頭勾玉、両面穿孔
3	勾玉３	2.3	1.4	0.75	翡翠	4.1	完形、丁子頭勾玉、両面穿孔
4	勾玉４	(3.3)	2.25	1.1	緑色凝灰岩	4.3	ほぼ完形、片面穿孔、赤色顔料付着

管玉

報告番号	実測番号	全長（cm）	全幅（cm）	石材	重量（g）	備考
5	K1	2.0	0.6	碧玉	1.3	完形、片面穿孔、
6	K23	2.1	0.55	碧玉	1.5	完形、両面穿孔
7	K22	2.25	0.6	碧玉	1.7	完形、両面穿孔
8	K2	2.65	0.55	碧玉	2.0	完形、両面穿孔
9	K3	2.65	0.55	碧玉	1.3	完形、両面穿孔
10	K4	2.8	0.6	碧玉	1.8	完形、両面穿孔
11	K21	2.9	0.55	碧玉	1.9	完形、両面穿孔
12	K20	3.3	0.6	碧玉	2.0	完形、両面穿孔
13	K5	5.3	0.6	緑色凝灰岩	3.2	完形、両面穿孔
14	K6	5.4	0.45	緑色凝灰岩	2.1	完形、両面穿孔
15	K8	4.9	0.4	緑色凝灰岩	1.4	完形、両面穿孔
16	K18	5.4	0.5	緑色凝灰岩	2.0	穿孔部欠損、両面穿孔
17	K19	(5.2)	0.45	緑色凝灰岩	2.0	先端部折損、両面穿孔
18	K7	2.6	0.55	緑色凝灰岩	1.6	完形、片面穿孔
19	K9	2.6	0.6	緑色凝灰岩	1.3	完形、両面穿孔、整形時の稜が残る
20	K14	2.8	0.55	緑色凝灰岩	1.3	完形、両面穿孔、整形時の稜が残る
21	K10	2.7	0.6	緑色凝灰岩	1.4	完形、両面穿孔
22	K11	2.7	0.5	緑色凝灰岩	1.3	完形、両面穿孔
23	K15	2.9	0.7	緑色凝灰岩	2.3	完形、両面穿孔
24	K16	3.4	0.5	緑色凝灰岩	1.4	完形、両面穿孔
25	K17	3.3	0.5	緑色凝灰岩	1.8	完形、両面穿孔
26	K13	(2.0)	0.55	緑色凝灰岩	1.0	先端部欠損、片面穿孔？
27	K12	1.9	0.7	未定Ｃ群	1.7	完形、両面穿孔
28	K24	(2.6)	0.45	緑色凝灰岩	0.4	両端部欠損

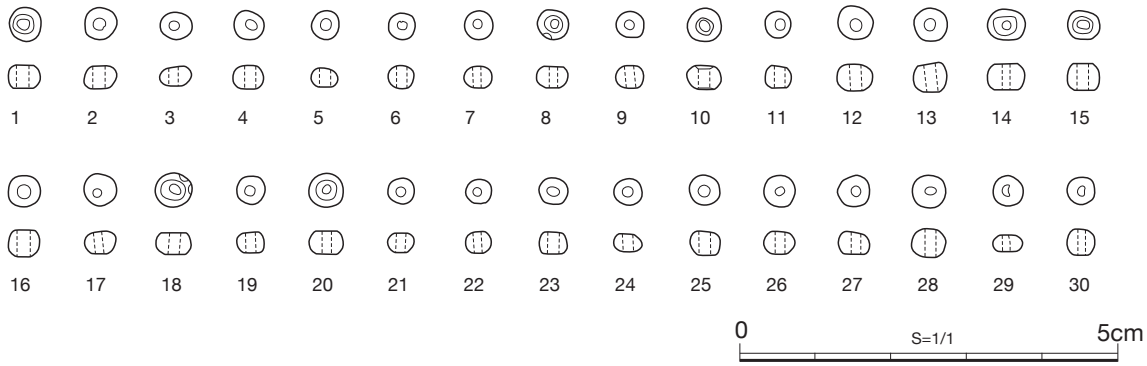
（３）ガラス小玉（第 12 図）

ガラス小玉は、すべて第１埋葬施設棺内から出土しており、現状では実測可能な資料が 30 点（第 12 図）、そして破片資料２個体分が確認できる。「概要」によると、粉砕したものがあったとあるこ

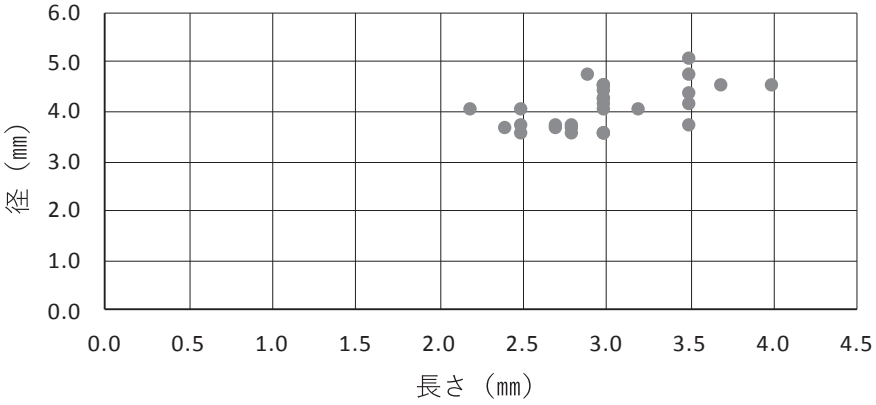
とから、元の総数はさらに多かったことがわかる。なお、ガラス小玉の保管状況は、残りの良い30点を連結して糸を通した円環状であった。ガラス小玉の実測番号は円環の結び目から順番に取り上げたものであるが、出土状況を反映しているかは不明である。

出土したガラス小玉の種類は、附編の田村氏による分析のとおりで、全て中アルミナカリガラス(Group PI)である。すべて淡青色で透明度が高く、円孔部に対して気泡が平行となっていることから、引き伸ばし法による製作である。

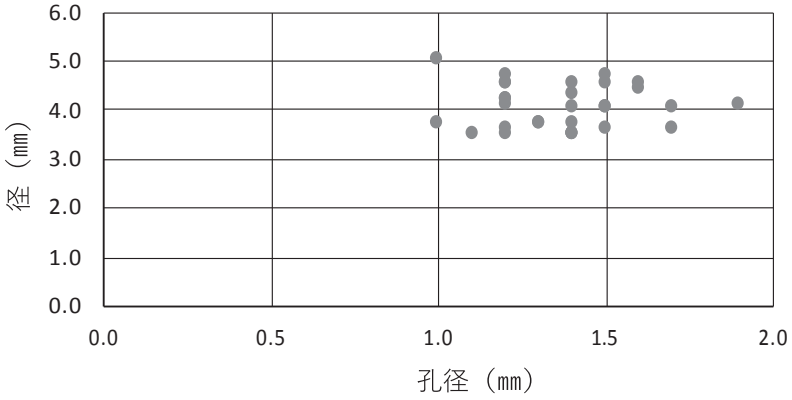
ガラス小玉の法量を比較すると、長さは2.2mm から4.0mm、径は3.5mmから5.0mmまでとやや幅がある。平均値は、長さ約3.00mm、径4.04mmである。法量分布のグラフ（第13図）をみると、



第12図　ガラス小玉（S=1/1）



第13図　ガラス小玉法量分布グラフ



第14図　ガラス小玉孔径分布グラフ

すべての個体が平均値を中心として分布していることがわかる。つまり、法量で分類できる群はなく、基本的に同一の大きさを志向するガラス小玉の一群であるといえる。また、ガラス小玉の径と孔径との比較も行った（第 14 図）。玉の直径と孔径には特に相関関係がないことがわかる。

（中居）

付表４　ガラス小玉一覧

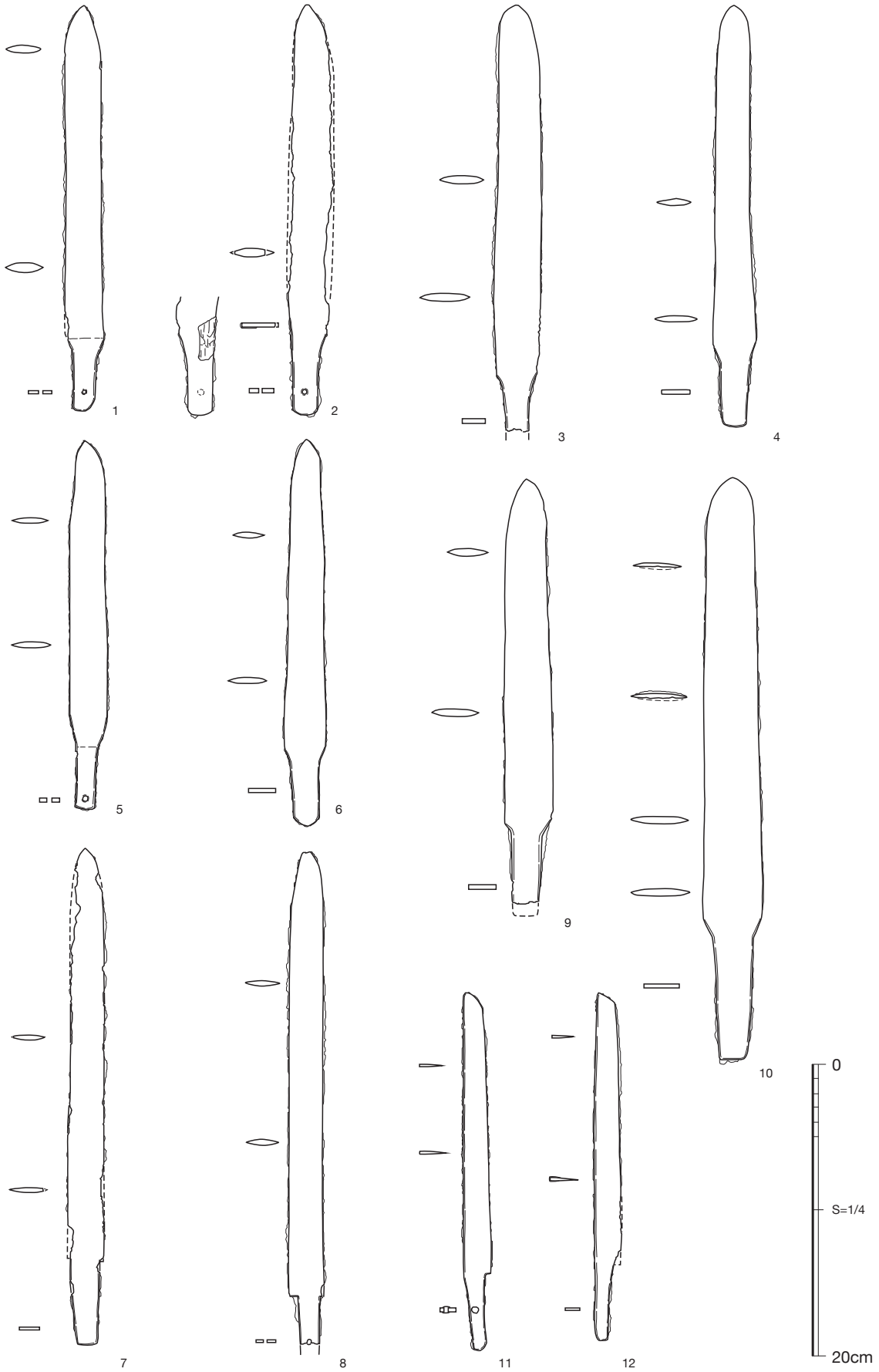
番号	色調	長さ（㎜）	径（㎜）	孔径（㎜）	重量（ｇ）	種類	備考
1	淡青色透明	3.0	4.5	1.6	0.09	中アルミナカリガラス	端面研磨
2	淡青色透明	3.0	4.4	1.6	0.06	中アルミナカリガラス	
3	淡青色透明	2.5	4.0	1.4	0.05	中アルミナカリガラス	
4	淡青色透明	3.0	4.0	1.5	0.06	中アルミナカリガラス	
5	淡青色透明	2.5	3.7	1.4	0.04	中アルミナカリガラス	
6	淡青色透明	3.0	3.5	1.4	0.05	中アルミナカリガラス	
7	淡青色透明	2.8	3.7	1.0	0.05	中アルミナカリガラス	
8	淡青色透明	2.7	3.6	1.2	0.06	中アルミナカリガラス	端面研磨
9	淡青色透明	3.0	3.5	1.4	0.05	中アルミナカリガラス	端面研磨
10	淡青色透明	3.0	4.5	1.5	0.08	中アルミナカリガラス	
11	淡青色透明	3.0	3.5	1.2	0.05	中アルミナカリガラス	
12	淡青色透明	3.5	4.7	1.5	0.09	中アルミナカリガラス	
13	淡青色透明	4.0	4.5	1.4	0.10	中アルミナカリガラス	
14	淡青色透明	3.5	5.0	1.0	0.10	中アルミナカリガラス	端面研磨
15	淡青色透明	3.5	4.3	1.4	0.08	中アルミナカリガラス	端面研磨
16	淡青色透明	3.5	4.1	1.9	0.09	中アルミナカリガラス	
17	淡青色透明	3.0	4.2	1.2	0.05	中アルミナカリガラス	
18	淡青色透明	2.9	4.7	1.2	0.07	中アルミナカリガラス	
19	淡青色透明	2.7	3.7	1.3	0.05	中アルミナカリガラス	
20	淡青色透明	3.0	4.5	1.2	0.08	中アルミナカリガラス	製作時破断面残る
21	淡青色透明	2.5	3.5	1.4	0.04	中アルミナカリガラス	
22	淡青色透明	2.8	3.5	1.1	0.05	中アルミナカリガラス	
23	淡青色透明	2.8	3.6	1.7	0.04	中アルミナカリガラス	
24	淡青色透明	2.4	3.6	1.5	0.04	中アルミナカリガラス	
25	淡青色透明	3.2	4.0	1.7	0.07	中アルミナカリガラス	
26	淡青色透明	3.0	4.1	1.2	0.06	中アルミナカリガラス	
27	淡青色透明	3.0	4.2	1.2	0.07	中アルミナカリガラス	
28	淡青色透明	3.7	4.5	1.2	0.10	中アルミナカリガラス	
29	淡青色透明	2.2	4.0	1.5	0.05	中アルミナカリガラス	孔ゆがむ
30	淡青色透明	3.5	3.7	1.3	0.06	中アルミナカリガラス	着色剤溶残り

（４）刀剣

剣 10 点、刀２点が、第１埋葬施設棺外の棺側粘土上面から鉄製農工具と共に出土した。「概要」報文の点数と、現存する点数が少し異なる。出土遺物の注記から推測すると、その後の整理作業で接合した資料や、当初、刀と剣を混同し、さらに農工具の鎌を剣と誤認した資料も存在したようである。

①剣（第 15 図）

10 点の剣は、全資料の全長が 25.3cm から 40.0cm の範囲に分布し、50cm 未満であるため、法量による分類では「短剣」に属する。関の形状は、７と８が直角である以外は、ナデ関である。木質の残存状況は総じて悪い。また、目釘孔の存在が不明な資料もある。遺物注記についても本文で記述する



第 15 図　刀剣（S=1/4）

こととする。

１は全長 27.8cm、刀身長 22.7cm、茎長 4.1cm を測る。厚さ 2mm と薄い茎部に対して刀身部が 7mm と分厚い形状であることが特徴的である。刃部と関部との境でわずかに厚みが変わり、段になる。木質は残存しない。「19 剣　641001・640930」と注記される。

２は、全長 28.2cm、刀身長さ 21.5cm、茎長 4.7cm を測る。把の木質が片面に付着する。「剣　2,3 640930・641001 、4,5,6 640930」と注記される。

３は、残存長 29.2cm、刀身長 25.4cm、柄頭部が欠損する。形態は１と似る。「第１槨　番号不明」と注記される。

４は、全長 28.9cm、刀身長 23.3cm、茎長 4.4cm を測る。目釘孔が不明。「18 剣　640930」と注記される。

５は、全長 25.3cm、刀身長 18.6cm、茎長 4.3cm を測る。茎部と刀身の境付近で、わずかな厚みの違いがある。「13 剣　640930」と注記される。

6 は、全長 26.5cm、刀身長 21.0cm、茎長 4.3cm を測る。「剣１」と注記される。

7 は、全長 34.1cm、刀身長 25.4cm。茎長 5.7cm を測る。「剣　F17」と注記される。

8 は、残存長 33.9cm、刀身残存長 30.6cm（復元長 30.8cm 程度）を測る。「剣 10　640930」と注記される。

9 は、残存長 29.2cm、刀身長 23.5cm、茎残存長 4.8cm を測る。復元全長 30cm 程度で、目釘孔の有無が不明である。「剣１」と注記される。

10 は、全長 40.0cm、刀身長 30.3cm、茎長 8.4cm を測り、刃部幅は最大 4.1cm、刃部厚は 0.5cm 程度である。金比羅山古墳出土資料では最長の剣である。目釘孔の有無は不明である。「F15」と注記される。

②刀（第 15 図）

刀は２点とも、剣と同様に短く小型で、法量からは「短刀」に区分される。また、２点の法量はほぼ一致する。

11 は、全長 24.5cm、刀身長 19.3cm、茎長 5.2cm、刃部最大幅 1.9cm を測る。目釘と考えられる鉄塊が茎に付着する。「F11」と注記される。

12 は全長 23.9cm、刀身長 18.6cm、茎長 5.3cm を測る。刃部最大幅 1.9cm を測る。関部が欠損する。目釘孔の有無が不明瞭である。11 と比べてこちらは造りが薄手である。特に茎部でその傾向が顕著である。「不明　刀子（剣）」と注記される。

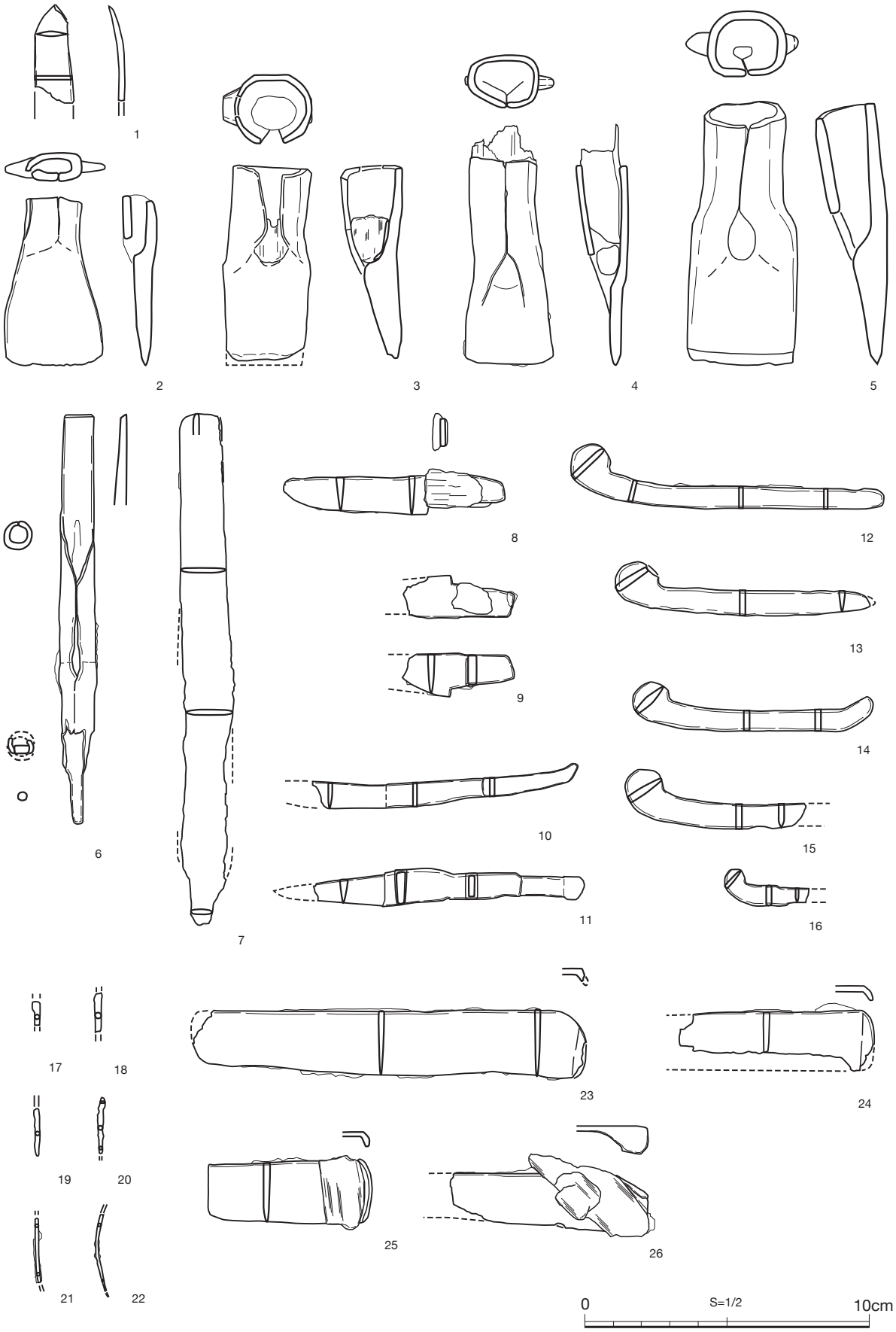
（古川）

（５）農工具

①第１埋葬施設出土（第 16 図・第 17 図）

鉇（１）

残存長 3.4cm、刃部幅 1.3cm、刃部長 2.0cm を測る。側面からみるとわずかに屈曲し、先端部付近の両端に刃がある。ただし、鎬は形成されない。



第 16 図　第 1 埋葬施設出土農工具 1 （S=1/2）

有袋鉄斧（２～５）

２は全長 5.9cm、うち袋部長 2.1cm を測る。袋部は丁寧に綴じられる。袋部内径が長軸 1.3cm、短軸 0.5cm と小さい。袋部からは先にかけてバチ状に広がる形状である。

3 は全長 6.8cm、うち袋部長さが 3.5cm を測る。袋部奥に木質が残存する。袋部の厚さは 0.2cm でやや華奢である。刃部最大厚は 1.3cm である。袋部は接合部が密着せず開く。刃部先端は、丸くすり減ったような形状で、実際の使用に伴って摩耗したとも見られる。

４は全長 7.2cm、うち袋部長さが 4.3cm を測る。袋部内に木質が残存する。袋部の厚さは 0.1 ～ 0.2cm、身部の厚さが 0.4cm を測る。全体にかなり華奢な造りである。５は全長 9.3cm、うち袋部長さが 4.6cm を測る。刃部の稜が明瞭に形成される。袋部が丁寧に接合されるため、綴じの接合状況が肉眼では判別が難しい。

有袋鑿（６）

全長 14.6cm を測る。先端から約 3cm の箇所で身部が 0.4cm と最も厚く、この箇所の身幅は 1.1cm である。袋部の径は 1.0cm で、袋部の下端付近が欠損する。木質は残存しない。袋部中央部で接合痕と考えられる箇所がある。また、断面形態を見ると、袋部上半部は身部と一体成型であるが、袋部下半部は身部と別づくりと推定される。

鑿（７）

全長 18.0cm、身厚 0.15cm を測る。刃部は明瞭には造り出されない。形態からは鑿と判断されるが、実用に耐える強度は無く、非実用品と考えられる。

刀子（８～ 11）

8 は全長 7.8cm、刃部長 5.0cm、身幅最大 1.35cm、背厚及び柄厚 0.2cm を測る。柄の木質が残存する。

9 は残存長 4.0cm、刃部最大幅 1.5cm、刃部背厚 0.2cm、柄部幅 1.0cm、柄部身厚 0.3cm を測る。柄の木質が片面に付着する。

10 は残存長 9.3cm、柄の長さ 6.7cm を測り、柄の木質が一部に残る。柄の先端部までが鉄製の「鉄柄刀子」である。把の先端はわずかに背側に屈曲する。

11 は残存長 9.6cm、柄部長 7.1cm、復元全長約 11cm を測る。柄部から柄頭にかけて身部が段階的に分厚くなる構造で、刃部に近い柄部断面形状は長方形であるが、最も厚い柄頭の断面形態はほぼ正方形となる。柄頭まで鉄製の「鉄柄刀子」である。柄には装具が付着するが、木目は確認できない。

蕨手刀子（12 ～ 16）

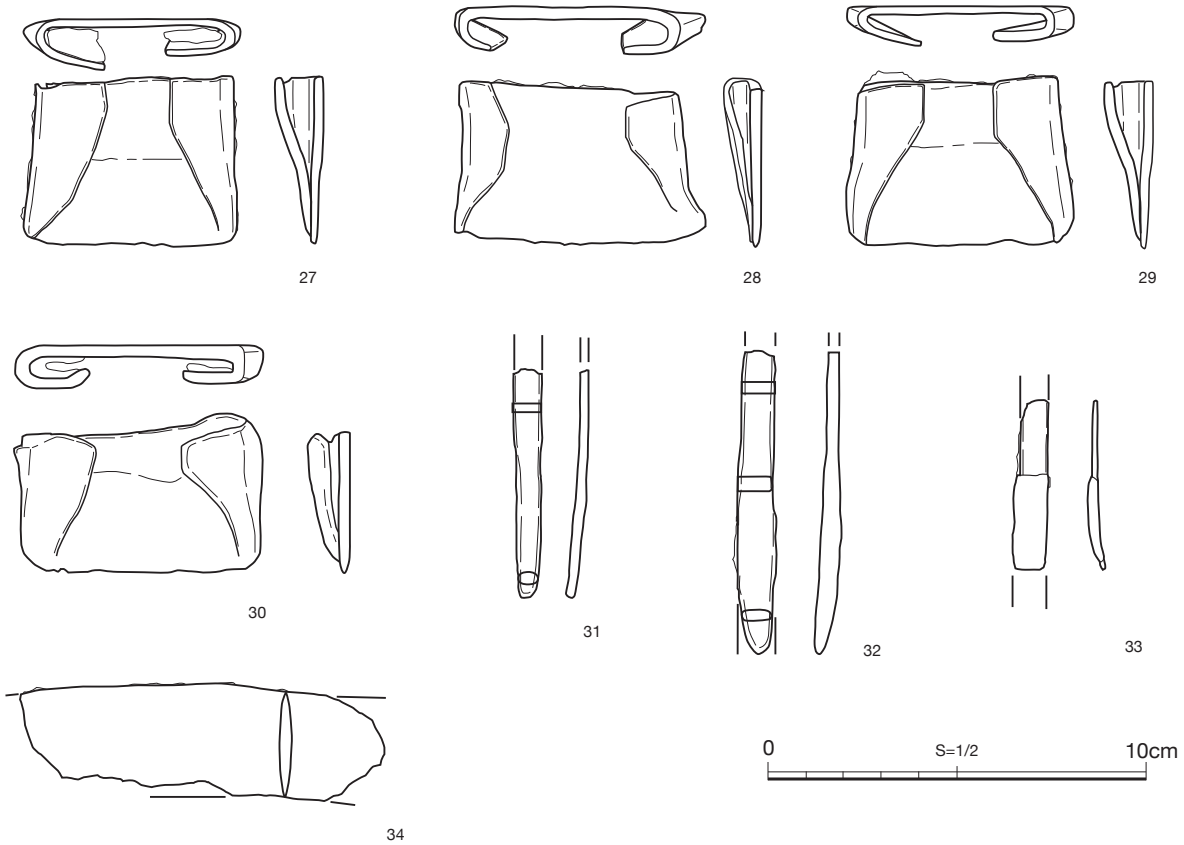
12 は全長 11.0cm で、刃を研ぎ出していない。

13 は全長 9.0cm で、刃先が欠ける。

14 は全長 8.4cm で、刃を作り出していない。

15 は残存長 6.3cm の柄部破片である。破断面付近では、やや不明瞭であるが刃部の形成が確認される。

16 は残存長 3.0cm、うち柄部長が 2.3cm を測り、小型品とみられる。刃部は柄部より幅が狭く身厚も薄くなる。刀身の研ぎを繰り返した結果、こうした形態になったように見える。実用品であると



第 17 図　第 1 埋葬施設出土農工具 2（S=1/2）

すれば、一定の使用期間が想定しうる資料である。

針（17 ～ 22）

17、18、21、22 は体部の破片、19 は先端部から体部の破片、20 は頭部から体部の破片である。17 は残存長 0.8cm、径 0.2 ～ 0.3cm。 18 は残存長 1.4cm、径 0.2 ～ 0.25cm。19 は残存長 2.7cm、径 0.1 ～ 0.2cm。20 は残存長 2.0cm、径 0.15 ～ 0.2cm。頭部の断面形態は平らで、頭部と体部の境界は、心持ち、くびれた形状となる。21 は残存長 2.3cm、径 0.1 ～ 0.15cm。22 は残存長 2.7cm、径 0.05 ～ 0.1cm。最も残りが良い。

鎌（23 ～ 26）

23 は全長 13.7cm、背厚 0.2cm を測る。基部と先端部がわずかに欠損するが、ほぼ完形である。器種は鎌であるが、「剣」と注記される。

24 は残存長 6.8cm、背厚 0.2cm を測る。下半部が錆化により欠損する。木質は残存しない。

25 は全長 5.8cm、背厚 0.2cm を測る。平面形態が長方形で、柄の木目方向は刃部と直交する。

26 は残存長 6.9cm、基部幅 2.0cm、背厚 0.2cm を測る。基部から刃部にむかって身幅がやや狭くなる。基部の折返しが明瞭。鎌本体の身幅が狭いのに対し、折返し部が大きい。柄は鈍角に装着される。柄の残存幅は最大 2.1cm である。

方形鍬鋤先（27 ～ 30）

27 は幅 5.7cm、高さ 4.5cm、身厚 0.2cm を測る。折り返し部に木質が残存する。

28 は幅 6.0cm、高さ 4.2cm、身厚 0.3cm を測る。木質は残存しない。刃部断面形態は直線的で、中央部より上の木柄装着部の身厚が薄くなり、本体装着部を形成する。

29 は幅 6.6cm、高さ 4.3cm、身厚 0.3cm を測る。木質は残存しない。他の鍬鋤先と比べて、本体装着部と刃部で厚みの違いは不明瞭である。

30 は幅 6.6cm、高さ 4.2cm、身厚 0.3cm を測る。折り返し部に木質が残存する。

不明鉄製品（31 ～ 34）

31 は残存長 6.1cm、中央より上部は身厚 0.2cm、身幅 0.8cm の断面長方形を呈する。下端部の断面形態は楕円形となる。側面からみるとわずかに湾曲する。器種は特定できないが、鉈の基部の可能性がある。32 は残存長 8.0cm。中央より上部は身厚 0.2cm、身幅 0.9cm の断面長方形を呈する。下端部の断面形態は楕円形となる。側面からみるとわずかに湾曲する。器種は特定できないが、鉈の基部の可能性がある。柄の装具が付着しており、鉄身よりさらに下方に延びるようである。装具の木目は不明瞭である。33 は残存長 4.5cm、柄の木質が下半分に付着する。34 は残存長 9.6cm、身幅最大 3.0cm、身部中央厚 0.3cm を測る。断面形態が杏仁形だが、わずかに弧を描く形態である。両刃の鉄製品にも見えるので、剣の破片、あるいは剣を転用して工具とした可能性がある。

②第２埋葬施設出土（第 18 図・第 19 図）

鉈（１～４）

１は上部破片の残存長 5.5cm、下部破片の残存長 4.9cm。両破片は接合しないが、復元全長は 10.5 ～ 11.0cm 程度と考えられる。刃部残存長 1.5cm（復元 2.3cm 程度）、体部下端部に柄の装具が付着する。

２は、全長 11.1cm、刃部長 1.9cm、身部最大幅 1.4cm、身部最大厚 0.2cm を測る。身部先端にかけて次第に薄くなる。この資料の特徴は刀子を鉈に転用していることである。本来、刀子の柄部であった部位を鉈の刃部に作り変え、通有の鉈と同様に鎬が形成される。そして、元は刀子の刃部であった部位が鉈の柄木部装着範囲に変更される。柄木部は鉈として見た際の裏面によく残っている。刀子の刃はつぶされ、本来の刀身より幅が狭くなり、断面はほぼ長方形となっている。刀子の先端部は欠損する。鉈に作り変えられる際に切り取られたようである。

３は、全長 10.7cm、刃部長 2.3cm、刃部幅 1.6cm、身中央部幅 1.1cm、身厚 0.2cm を測る。２と同様に、刀子を鉈に作り変えたものである。刀子の先端部を薄く研ぎ出し、刀子の刃部と刀背部の両方に鉈の刃を形成する。鉈の鎬も形成される。鉈の身部は、刀子であった際に刃部であった側が切削され、断面形状は長方形となる。刀子の茎は残存するが、やや短小である。木質は付着しない。

４は、全長 8.6cm、刃部長 1.6cm（直線距離）、身部最大幅 1.1cm を測る。刃部から体部上部にかけて匙状に屈曲して成形されている。体部下端は圭角状の形状となる。柄の木質は残存しない。

有袋鉄斧（５・６）

５は全長 8.1cm、刃部最大幅 3.8cm、袋部長 3.9cm を測る。袋部断面形状は横に長い楕円形で、袋部内に木質が残存する。袋部が丁寧に接合され、錆着の影響もあるため、肉眼では接合部の判別が付きにくい。

6 は全長 7.8cm、身部幅 4.5cm、身部最大厚 0.7cm を測る。平面形態はなで肩形状である。袋部の綴じは開き、袋部内に木質が塊状に残存する。刃部先端部の中心から左寄りがすり減っている。

錐（7）

残存長 6.8cm、先端部が欠損するが、復元長は 7.5 ～ 8.0cm と考えられる。穿孔部の断面形状は、長方形で、中央部付近は 0.4cm 四方である。基部の身幅は最大 1.0cm、身厚は 0.3cm を測る。基部下端に木質が付着する。

刀子（8）

残存長 8.4cm、柄部長さ 2.3cm、刃部背厚 0.2cm、柄の厚さ 0.1cm を測る。柄部が非常に薄く、断面形状はやや弧を描く。柄の木質が厚く付着する。やや特異な構造である。

蕨手刀子（9 ～ 13）

9 は、全長 11.0cm、柄部長さ 4.2cm、刃部長さ 6.8cm を測る。ただし、実際にそのうち刃部を研ぎ出すのはそのうち先端部の 2.5cm のみである。柄部の背厚は 0.2cm を測り、刃部の厚みは刃が実際に研ぎ出される先端部では 0.2cm、刃部中央部では 0.3cm となる。

10 は全長 9.6cm、刃部長 1.7cm を測る。

11 は残存長 10.3cm 、復元長 10.7cm を測る。刃先が欠ける。

12 は残存長 6.0cm、柄部 5.7cm で、刃を研ぎ出している。

13 は残存長 10.6cm、復元全長約 10.8cm、柄部長 6.3cm を測り、柄頭中央に錆が付着する。刃部と柄部で厚みが異なり、境界が明瞭である。

鋸（14）

残存長 6.6cm、身幅 2.0cm、背厚 2mm を測る。鉄部の右上部に横方向の柄の木質が付着し、刃部がわずかに鋸歯状となることから、鋸と判断する。ただし身が非常に薄く刃は小さい。

鎌（15 ～ 17）

15 は残存長 10.0cm、基部最大幅 2.4cm、刃部最大幅 2.0cm を測る。ほぼ完形で、復元長は 10.2 ～ 10.3cm 程度である。基部に柄木質が残存する。柄木質は、刃部に対して直角方向に付く。基部に対して刃部の幅が狭いのが特徴である。

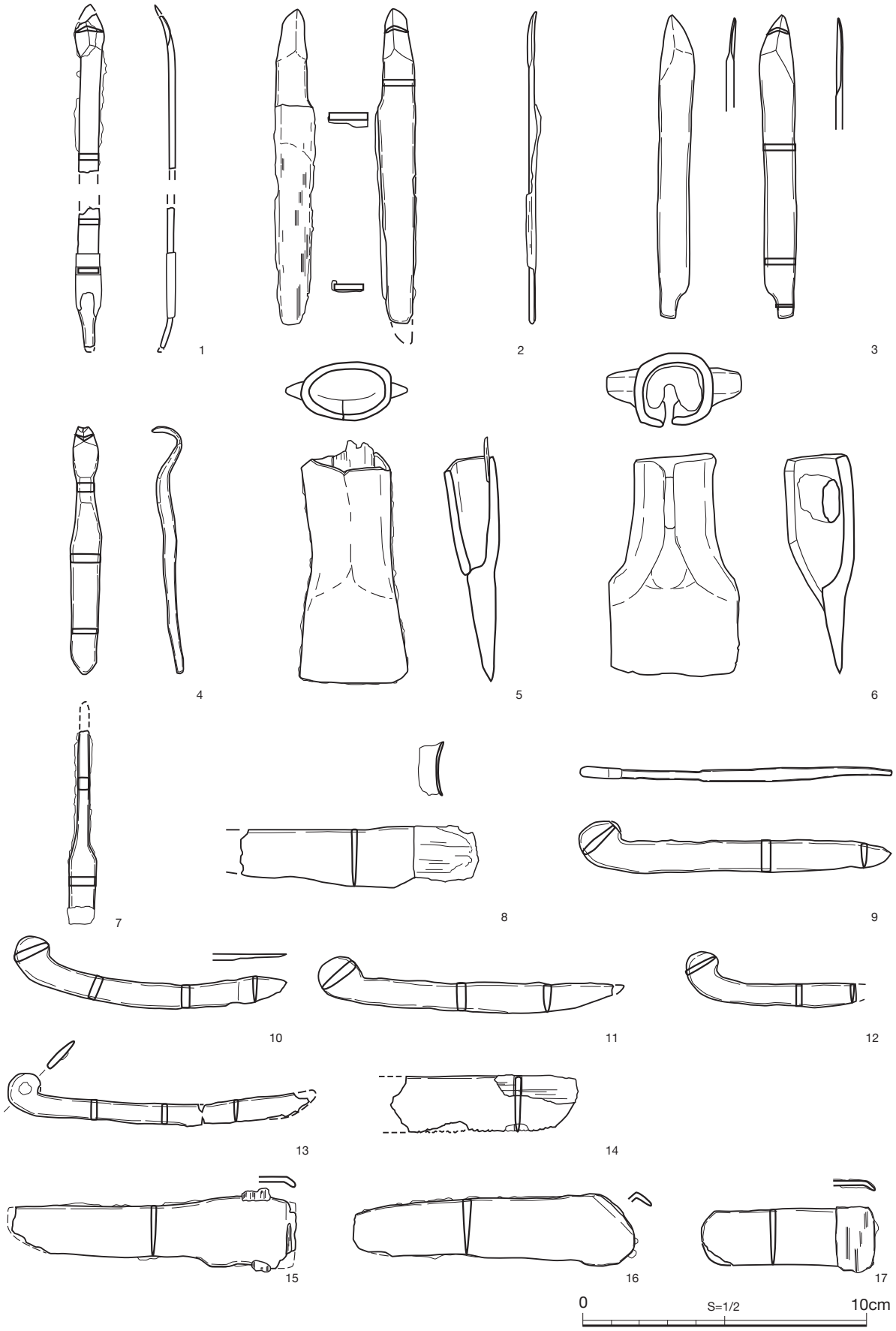
16 は残存長 10.9cm。基部最大幅 2.4cm、刃部最大幅 2.2cm を測る。木質は残存しない。折返しの角度は鈍角である。また、折返しが他の鎌に比べると深く明瞭で、折返し部の長さが 0.5cm を測る。刃部背厚は 0.3cm で造りもやや厚手である。

17 は全長 6.1cm、幅 2.0cm、背厚 2mm を測る。折返し部はわずかに屈曲する程度、刃部と直角方向に装着された柄が残存する。

手鎌（18・19）

18 は全幅 6.2cm、高さ 2.1cm を測る。鍬鋤先と比して、薄手の形状と刃を包み込むように折り返し部が成形されることから、手鎌と判断する。木部は残存しない。

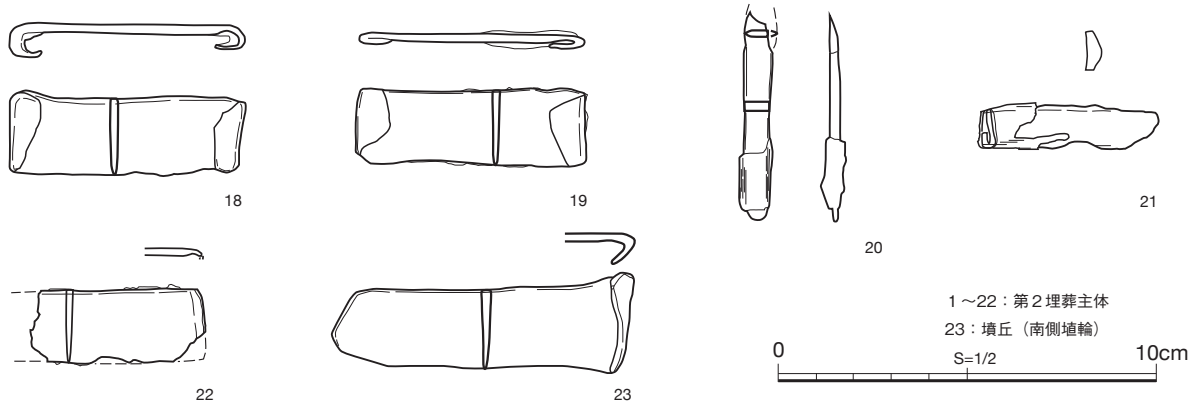
19 は全幅 6.1cm、高さ 2.1cm。薄手で折返し部がほぼ完全に本体に密着する状態から、18 と同様、手鎌と判断する。木部は残存しない。



第 18 図　第２埋葬施設・墳丘出土農工具１（S=1/2）

器種不明（20 ～ 22）

20 は残存長 5.5cm を測る。体部の断面形態が長方形で、先端部が杏仁形である。鉇の一部である可能性がある。21 は残存長 4.7cm を測る。図面の左側に木質が付着する。残存状況が悪い。22 は残存長 4.6cm、身幅 2.0cm。背部厚 2mm を測る。下側に刃が形成される。右端に折り返しがあるが、先端が欠損する。直刃鎌または手鎌の基部から刃部にかけての破片と判断される。木質は残存しない。



第 19 図　第２埋葬施設・墳丘出土農工具２（S=1/2）

付表５　農工具一覧

（第１埋葬主体出土農工具）

図番号	器種	注記
1	鉇	槨外鉄器２槨西側南半部 641001
2	有袋鉄斧	F21　斧
3	有袋鉄斧	F20　斧
4	有袋鉄斧	F8　斧
5	有袋鉄斧	16　斧 640930
6	有袋鑿	F17
7	鑿	第１槨番号不明
8	刀子	F17
9	刀子	槨外鉄器 19 槨西側南半部 641001
10	刀子	第１郭 10、12　追加鉄器 640930
11	刀子	槨外鉄器６槨東側南半部 641001
12	蕨手刀子	槨外鉄器２槨東側南半部 641001
13	蕨手刀子	F17
14	蕨手刀子	槨外鉄器８　槨東側南半部 641001
15	蕨手刀子	槨外鉄器７　槨東側南半部 641001
16	蕨手刀子	槨外鉄器 10　槨東側南半部 641001
17	針	F24
18	針	F24
19	針	F24
20	針	F24
21	針	F24
22	針	F24
23	鎌	７　剣
24	鎌	槨外鉄器 11 槨東側南半部 641001
25	鎌	槨外鉄器 12　槨東側南半部 641001
26	鎌	F22 番号不明
27	鍬鋤先	F12 鍬
28	鍬鋤先	F16 鍬
29	鍬鋤先	F14 鍬
30	鍬鋤先	F16 くわ
31	器種不明	槨外鉄器３槨西側南半部　641001
32	器種不明	槨外鉄器 14 槨東側南半部 641001
33	器種不明	槨外鉄器 13 槨東側南半部 641001
34	器種不明	槨外鉄器４槨東側南半部 641001

第２埋葬主体部（円筒棺）

図番号	器種	注記
1	鉇	第２槨　F31
2	鉇	第２槨　F25
3	鉇	第２郭　F6
4	鉇	第２槨　F7
5	鉄斧	第２槨　F14 斧
6	鉄斧	第２槨　F32
7	錐	第２槨　F24
8	刀子	第２槨　F11,30
9	蕨手刀子	第２槨　F15
10	蕨手刀子	第２槨　F12
11	蕨手刀子	第２槨　F26
12	蕨手刀子	第２槨　F31
13	蕨手刀子	第２槨　F17,18,19,20
14	鋸	第２槨　F13
15	鎌	第２槨　F28
16	鎌	第２槨　F22
17	鎌	第２槨　F9
18	手鎌	第２槨　F16
19	手鎌	第２槨　F4
20	器種不明	第２槨　F8
21	器種不明	第２槨　F29
22	器種不明	第２槨　F1

（墳丘出土）

図番号	器種	注記
23	鎌	南側ハニワ出土　鉄片

③墳丘出土（第 19 図）

23 は鎌である。全長 7.9cm、身幅 2.2cm、身厚 2.1cm を測る。木質は残存しない。折返しの屈曲が強いのが特徴的である。注記には「南側ハニワ中出土」とあるため、南側の埴輪列からの出土と考えられるが、遺物注記以外には記録がない。「ハニワ」は、第二埋葬施設の円筒棺を示す可能性もある。

（古川）

（注）

（1）斜縁二神二獣鏡の報文作成にあたって、大手前大学森下章司氏から御教示を得た。

（2）斜縁二神二獣鏡の計測手法は、計測を担当された大手前大学岡本篤志氏による下記の説明のとおりである。

レーザ三次元計測について　本調査では、RANGE7（コニカミノルタ社）の三次元計測機を使用した。レーザ光切断法による三角測距によって約２秒で形状を取得できる。微細な凹凸などを記録するのに有効な機器である。計測にあたっては、分割計測した各データの位置と合成を行うためターゲットシールを用い正しい位置情報を記録できるようにしている。なお、計測対象にターゲットシールを貼ることは損傷の原因になるため、計測台に貼り計測を行っている。

各計測は、表面 28 分割、裏面 18 分割で計測し、表裏の重なる縁部分を基準として計測形状を基準とした表裏計測データの合成している。データの計測間隔は、平均 0.071㎜である。合成したデータから面データ（ポリゴンデータ）を作成したのち、放射陰影図、断面図などの可視化を行っている。

RTI（Reflectance Transformation Imaging）画像　RTI（Reflectance Transformation Imaging）画像（以下 RTI 画像）は、一般的な写真とは異なり、RTI 画像では「法線マップ」と呼ばれる被写体表面の光の反射方向を記録した情報を持っており任意の方向からの光を照射し被写体の陰影をシミュレーションできる写真手法である。光と影によって、被写体の 3D 表面形状の詳細を可視化することができる。

今回は、自作の RTI 撮影用の半球ドームを用い異なる位置から 64 カ所光を照射した画像を自動撮影し演算した法線マップをグレースケール化した画像を提示している。レーザ三次元計測では捉えることが困難な微細な凹凸を「法線マップ」で捉えることにより鏡表面の形状を可視化している。

（3）石製玉類及びガラス小玉の報文作成にあたって、奈良女子大学大賀克彦氏から御教示を得た。

（参考文献）

大賀克彦 2010「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価」『東大寺山古墳の研究』

実盛良彦 2009「斜縁神獣鏡の変遷と系譜」『広島大学考古学研究室紀要』第 1 号

村松洋介 2004「斜縁神獣鏡研究の新視点」『古墳文化』創刊号　國學院大學古墳時代研究会

藁科哲男 1997「宇木汲田遺跡出土のヒスイ製勾玉、碧玉製管玉の産地分析」『佐賀県立博物館・佐賀県立美術館調査研究書』第 22 集

6　円筒棺・埴輪類

（1）円筒棺

円筒棺[注1]はすでに述べたように、第２埋葬施設に用いられたものである。これまでの研究では、形状や製作技法から円筒埴輪製作集団との関連性が述べられている（橋本 1980）。ここでは、円筒棺の棺身と棺蓋の製作技法等について述べていく。

①棺身（第 20 図・第 21 図）

１は円筒棺の棺身である。全長 164cm、最大径が 54cm を測る。図示した方向で、最上部の径が 51cm、最下部の径が 50cm を測り、円筒形を呈する。最上段の高さ約６cm、最下段の高さ約９cm である。中間の段は、約 14 ～ 15cmのほぼ等間隔で 11 条の突帯を貼りつけている。突帯の間にさらに斜方向の突帯を貼りつけており、右上がりの突帯と左上がりの突帯が交互に配置され、全体として綾杉状を構成している（雷文状突帯）。外面調査は、１次調整タテハケの後、ヨコハケを全面に施している。内面はヨコハケとナナメハケを全面に施し、一部、ナデを確認できる。上部と下部でナナメハケの方向が逆転している。断面の接合痕を今回、確認することができなかったが、内面下端より約１m付近の中位くらいでハケ方向が逆転しているため、全長約１mと全長約 0.6 mの二つの円筒を作成し、接合したものと考えられる。黒斑を有し、野焼きによって焼成している。内面には赤色顔料を塗布している。胎土はやや密で、2.5mm のチャートや長石を含む。

第２埋葬施設の円筒棺出土状況写真と照合したところ、図示した最上部が南側、最下部が北側を向いて埋葬されていたことが判明した。

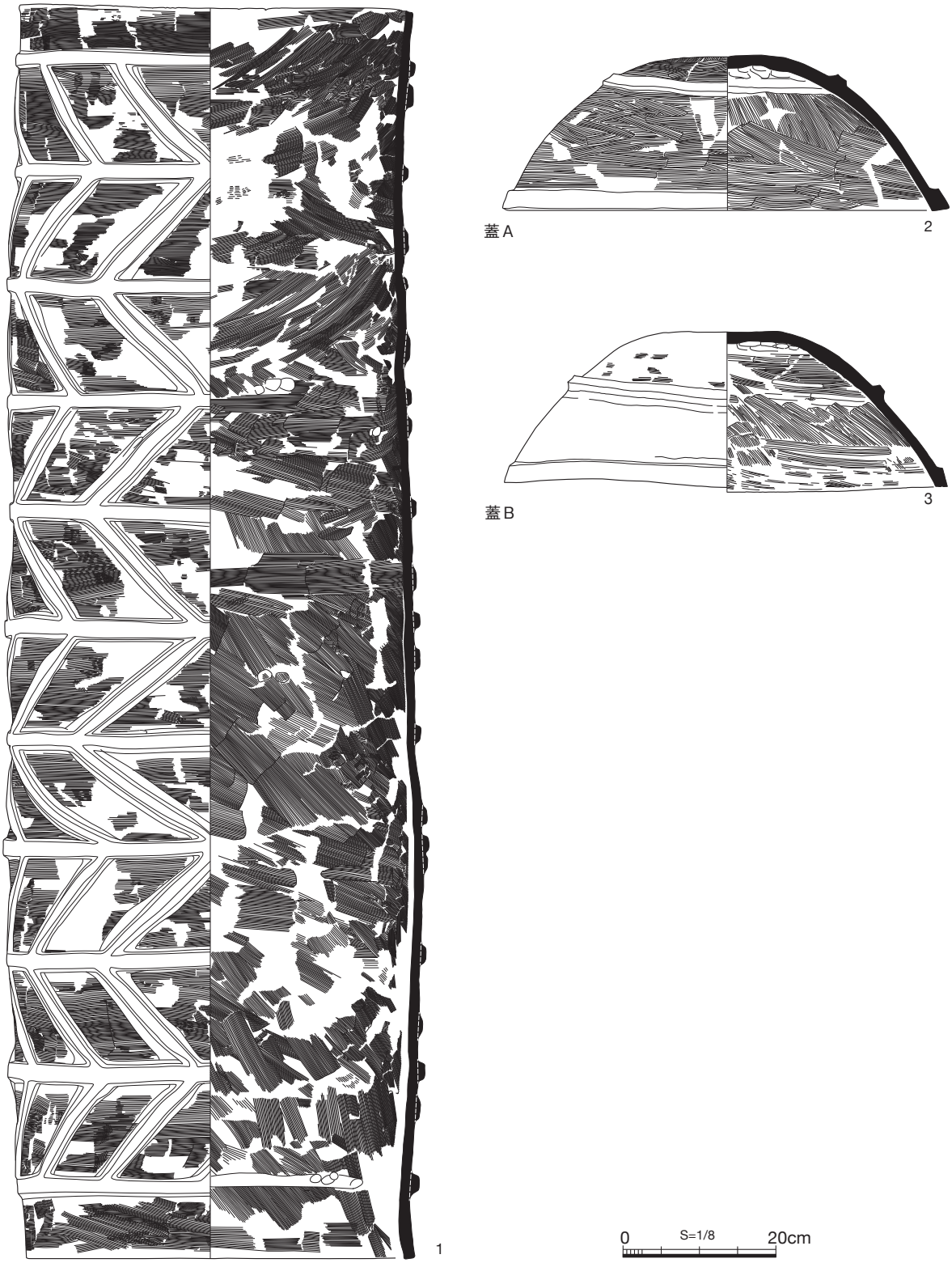
②棺蓋（第 20 図）

２・３は円筒棺の棺蓋である。２が円筒棺の北側、３が南側を閉じていた。

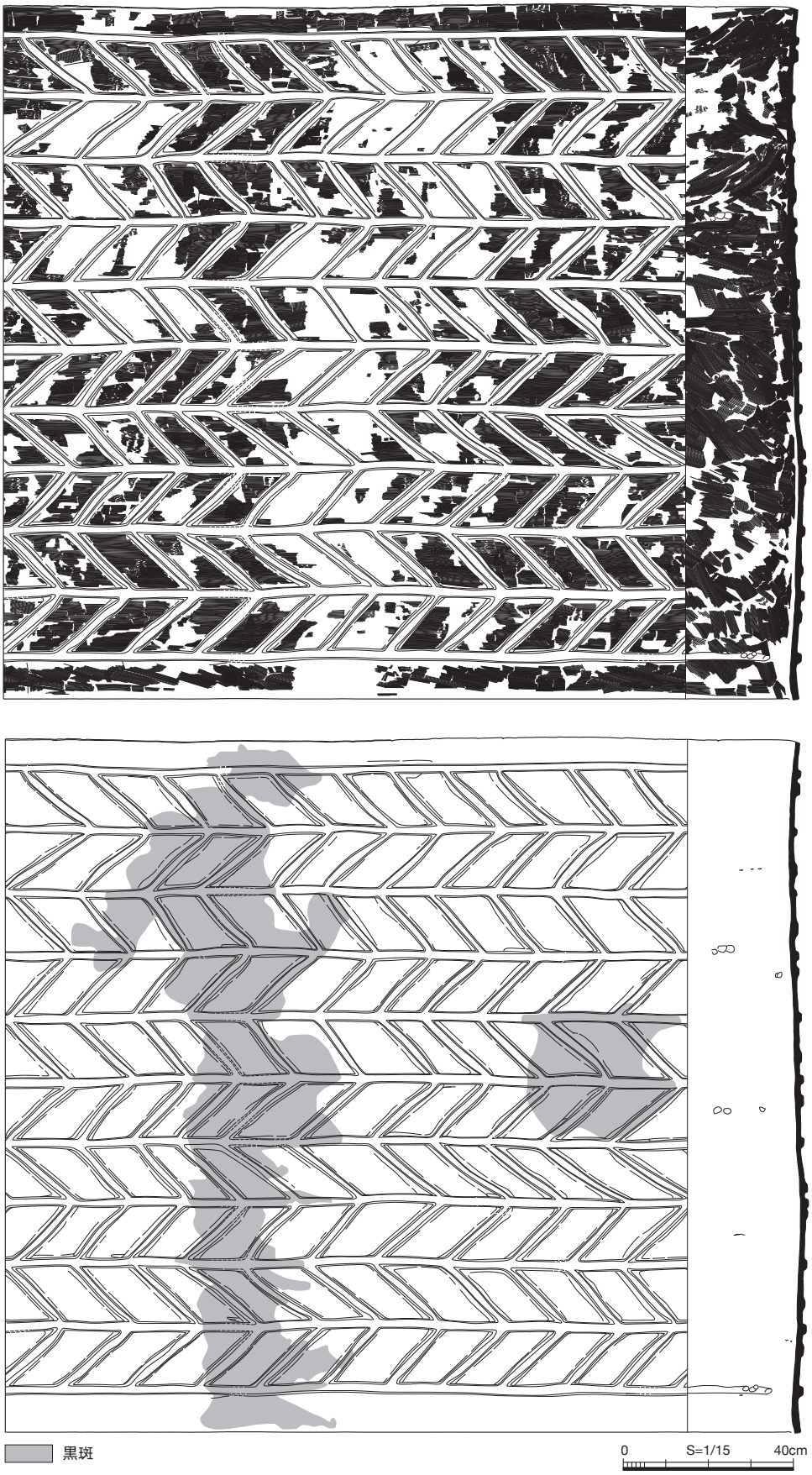
２は全高 20cm、長径 58.2cm、短径 56.4cm の半球形を呈する。突帯を中位に１条と下端部に１条貼りつけている。外面調整は、１次調整ヨコハケを施し、内面はナナメハケ、頂部にユビオサエとナデを確認できる。黒斑を有し、野焼きによって焼成している。内面には赤色顔料を塗布している。胎土は密で、2.5mm のチャートや長石を含む。３は全高 20.9cm、長径 57.2cm、短径 53.8cm で、２と同様に半球形を呈する。外面は摩耗が激しいが、ヨコハケを施している。内面は、ナナメハケのほか、ヨコハケを施し、頂部はユビオサエとナデを確認できる。内面には、赤色顔料を塗布し、胎土・色調は２と類似する。

（2）普通円筒埴輪・朝顔形埴輪

整理作業開始前、埴輪は、埴輪棺と円筒埴輪の一部が接合され、石膏により復元されていた。そのほかの破片は、各出土位置の記載された袋に分けられていた。墳丘の西部、東部、南部など大枠が理解できる程度で、詳細な出土位置が不明なものが多い。



第 20 図　円筒棺（S=1/8）



第 21 図　円筒棺展開図（S=1/15）

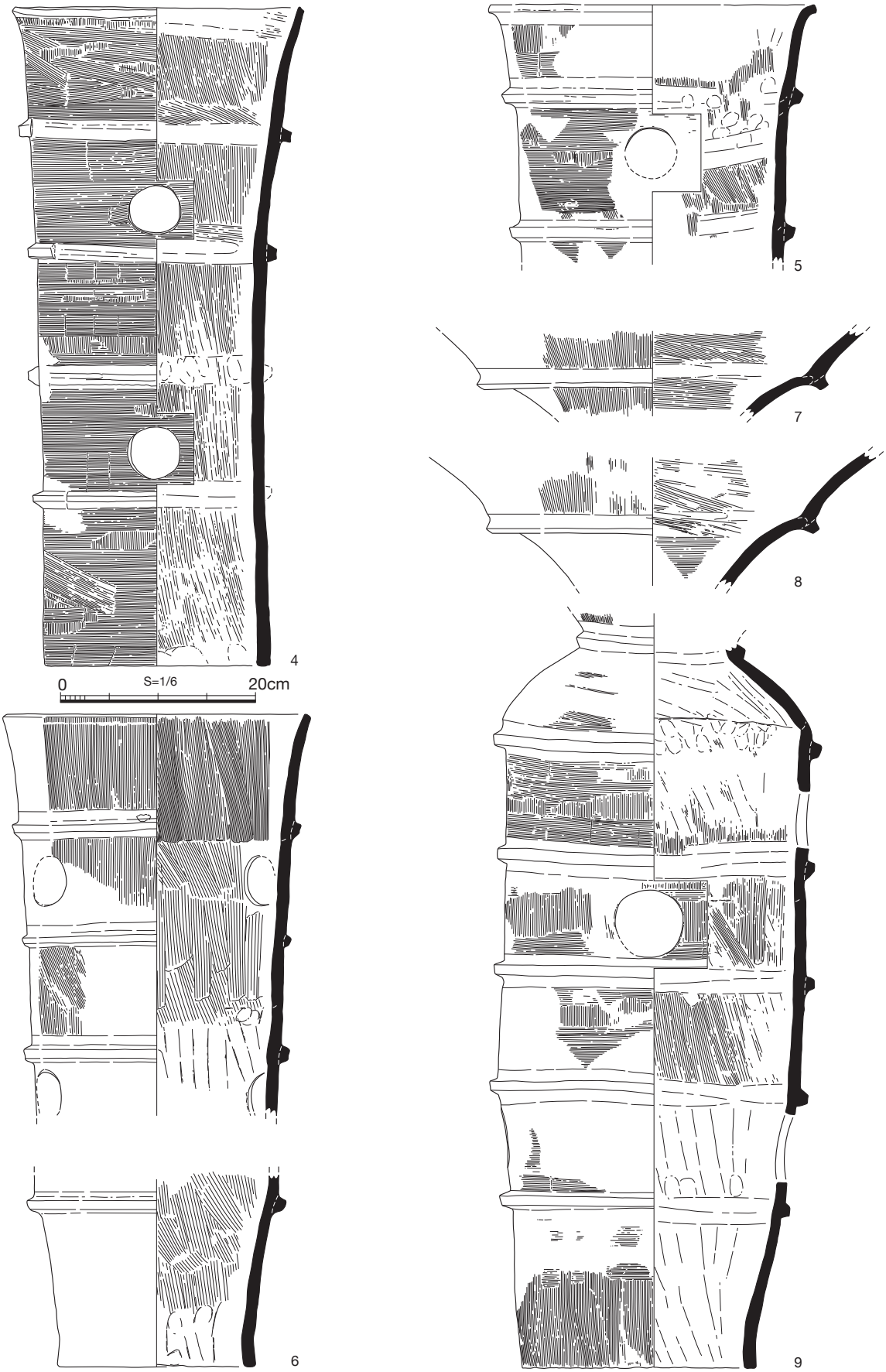
整理の結果、蓋形・靫形埴輪が新たに確認できたが、調査日誌で出土の可能性が示唆されていた盾形埴輪は、認められなかった。

①埴輪棺（第 22 図・第 23 図）

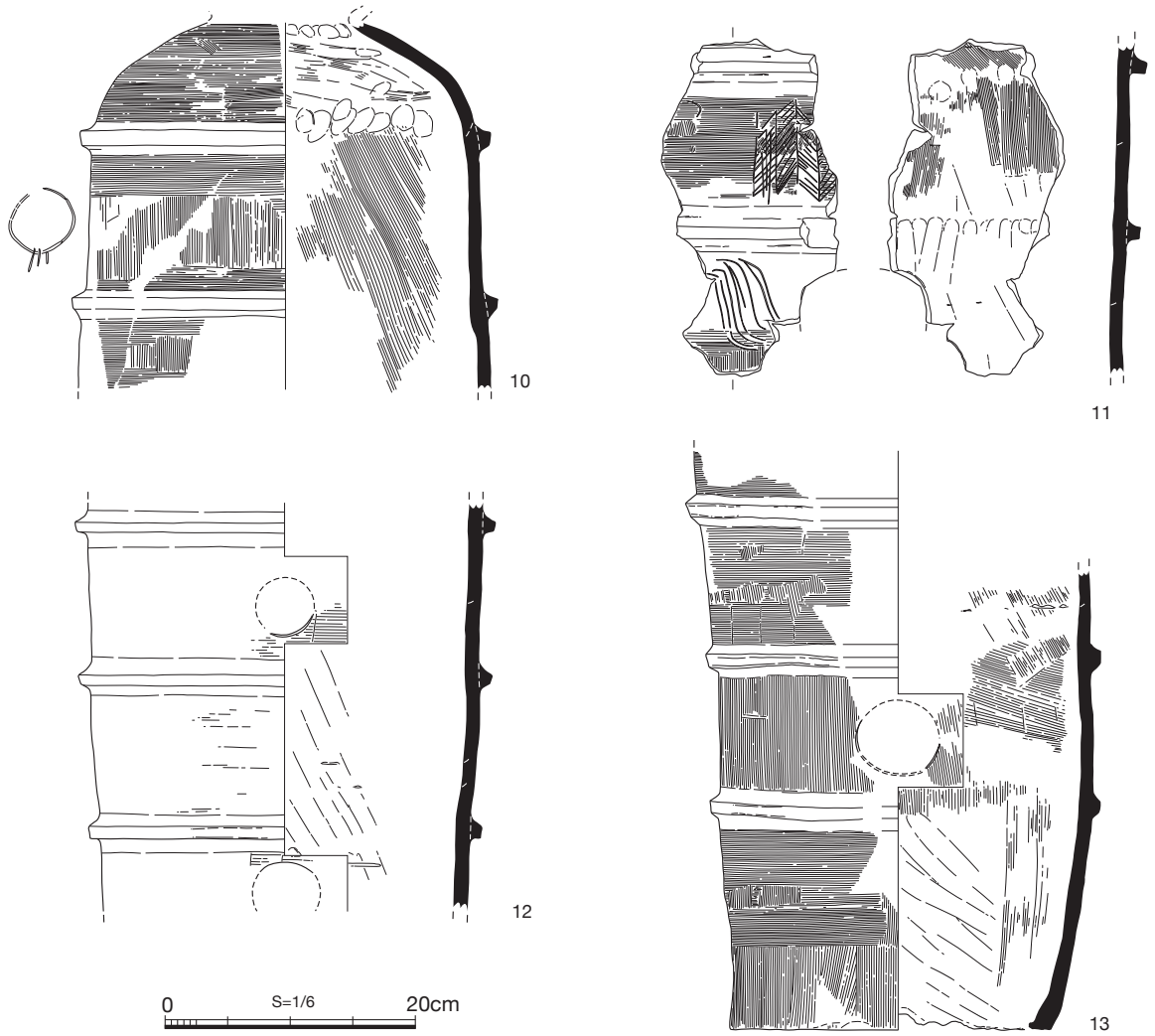
埴輪棺は、第３章で記述したように、北棺、東棺、東北棺が検出されている。写真の残る東棺、東北棺は、主体となる完形の埴輪に円筒埴輪の破片を被せる構造であったことがわかる。北棺も同様であろう。主体となる埴輪は、東北棺（４）は普通円筒埴輪、北棺（10、11、13）と東棺（９）は朝顔形円筒埴輪が使用された。なお、その他の埴輪片については「埴輪棺」としたラベルがあるのみで、どの棺に伴うかは不明である。

普通円筒埴輪の全形の分かる資料である４と６についてはともに４条５段で、２段目と４段目に円形透孔を２孔穿つ。透孔位置については、縦列状に配置している。４は、高さ 68cm、底部高は 17.3cm、突帯間隔は 12.5 ～ 12.7cmで揃い、口縁部高は 12.8cmである。底部径は 23.0cmで、口縁部径は 29.7cmである。外面調整は、底部から口縁部にかけて、１次調整タテハケ後、２次調整ヨコハケを施す。２・３段目では、明瞭なハケ工具静止痕を確認でき、Ｂ種ヨコハケである。また、突帯が剥離した部分には、凹線を確認でき、突帯間隔設定技法を施していた。内面調整は基本的に、全面タテハケを施し、突帯部内面には、ナデ、ユビオサエを確認できる。突帯貼りつけ時に施したものである。また、黒斑を確認でき、野焼き焼成であった。６は、底部高は 16.5cm、突帯間隔は 11.4 ～ 11.5cmで揃い、口縁部高は 11.6cmである。底部径は 20.3cmで、口縁部径は 31.4cmである。外面調整は、全面にタテハケを施す。内面は、底部と３段目にナナメ方向のナデを施し、それ以外にタテハケを施す。口縁部内面は３・４段目のタテハケとは異なる工具を用いている。また、黒斑を確認でき、野焼き焼成であった。５は、口縁部の資料であり、突帯間隔は 13.6cm、口縁部高は 9.8cmである。口縁部径は 33cmで、他の資料と比較して、口縁端部を強く折り曲げ、口縁部高が短い。外面調整は、１次調整タテハケ後、２次調整にＢ種ヨコハケを施す。内面は、タテハケ後に横方向のナデやユビオサエを確認できる。また、黒斑を確認でき、野焼き焼成である。12 は、２・３・４段目の胴部の資料である。円形透孔を縦列状に配置しているため、普通円筒埴輪と考えられる。突帯間隔は 12.2cmで揃う。外面調整は、摩耗が激しいが、一部でヨコハケを確認できる。内面調整には斜め方向のナデを施している。

朝顔形円筒埴輪の口縁部まで残るものはなく、頸部までが残るのは９のみである。10･13 の北棺は、同一の可能性があるが、接合部を確認できなかった。９は４条５段で、２・４・５段目に透孔を穿つ。透孔位置は、千鳥状に配置している。底部高は 17cm、突帯間隔は 11.6 ～ 11.8cmに揃い、底部径は 25cmである。外面調整は底部から口縁部にかけて、１次調整タテハケ後、２次調整ヨコハケを施す。５段目では、明瞭なハケ工具静止痕を確認でき、Ｂ種ヨコハケである。内面調整は、２段目まで、ナデを施し、３～５段目にタテハケを施し、頸部は、ユビオサエとナデを確認できる。10 は頸部～胴部にかけての資料である。５段目にヘラ記号を確認できる。突帯間隔は 13cmである。外面調整は１次調整タテハケ後、２次調整ヨコハケを施している。内面調整は、タテハケ後に、頸部の仕上げ時のユビオサエやナデ、ハケなどを確認できる。13 は底部～胴部の資料で２段目に透孔が配置されている。



第 22 図　埴輪棺 1 （S=1/6）



第 23 図　埴輪棺２（S=1/6）

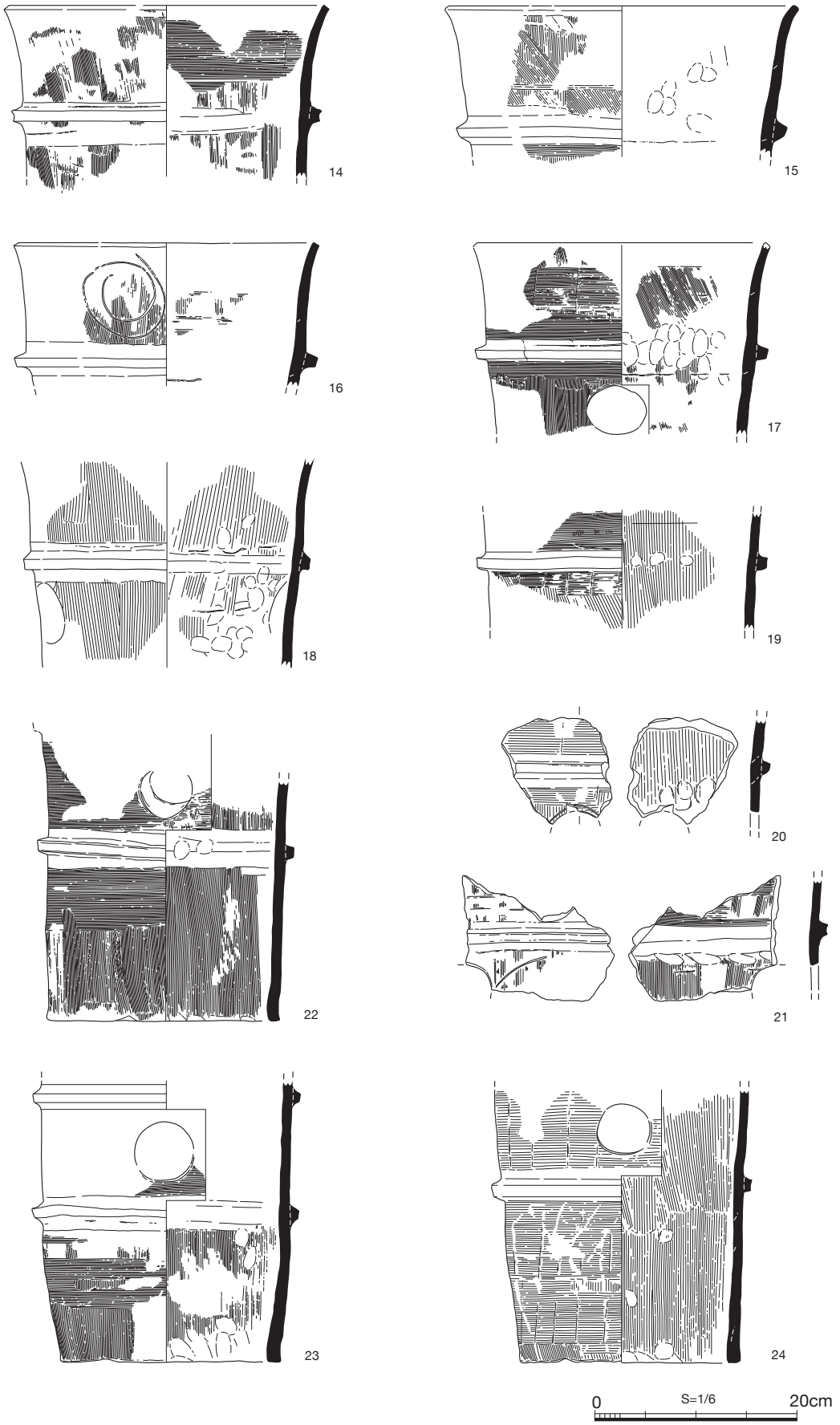
底部高は 18cm、突帯間隔は 11.5cm、12cmである。底部径は 25.6cmである。外面調整は底部から口縁部にかけて、１次調整タテハケ後、２次調整ヨコハケを施す。３段目では、明瞭なハケ工具静止痕を確認でき、B 種ヨコハケである。内面調整は底部に斜め方向のナデを施し、その他は、タテハケを施している。７・８は、口縁部の破片である。埋葬時には破片となっていたものと考えられる。外面調整はタテハケ、内面にはヨコハケ、ナデを施している。

②線刻埴輪

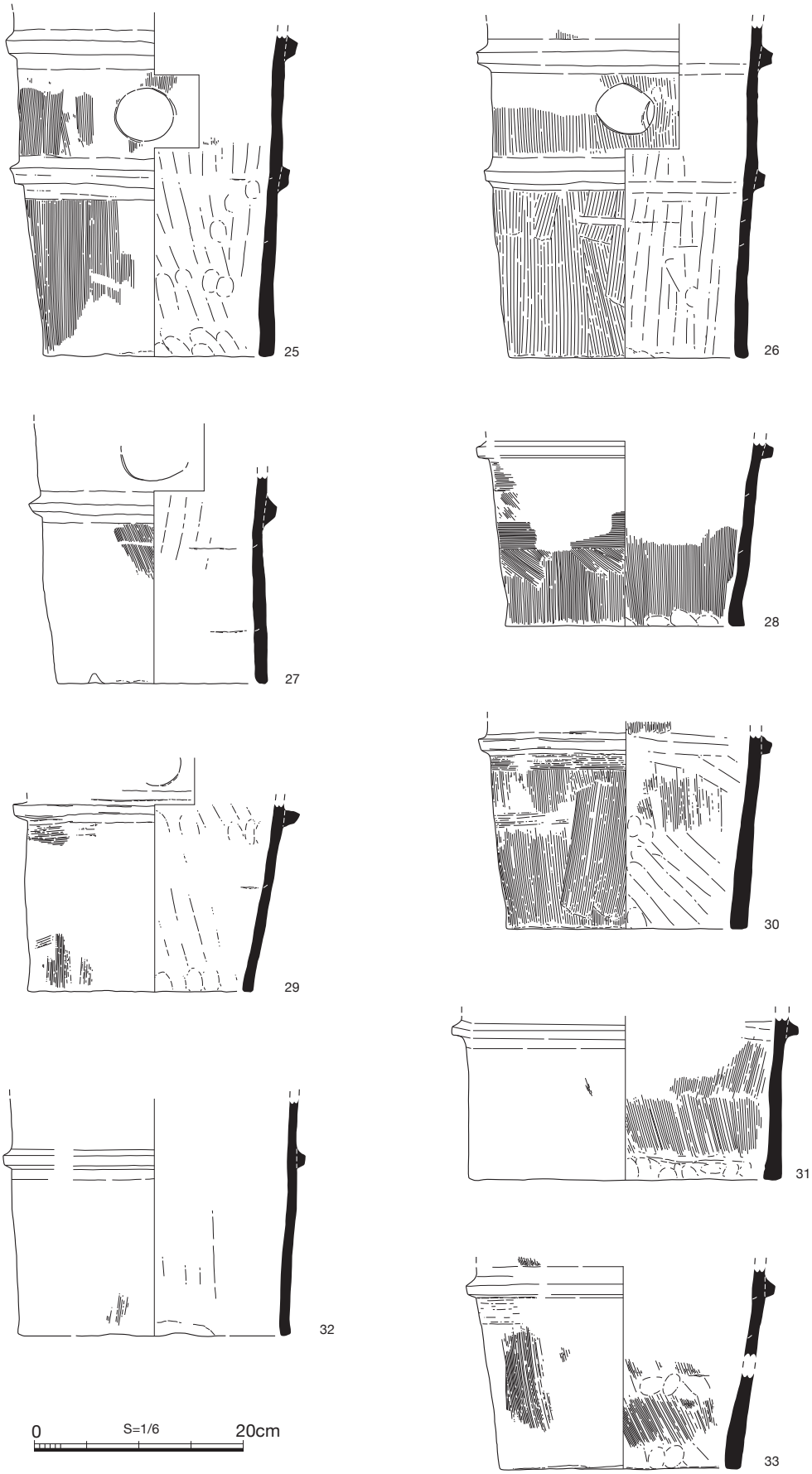
11 は、胴部外面に線刻の文様の入った資料である。北棺に被せて置かれていたと考えられる。外面調整は１次調整タテハケと２次調整ヨコハケを施している。内面はナデ、ハケ、オサエが認められる。外面には、綾杉文や弧線を描いており、他の埴輪に確認できるヘラ記号とは大きく異なる。線刻は焼成前に施すが、何を意図したのかについては不明である。

③普通円筒埴輪

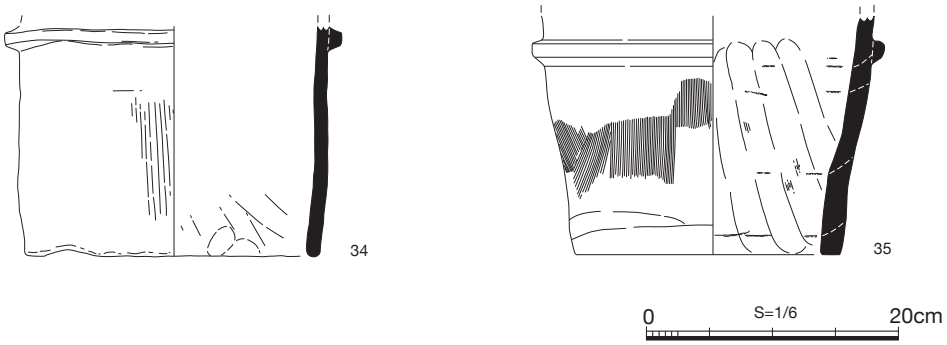
金比羅山古墳出土の埴輪の大部分、コンテナ 23 箱分が円筒埴輪である（京都府教育委員会 1965）。



第 24 図　普通円筒埴輪 1 （S=1/6）



第 25 図　普通円筒埴輪２（S=1/6）



第 26 図　普通円筒埴輪３（S=1/6）

明確に朝顔形円筒埴輪と分かる資料もあるが、破片資料が多く、図化できるものは認められなかった。また、胴部と底部に関しては、朝顔形円筒埴輪と普通円筒埴輪の差異を認識することは困難であり、本報告では、ともに普通円筒埴輪として報告する。

口縁部（14 ～ 17）　復元口縁部径は 29.3 ～ 34.8cmの範囲で、30cm前後にまとまりをみせる。口縁部高は 10.9 ～ 12.6cmで、11cm前後である。17 では円形の透孔を確認できる。最上段の外面調整は、１次調整タテハケのみで終える資料（14･15･16･18）や２次調整Ｂ種ヨコハケを施すもの（17）がある。内面調整はナデやユビオサエのみのものと、ハケとナデを施すものを確認できる。また、16 には、渦巻き状の沈線のヘラ記号を描いている。

胴部（19 ～ 21）　外面調整は１次調整タテハケ後、２次調整Ｂ種ヨコハケを施すものを確認できる。内面調整はタテハケが主体を占める。円形の透孔を穿っており、透孔に沿うように円形の沈線を施すもの（20）や、透孔に１条の沈線を描くもの（21）が認められ、円形の沈線は、透孔の配置を設定する際の目印の可能性があるが、１条の沈線はヘラ記号と想定される。

底部（22 ～ 35）　復元底部径は、多くの資料が 21 ～ 22cm前後で揃うが、31 は 29.9cm、32 が 26.1cm と大きいものも少数ではあるが、含まれる。底部高は 17cm前後でまとまり、一部 23 のように短いものも含まれる。突帯間隔は 11 ～ 12cm前後で揃う。非常に規格が統一されており、まとまった資料である。外面調整は、最下段に、１次調整タテハケのみのものと、２次調整にヨコハケを施すものがあり、ヨコハケには、明瞭な静止痕を確認できる資料がある。また、35 のように基底部のみナデを行うものもある。底部に関して内面調整は外面に二次調整ヨコハケのものはタテハケを主体に施し、外面１次調整タテハケのものは、縦方向のナデを主体に施している。

（3）形象埴輪

形象埴輪としては、家形埴輪・蓋形埴輪・靫形埴輪を確認できた。器種が分からないものについては、不明形象埴輪としている。コンテナ４箱分が出土した。

①家形埴輪

家形埴輪には、屋根、破風板、棟木、壁体、裾廻突帯を確認できる。大量の破片が出土しており、

複数個体の家形埴輪が樹立していたことは確実である。切妻造の家形埴輪の可能性が高い。36 は屋根の軒先である。軒先先端の突帯部分にあたり、わずかながら上方に段がみられる。突帯は貼付突帯である。37・38 は屋根の妻部の破片である。くの字状に屈曲しており、丁寧なナデを施している。棟木を差し込むためのものか、38 のように孔を穿っている。39 は破風板である。上辺に向かって緩やかに彎曲しており、比較的上方の部位の破片と考えられる。厚さが端部に向かって減じている。40・41 は棟木である。板状になっており、棟木先端は断面半円形になっている。42・43 は屋根から壁体にかけての破片である。断面の接合痕より壁体までを積み上げた後、乾燥させ、屋根を積み上げ、軒先を接合させ、製作していることがわかる。42・43 ともに粘土を貼りつけ、段をつけ、柱を表現している。44 ～ 47 は壁体である。柱表現として段をつけている。45 は断面が厚く、規模の大きいものである可能性が高い。また、47 については、内面に突帯が貼りつけられている。48 ～ 53 は裾廻突帯の破片である。48・49・51 ～ 53 のように、突出し途中から斜め下方へ屈曲するいわゆる L 字形突帯と、50 のように屈曲しないものを確認できる。48・49 は外面にハケを施し、赤色顔料を塗布している。50 は沈線を確認できる。51 は、内面に粘土塊が貼りつけられている。壁体への貼りつけの補強のためのものである。52・53 は隅の部分である。色調や製作方法などが近似しているが、大きさが異なり、別個体と考えられる。

家形埴輪はいずれも全体の規模や形状を復元できるものはないが、裾廻突帯の形状や大きさ、赤色顔料の有無など諸要素から、少なくとも 4 個体あり、さらに大型と小型のものであったと想定できる。屋根の構造の分かる資料は多くないが、切妻造が存在することは確実である。

②蓋形埴輪

蓋形埴輪は肋木・笠・立飾が出土している。54 は笠部に貼りつく肋木である。やや小ぶりで、沈線を確認できる。55・56 は笠である。布貼り表現はなく、ともに一条の沈線が縦方向と横方向に施されている。55 では、横方向の一条の沈線と縦方向の沈線が上下段で交差している。56 では外面調整にハケを行っている。内面調整には横方向のナデを行う。57・58 は立飾である。ともにどのような形状の鰭がついていたのか、不明ではあるが、57 は無文で、58 は二条の沈線を確認できる。57 にはハケを施し、軸受部に接地した部分は剥離の痕跡を確認できる。

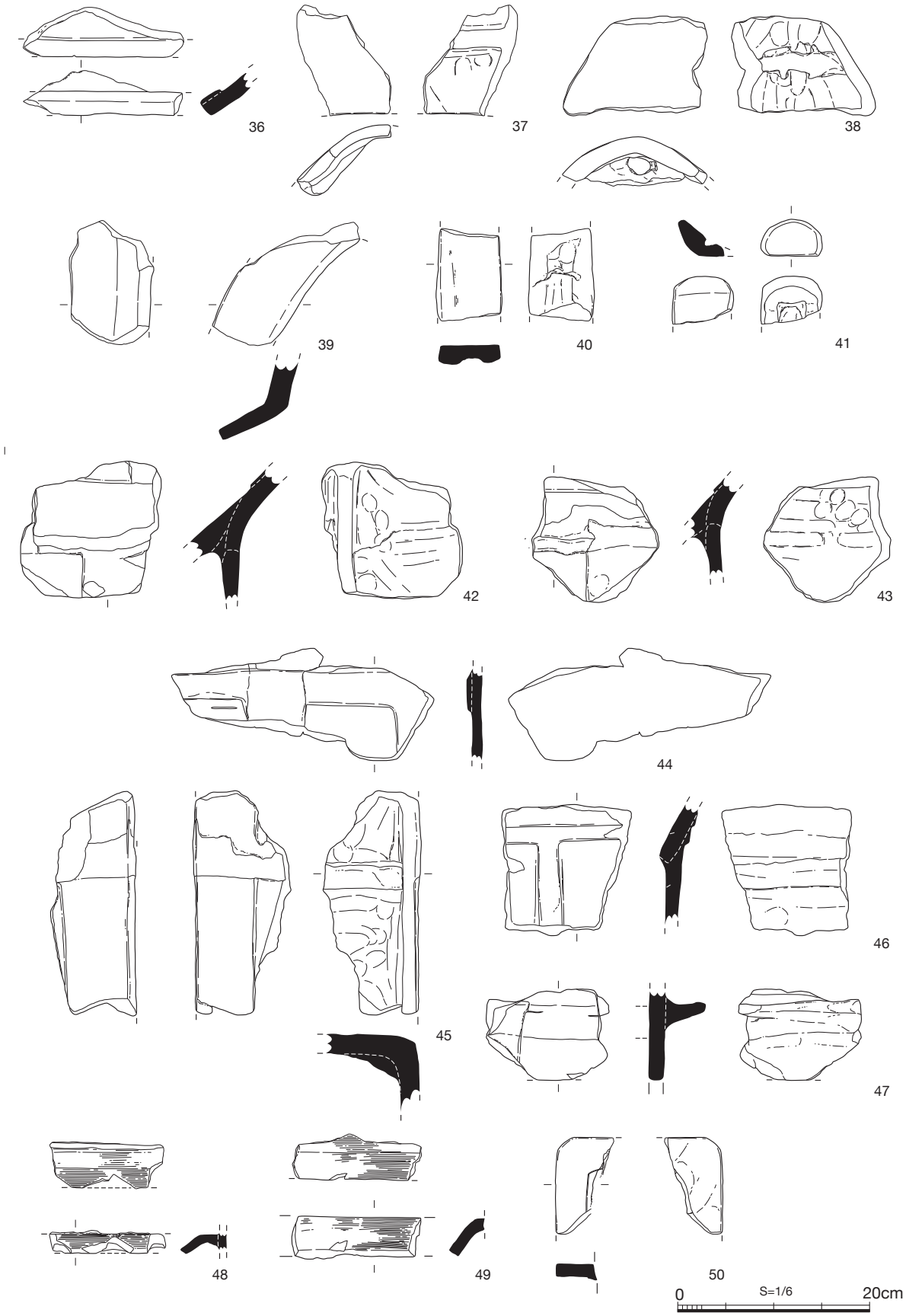
③靫形埴輪

靫形埴輪と特定できる資料は 1 点のみである。59 は矢筒部の上方付近の破片である。箱形の矢筒となっており、格子状の沈線を全面に施している。

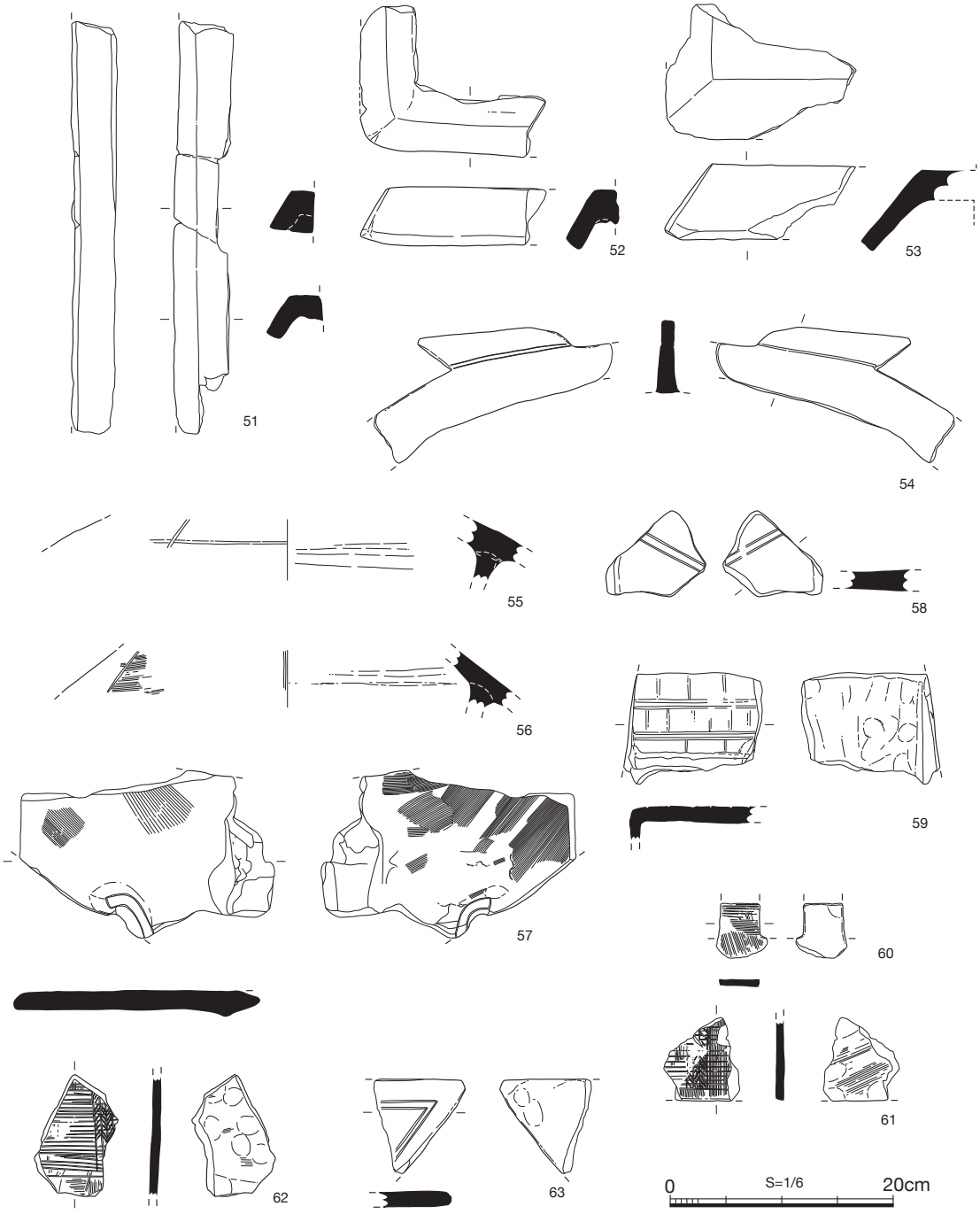
出現して間もない靫形埴輪は、矢筒の外郭や区画などに格子状の沈線を施し、中に直弧文などを施していた。今回の資料では、直弧文はなく、線刻が退化したものと想定できる。

④不明形象埴輪

不明形象埴輪の資料は 4 点である。60 ～ 62 はいずれの資料も薄く、片面にハケを施した後に多条



第 27 図　形象埴輪 1（S=1/6）



第 28 図　形象埴輪２（S=1/6）

の沈線や、61・62 のように綾杉文を施している。63 は片面のみに外形に沿って沈線を施している。

（注）

（１）本報告では、棺身を棺専用として製作した埴製の特製棺を「円筒棺」、樹立埴輪や同等の埴輪を棺としたものを「埴輪棺」と呼称する。

参考文献

犬木　努 2019「宇治市金比羅山古墳出土の円筒棺について」『山城郷土資料館報』第 26 号　京都府立山城郷土資料館

川口修実 2000「畿内における埴輪棺の展開について一試論」『古代学研究』149 号　古代學研究會

川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号　日本考古學會

橋本博文 1980「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢－滝口宏先生古稀記念考古学論集－」滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会

松尾史子 2019「宇治市金比羅山古墳出土円筒棺の修理復元について」『山城郷土資料館報』第 26 号　京都府立山城郷土資料館

付表６　円筒棺・埴輪棺・円筒埴輪観察表

報告番号	出土位置	器種	部位	残存高(cm)	底部高(cm)	口縁部高(cm)	突帯間隔(cm)	底部径(cm)	口縁部径(cm)	残存径(cm)	外面	内面	色調
1	第２主体部	円筒棺（身）	完形	164.5	9.5	6.2	14.7 14.8 15.6 14.2 15.2 14.3 14.5 14.4 15.1	51.0	50.0	－	タテハケ、ヨコハケ	ヨコハケ、ナナメハケ、ナデ	5 YR 7/6 橙
2	第２主体部	円筒棺（蓋）	完形	20.0	－	－	－	58.2	－	－	ヨコハケ	ナナメハケ、ユビオサエ、ナデ	5 YR3/4 暗赤褐
3	第２主体部	円筒棺（蓋）	完形	20.9	－	－	－	57.2	－	－	ヨコハケ	ナナメハケ、ユビオサエ、ナデ	5 YR3/4 暗赤褐
4	東北棺	埴輪棺（普通円筒）	完形	68.0	17.3	12.8	12.5 12.7 12.7	23.0	29.7	－	B 種ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	10YR7/6 明黄褐
5	－	埴輪棺（普通円筒）	口縁部～体部	25.6	－	9.8	13.6	－	33.0	－	B 種ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	7.5YR6/6 橙
6	－	埴輪棺（普通円筒）	ほぼ完形	(62.5)	16.5	11.6	11.5 11.4	20.3	31.4	－	タテハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	10YR7/6 明黄褐
7	北棺	埴輪棺（朝顔）	朝顔部	9.5	－	－	－	－	－	－	タテハケ	ヨコハケ、ナデ	10YR7/6 明黄褐
8	北棺	埴輪棺（朝顔）	朝顔部	13.2	－	－	－	－	－	－	タテハケ	ヨコハケ、ナデ	10YR7/6 明黄褐
9	東棺	埴輪棺（朝顔）	頸部～底部	76.6	17.0	－	11.8 11.6 11.8 11.9	25.0	－	－	B 種ヨコハケ	タテハケ、ヨコハケ、ユビオサエ、ナデ	5 YR 6/6 橙
10	北棺	埴輪棺（朝顔）	頸部～体部	29.4	－	－	13.0	－	32.9	－	タテハケ、一部ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	5 YR 6/6 橙
11	北棺	埴輪棺	体部	26.3	－	－	13.4	－	－	－	ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	10YR7/6 明黄褐
12	－	埴輪棺	第二～第四突帯	32.8	－	－	12.2 12.2	－	30.8	－	B 種ヨコハケ	ナデ	10YR7/6 明黄褐

報告番号	出土位置	器種	部位	残存高 (cm)	底部高 (cm)	口縁部高 (cm)	突帯間隔 (cm)	底部径 (cm)	口縁部径 (cm)	残存径 (cm)	外面	内面	色調
13	北棺	埴輪棺	底部～第三突帯	46.5	18	－	11.5 12.0	25.6	－	－	B 種ヨコハケ	タテハケ、ナデ	7.5YR6/6 橙
14	西側埴輪列	普通円筒埴輪	口縁部～体部	17.0	－	10.9	－	－	31.9	－	タテハケ	タテハケ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙
15	西側埴輪列	普通円筒埴輪	口縁部～体部	14.8	－	12.6	－	－	34.8	－	タテハケ、一部ヨコハケ	ユビオサエ	10YR7/6 明黄褐
16	不明	普通円筒埴輪	口縁部～体部	14.0	－	11.8	－	－	30.1	－	タテハケ	タテハケ、ヨコハケ	5 YR 6/6 橙
17	西側埴輪列	普通円筒埴輪	口縁部～体部	18.4	－	11.0	－	－	29.3	－	B 種ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ	10YR7/4 にぶい黄橙
18	西側埴輪列	円筒埴輪	体部	11.8	－	－	－	－	－	27.3	B 種ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ	10YR7/6 明黄褐
19	西側埴輪列	普通円筒埴輪	体部	20.6	－	－	－	－	－	28.8	タテハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	7.5YR6/6 橙
20	西側埴輪列	円筒埴輪	体部	10.6	－	－	－	－	－	－	B 種ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ	10YR7/6 明黄褐
21	西側埴輪列	円筒埴輪	体部	12.2	－	－	－	－	－	－	タテハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	10YR7/6 明黄褐
22	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	28.0	17.2	－	－	23	－	－	タテハケ、ヨコハケ	タテハケ	7.5YR6/6 橙
23	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第二突帯	27.9	14.8	－	11.3	21.8	－	－	タテハケ、一部ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	7.5YR6/6 橙
24	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	27.0	17.0	－	－	21.8	－	－	B 種ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ	10YR7/6 明黄褐
25	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第二突帯	33.0	17.5	－	12.6	22.1	－	－	タテハケ	ユビオサエ、ナデ	7.5YR6/6 橙
26	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第二突帯	32.0	17.5	－	11.0	22.9	－	－	タテハケ	ナデ	5 YR 6/6 橙
27	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	24.8	16.8	－	－	20.6	－	－	タテハケ	ナデ	5 YR 6/6 橙
28	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	17.6	16.7	－	－	22.8	－	－	タテハケ、一部ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ	10YR7/6 明黄褐
29	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	18.2	17.5	－	－	21.6	－	－	タテハケ、一部ヨコハケ	ナデ	5 YR 6/6 橙
30	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	19.8	17.8	－	－	23	－	－	タテハケ、一部ヨコハケ	タテハケ、ナデ	7.5YR6/6 橙
31	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	17.0	15.0	－	－	29.9	－	－	タテハケ	タテハケ、ユビオサエ、ナデ	7.5YR6/6 橙

報告番号	出土位置	器種	部位	残存高 (cm)	底部高 (cm)	口縁部高 (cm)	突帯間隔 (cm)	底部径 (cm)	口縁部径 (cm)	残存径 (cm)	外面	内面	色調
32	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	22.0	16.8	－	－	26.1	－	－	タテハケ	ユビオサエ、ナデ	7.5YR6/6 橙
33	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	19.2	17.2	－	－	23	－	－	タテハケ、一部ヨコハケ	タテハケ、ユビオサエ	5 YR 6/6 橙
34	東側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	18.2	17.2	－	－	22.5	－	－	タテハケ	ナデ、ユビオサエ	7.5YR6/6 橙
35	西側埴輪列	円筒埴輪	底部～第一突帯	20.8	16.8	－	－	20.8	－	－	タテハケ	ナデ	10YR7/6 明黄褐

付表７　形象埴輪観察表

報告番号	出土位置	器種	部位	残存高	色調	備考
36	西側中段	家	屋根	16.3cm × 4.5cm	10YR7/4 にぶい黄橙	
37	墳頂	家	屋根	9 cm × 12cm	10YR 7/6 明黄橙	
38	西側中段	家	屋根	14.3cm × 10cm	10YR 7/6 明黄橙	
39	西側中段	家	屋根	14㎝× 13㎝	7.5YR7/6 橙	
40	西側中段	家	棟木	6.7cm × 9.7cm	7.5YR6/6 橙	
41	西側中段	家	棟木	6.2cm × 4.2cm	7.5YR7/6 橙	
42	西側中段	家	屋根～壁体	13.4cm × 14cm	7.5YR7/6 橙	柱表現あり
43	西側中段	家	屋根～壁体	13.8cm × 12.8cm	7.5YR6/6 橙	柱表現あり
44	西側中段	家	壁体	28.3cm × 11.7cm	5 YR 6/6 橙	赤彩あり、柱表現あり
45	西側中段	家	壁体	8.8cm × 23.2cm	5 YR 6/6 橙	柱表現あり
46	西側中段	家	壁体	13.1cm × 13.6cm	7.5YR7/6 橙	柱表現あり
47	西側中段	家	壁体	12.6cm × 9.3cm	5 YR 6/6 橙	
48	墳頂	家	裾廻	11.4cm × 4.8cm	10YR7/4 にぶい黄橙	
49	墳頂	家	裾廻	13.5cm × 4.5cm	10YR7/4 にぶい黄橙	
50	墳頂	家	裾廻	6.6cm × 10cm	7.5YR7/6 橙	
51	西側中段	家	裾廻	36.8cm × 4.5cm	10YR 7/6 明黄橙	
52	西側中段	家	裾廻	16.5cm × 13.5cm	10YR 7/6 明黄橙	
53	西側中段	家	裾廻	12.0cm × 17.0cm	10YR 7/6 明黄橙	
54	墳頂	蓋	笠	22.1cm × 8 cm	10YR7/4 にぶい黄橙	
55	墳頂	蓋	笠	－	10YR7/4 にぶい黄橙	一条の線刻あり
56	墳頂	蓋	笠	－	10YR 7/6 明黄橙	一条の線刻あり
57	西側中段	蓋	立飾	23.0 × 14.8cm	10YR7/4 にぶい黄橙	ハケのみ
58	墳頂	蓋	立飾	9.0cm × 7.5cm	5 YR 6/6 橙	一条の線刻あり
59	墳頂	靫	矢筒	12.6cm × 9.6cm	5 YR 6/6 橙	
60	墳頂	不明	－	4.4cm × 4.8cm	5 YR 6/6 橙	
61	墳頂	不明	－	7.4cm × 7 .5cm	5 YR 6/6 橙	
62	墳頂	不明	－	7.4cm × 10.4cm	5 YR 6/6 橙	
63	墳頂	不明	－	8.1cm × 8.5cm	10YR7/4 にぶい黄橙	

7　総括

金比羅山古墳出土資料は、副葬品と埴輪類の良好な一括資料として以前から注目され、川西宏幸氏（川西 1978 ほか）や和田晴吾氏（和田 1987）の研究では、円筒埴輪ひいては古墳編年における中期前葉の標識資料の一つと位置づけられてきた。本章では、その後も蓄積されてきた前・中期古墳の編年研究を鑑みて、金比羅山古墳の副葬品と埋葬施設、円筒埴輪編年における位置づけを改めて行う。

また、金比羅山古墳は南山城地域最大の首長墓群である久津川古墳群において、最大の前方後円墳である久津川車塚古墳の一世代前の首長墓である。歴史的位置づけについても若干の考察を行う。

（1）副葬品・埋葬施設編年における位置づけ

近年深化している副葬品及び埋葬施設の編年研究の動向を参照しながら、改めて副葬品と埋葬施設の年代観を検討する。

①銅鏡

斜縁二神二獣鏡は「漢鏡７期」（岡村 1993）に位置づけられる。斜縁神獣鏡編年で古相か新相かは、論者によって評価が分かれる（村松 2004・実盛 2009）が、製作時期の暦年代は、おおまかに３世紀前半として問題は無いであろう。したがって、製作から金比羅山古墳への副葬まで 100 年以上の期間が想定される。

②刀剣

全ての資料が小型で、「短剣」･「短刀」に分類される。日本列島での短刀の製作開始は前期中葉（豊島 2007・2019）とされ、中期にも継続する。

③鉄製農工具

「概要」で、金比羅山古墳の時期が中期（「５世紀」）に下る根拠とされたのが、第１・２埋葬施設から出土した蕨手刀子である。しかし、その後の研究の進展により、前期に遡る蕨手刀子の出土事例が確認されたため、蕨手刀子が出土した古墳が、自動的に中期に比定されるわけではなくなった（河野 2018 ほか）。現在の編年観では、前期末に蕨手刀子がまとまって出てくるとされる（魚津 2020）。また、鉈は屈曲する鉤形のタイプが含まれるが、このタイプも前期末以降に出現し、特に多種多様な農工具が出土する古墳でよく出土するとされる（野島 2011）。

④石製玉類

翡翠製勾玉は緑色系で透明度がある丁字頭勾玉である。両面穿孔で穿孔部はすり鉢状を呈する。前期中葉から末葉に位置づけられる。碧玉製勾玉は片面穿孔で穿孔部が小さく、前期後葉以降に位置づけられる。緑色凝灰岩製勾玉は、山陰の製作技法を導入して畿内で製作されたと考えられるもので、

中期前葉に位置づけられる[注1]（大賀 2002・2010）。また、勾玉は大きさと形態が２個ずつそろうが、こうしたセット関係は中期古墳に認められるという[注2]（米田 2020）。

碧玉製管玉は花仙山産と考えられ、前期後葉から末葉に特有の領域ＪＦｂの規格に該当する（大賀 2010）。

⑤ガラス小玉

詳細は附編に記載されているが、ガラス小玉はカリガラスで、中アルミナタイプの Group PI に属する。そして、Group PI をさらに細別すると「紺小」タイプに属する。インド・パシフィックビーズに包含されるガラス玉で、日本列島における最古のガラス玉の一つとして弥生時代中期初頭から中葉、後期前葉の北部九州と近畿北部でみられる。Group PI は古墳時代前期に一度姿を消し、中期に再流入するが、そのタイプは「紺大」･「紫粟」タイプであるという（大賀 2020）。したがって、「紺小」タイプである金比羅山古墳出土ガラス小玉は非常に珍しい事例で、確実な類例が乏しく時期決定の手段にはならない。

⑥埋葬施設

第１埋葬施設は、粘土槨に割竹形木棺を収める構造である。棺床粘土の設置前に墓壙南端を溝状に掘削して礫を充填するが、礫敷は形成されない。礫敷の無い粘土槨は、前期後葉から存在し中期まで継続する。第２埋葬施設は、通有の粘土槨ではないが、墓壙底の四周に溝を巡らせ礫を充填する。礫敷の形骸化とも捉えられる。こうした礫敷施工の省力化は、前期末に認められる（上田 2015）。

⑦小結

上記の検討から金比羅山古墳副葬品及び埋葬施設の時期を比定する。まず、鉄製農工具と埋葬施設の特徴から、第一・二埋葬施設の両方とも前期末以降と考えられる。そして、第一埋葬施設に副葬される緑色凝灰岩製勾玉は、中期前葉にだけ特徴的に存在する遺物で、時期比定の重要な指標となり得る。

この他の副葬品では、突出して古いのは製作年代が３世紀に遡る斜縁二神二獣鏡であるが、この資料は伝世が想定される。また、翡翠製勾玉も中期にはすでに製作が終了している器物であるが、これも、製作から副葬までの期間を長く見積もれば、副葬の時期が中期に下がっても矛盾はない。そのほかの副葬品は鉄刀、鉄剣であるが、前期中葉から中期までの広い範囲に収まるため、細かい時期比定には適さないようである。

したがって、金比羅山古墳の副葬品には、古い要素を示す遺物が若干含まれるものの、帰属時期を中期初頭以前に遡らせる積極的な根拠は乏しい。時期比定の根拠資料は従来とは異なるが、これまでの見解どおり、中期前葉に比定するのが妥当と判断する。

（古川）

（2）円筒埴輪編年における位置づけ

金比羅山古墳では、墳裾より埴輪列が検出され、多くの円筒埴輪が出土している。埴輪列から出土したもので、全形を復元できる資料はないが、古墳周辺から出土した埴輪棺は形態的・技法的属性が埴輪列のものと一致しており、報告編で述べたように出土状況からも時期差はなく、同一の埴輪製作集団によって製作されたものと考えられる。ここでは、埴輪棺を含めた円筒埴輪をもとに周辺地域と比較しながら、編年的位置づけを検討するものとしたい。

①金比羅山古墳出土円筒埴輪の特徴

金比羅山古墳出土の普通円筒埴輪は、４条５段で、円形透孔を２孔縦列状に配置する。朝顔形円筒埴輪も４条５段ではあるが、円形透孔を２孔千鳥状に配置する。外面調整は、一次調整タテハケと二次調整ヨコハケが施される。二次調整ヨコハケには、静止痕が明瞭に残るＢ種ヨコハケと静止痕が明瞭に残らないヨコハケが認められる。突帯設定技法には凹線技法が用いられている。底部高や突帯高に非常にまとまりがあり、全体の底部高は 14.8 ～ 18.2cmで、多くの資料が 16 ～ 18cm にまとまる。全体の突帯高は 10.9 ～ 13.6cmで、口縁部高の分かる資料は少ないが、全体が 9.8 ～ 12.8cmで、多くが 11 ～ 12cmにまとまる。統一性の高い生産を行っているといえる。Ｂ種ヨコハケを施し、黒斑を伴うことから、従来の研究では川西Ⅲ期に位置付けられている（川西 1978）。

②南山城地域の円筒埴輪

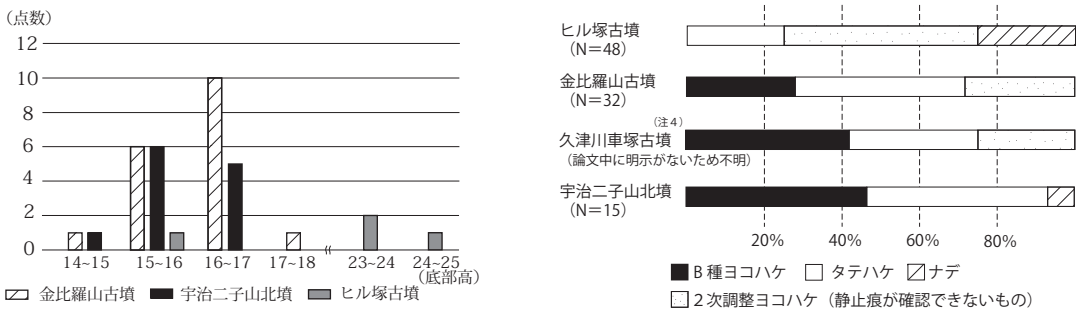
南山城地域で、金比羅山古墳と時期を前後する時期の円筒埴輪の比較が可能な遺跡としては、川西Ⅱ期に比定される八幡市女郎花遺跡、八幡市ヒル塚古墳、宇治市庵寺山古墳、川西Ⅲ期に比定される宇治市宇治二子山北墳、城陽市久津川車塚古墳が挙げられる。Ⅱ期の特徴は高い底部高である。Ⅱ期古相では、突帯間隔の２倍の高さである底部高が、Ⅱ期新相には徐々に低くなっていく（廣瀬 2006・2015）。Ⅲ期の大きな特徴は、Ｂ種ヨコハケの出現となっている（川西 1978）。これらの点に注目して概観していく。

女郎花遺跡出土の埴輪は、底部高約 12 ～ 21cmで、突帯間隔 10 ～ 12cm、口縁部高は約７cmである。全体形状は不明であるが、透孔は半円形、方形、円形である。外面調整は一次調整タテハケ、静止痕の明瞭に残らない二次調整ヨコハケを施す。

ヒル塚古墳出土の埴輪は、底部高 23.6 ～ 24.5cmで、一点のみ 15cmのものがある[注3]。突帯間隔 14 ～ 16.2cm、口縁部高は 8.3 ～ 10.6cmと 16.9cmに分かれる。全体形状は、透孔は半円形、方形、円形である。外面調整は一次調整タテハケ、静止痕の明瞭に残らない二次調整ヨコハケを施す。

庵寺山古墳出土の埴輪は底部高 16 ～ 17cm、突帯間隔 13 ～ 14cm、口縁部高は約 10cmである。６条７段で、透孔は半円形、方形、三角形、円形で、縦列状に配置する。外面調整は一次調整タテハケと静止痕の明瞭に残らない二次調整ヨコハケを施す。

宇治二子山北墳出土の埴輪は底部高約 15 ～ 17cm、突帯間隔約 13cm、口縁部高は約 11 ～ 13cmである。全体形状は不明であるが４条５段に復元される。透孔は円形と方形が確認でき、２孔縦列状に配置す



第 29 図　南山城地域出土円筒埴輪の底部高と外面調整

る。外面調整は一次調整タテハケとＢ種ヨコハケを施す。

久津川車塚古墳出土の埴輪は詳細な分析がなされており（原田 2015）、底部径によって KL 群、KS 群、特大群に分類されている。KL 群は底部高 14 ～ 17.5㎝、突帯間隔 15㎝、口縁部高は 17㎝である。４条５段で、透孔は円形で、二孔千鳥状に配置する。外面調整はタテハケ、静止痕の明瞭に残らない二次調整ヨコハケやＢ種ヨコハケを施す。KS 群は底部高約 12 ～ 16㎝、突帯間隔が約 13㎝、口縁部高約 12㎝である。

③底部高と外面調整の比較（第 29 図・第 30 図）

上記で挙げたようにⅡ期の埴輪の特徴が底部高と突帯間隔と口縁部高の割合の変化である。また、Ⅲ期の特徴はＢ 種ヨコハケの出現となる。上記で挙げた資料をもとに、資料が残りやすい底部高の高さと外面調整から編年を検討する。(注4・5)

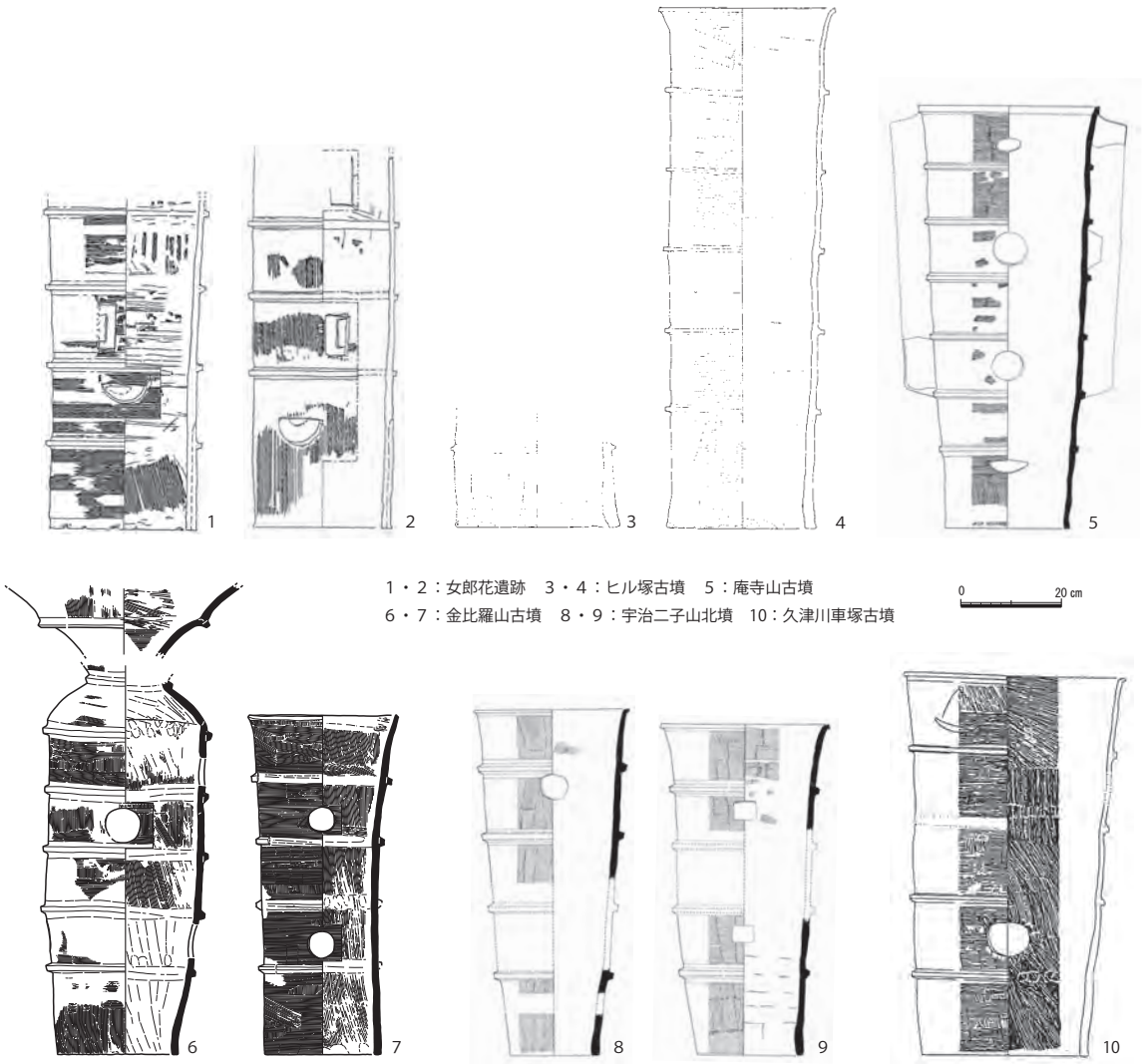
南山城地域において、Ⅱ期の古相とされる女郎花遺跡やヒル塚古墳の底部高が 20㎝を超える資料が多い。短いものもほかの底部高の半分に設定されている。Ⅱ期新相になると 17㎝程度と低くなり、Ⅲ期に比定される宇治二子山北墳では、やや縮小化され、久津川車塚古墳の資料では、約 15㎝程度にまとまるようになる。金比羅山古墳の資料はⅡ期新相とほぼ同一の高さである。

外面調整をみるとⅡ期古相では、静止痕の明瞭に残らないヨコハケとタテハケ、ナデが認められる。Ⅱ期新相の状況は不明であるが、金比羅山古墳ではＢ種ヨコハケは３割程度である。Ⅲ期の宇治二子山北墳や久津川車塚古墳では、割合が４割程度まで施されるようになる。

このような変化をしていく中で、金比羅山古墳の資料は、底部高でいくとⅡ期新相と変わらない高さをもつものの、Ｂ 種ヨコハケが３割程度まで普及している。Ｂ種ヨコハケを施さない庵寺山古墳より新しく、割合が増加していく久津川車塚古墳や宇治二子山北墳より古いとする従来の位置づけと同じものとなる。

④小結

周辺の古墳のみではあるが、時代を前後する資料を概観したところ、Ⅱ期の特徴といえる突帯間隔の二倍の高さになるように設定される底部高が漸次的に低くなっていく様相とⅢ期のＢ種ヨコハケが出現する様相を南山城地域で確認できた。これらの資料の中で全体形状や透孔の配置、底部高など金比羅山古墳の埴輪と類似点の多い資料としては、宇治二子山北墳が挙げられるが、宇治二子山北墳



第 30 図　Ⅱ・Ⅲ期の南山城地域出土円筒埴輪（S= 1 /15）

では、２次調整ヨコハケが、静止痕が明瞭に残るＢ種ヨコハケのみであり、金比羅山古墳の円筒埴輪より新しいものと考えられる。

金比羅山古墳の埴輪は南山城地域における中期的な様相が出現する時期の資料であり、山城地域の中期前葉の代表的な資料であることを再確認することができた。一方で、金比羅山古墳出土埴輪の中には、古い要素を残す資料もある。口縁部高が低い円筒埴輪や、今回は検討できなかった形象埴輪で、笠部に１条沈線で上下段交差する蓋形埴輪などである。これらの特徴は、Ⅱ期からⅢ期にかけての円筒埴輪の特徴であり、同様な状況は、乙訓地域の円筒埴輪でも確認されている（角 2019）。本資料は、南山城地域における古墳時代中期の埴輪の生産・製作地術の導入を考える上で、重要な資料と評価できる。(注6)

（北山）

（３）金比羅山古墳の歴史的評価

（１）･（２）の副葬品及び埴輪の検討から、金比羅山古墳の時期は古墳時代中期前葉に位置づけられ、

既往の編年では、和田晴吾による編年の六期（和田 1987）、広瀬和雄による編年（通称「前方後円墳集成編年」）（広瀬 1992）の５期及び大賀克彦による編年の中Ⅰ期（大賀 2002）に該当する。この検討を踏まえて、改めて地域社会及び近隣地域との関係から、金比羅山古墳の位置づけを試みる。

金比羅山古墳は、久津川古墳群北支群（広野支群）に属し、前代の庵寺山古墳に続く首長墳である。同地域では、金比羅山古墳の後は後期の坊主山１号墳まで、首長墳の造営がしばらく途絶える。また、中央支群の西山古墳群、南支群（富野支群）の梅の子塚古墳群の造営も前後して停止する。

金比羅山古墳の次の段階は、南山城地域最大の前方後円墳である久津川車塚古墳に代表される、近畿地方中央部でも屈指の首長墓群が現在の城陽市平川・久世に形成された。和田晴吾は、この首長墓群が、盾形周濠を有する大型前方後円墳と、従属する方墳や帆立貝形墳から構成されることに注目し、大首長とこれを補佐する首長の墓と推定した（和田 1988）。そして、その系譜を、前代に造営が途絶える広野、富野、西山の古墳にたどっている。さらに、こうした権力の集中の背景には、「ヤマト王権」の地方政策があり、この地域の内在的な契機だけによるものではないと想定した。和田の想定の背景は、中期前葉以前の久津川古墳群の首長墳の埋葬施設が竪穴式石槨を採用せず、簡素な小型のものが主体であったこと等による。そして、前方後方墳が一定の割合を占めることも指摘している。

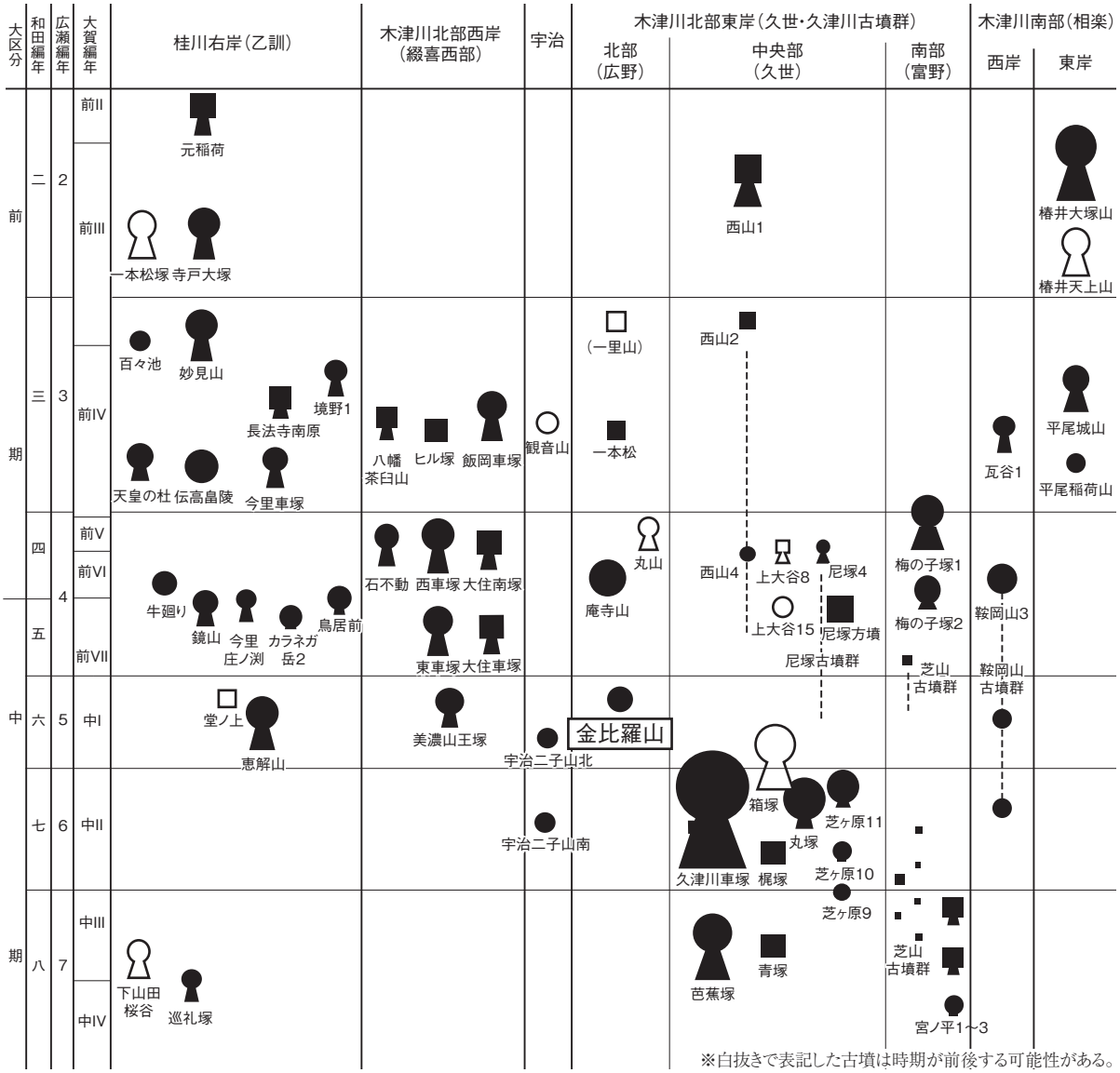
そして、岸本直文は、前期初頭の芝ヶ原古墳とそれに続く西山１号墳が前方後方墳であること、さらに芝ヶ原古墳から近江系土器が出土し、西山１号墳の副葬品組成が墳丘規模の割に簡素であることに注目し、久津川古墳群が形成されはじめた古墳時代前期の久世地域は、近江など東方社会との関係が強く、当初は「倭王権」とは強い関係を持たない地域と位置づけている。そして、「倭王権」との関係が強まるのは、庵寺山古墳や梅の子塚古墳群が築造される時期以降と位置づけた（岸本 2014）。

こうした前後の時期の状況から、金比羅山古墳は、地域の独自性が強い段階から、ヤマト（倭）王権との関係が強固となって大型前方後円墳が登場する段階までの、過渡期に属するといえる。

ここで、金比羅山古墳の副葬品を改めて見ると、農工具、玉類、中国鏡が主で、棺外に刀剣が副葬されるとはいえ、甲冑や鉄鏃といったその他の武器、武具類は含まれないことがわかる。

金比羅山古墳の造営時期と前後する前期末から中期前葉にかけて、桂川右岸地域の鳥居前古墳（広瀬編年４期）、木津川上流西岸部の鞍岡山３号墳（４期）、木津川北部西岸の石不動古墳（４期）、美濃山王塚古墳（５期）、宇治地域の宇治二子山北墳（５期）といった山城地域の首長墳では、甲冑の副葬事例が増加する（阪口 2019）。すなわち、同時期の他地域の首長墳では、中期特有の「武」の要素が既に顕在化していると言える。しかしその一方、金比羅山古墳の副葬品にはこのような特徴が希薄で、非軍事的な首長像が想定される。(注８)

金比羅山古墳の次に築造された可能性のある箱塚古墳の様相が残念ながら不明ではあるが、広瀬編年４期に既に甲冑副葬が認められる他地域と比べると、当地域のいわば「武装化」は、１世代もしくは２世代遅れていたと見込まれる。したがって、金比羅山古墳から、鉄製甲冑を始めとする武器武具を多量に副葬し長持形石棺を埋葬施設とする大型前方後円墳･久津川車塚古墳の築造に至るまでには、この地域における権力構造の急激かつ大きな変化が想定されるのである。その背景には、和田の指摘したとおり「ヤマト（倭）王権」による外部からの働きかけがあったのであろう。



第 31 図　金比羅山古墳と近隣地域の古墳

一方で、金比羅山古墳からは、他地域との交流も見受けられる。第二埋葬施設の円筒棺の類例は、南山城地域だけでなく、奈良盆地北部や北葛城郡の古墳でも確認されている（犬木 2020）。そして、この時期の短刀を検討した豊島直博（豊島 2019）は、分布状況から、製作主体を南山城地域または北葛城郡の馬見丘陵古墳群といった、前期後葉に台頭した集団と想定する。また、同様に農工具を検討した魚津知克（魚津 2019）は、手鎌の形態に注目し、板状の手鎌は、摂津、山城、丹波といった地域に分布し、折返しのある型式の手鎌は、大和及び河内地域に分布することを指摘している。第二埋葬施設に副葬された手鎌は後者のタイプで、副葬品とともに被葬者が出身地に帰葬されたと仮定すれば、死後に鉄製品を入手したとしても、大和または河内との生前の関係が深かったことを反映しているといえる。円筒棺の製作主体を検討する上でも、鉄製品の様相との近似は、興味深い現象である。

さらに、第二埋葬施設出土の農工具には、他にも重要な資料が含まれる。刀子を転用して製作された２点の鉇である。この資料は、古墳に副葬される鉄製農工具には、祭器として製作されたものだけではなく、実用品も含まれていたことを示唆する資料である。さらに踏み込めば、実用の生産用具で

ある鉄製農工具の生産から流通についても、地域間関係が反映されていた可能性があると考えられる。

このように、金比羅山古墳は、従来注目されてきた編年の基準としてだけでなく、古墳時代中期の地域社会及び地域間関係を検討する上でも、示唆的な内容を有する古墳といえる。

（古川）

おわりに

昭和 39 年（1964）に実施された金比羅山古墳の発掘調査は、京都府教育委員会直営の発掘調査としては初期の事例である。本書の作成作業は、先人の努力と苦労に思いを馳せながら進められた。多くの人が関わって世に出ることとなった本書が、今後、広く活用されることを期待する。

なお、金比羅山古墳出土資料は、令和３年３月に京都府指定有形文化財（府指考第 39 号）に指定された。今後、より良い保存・活用を模索していきたい。

（注）

（１）特に石製玉類の編年観については、大賀克彦氏の御教示を得た。

（２）ただし、米田克彦（米田 2020）によると、「同質同形で２個一対」とされるため、碧玉製と緑色凝灰岩製のセットである本事例は、やや異質であるかもしれない。

（３）第１突帯まで残存している資料は、多くないが、底部高が 20cm以上になる資料が多数確認されている（北山 2017）。

（４）第 29 図は、原田 2015 掲載のグラフをもとに北山が作成した。

（５）第 30 図の出典は以下のとおりである。１・２：八幡市教育委員会 1999、２・３：北山 2017、４：宇治市教育委員会 1990、５・６：宇治市教育委員会 1991、７：城陽市教育委員会 1986

（６）金比羅山古墳出土円筒埴輪の評価については、泉眞奈、犬木努、木村理、村瀬陸、廣瀬覚の各氏から御教示を得た。

（７）第 31 図における各古墳の編年的位置づけは、宇野 2017、桐井・北山・菊池・繰納 2020 を参照した。

（８）人骨が遺存しないため、被葬者の性別は詳細不明であるが、鉄鏃、甲冑、鍬形石といった男性特有の副葬品（清家 2010）が一切含まれないことは、被葬者像を検討する上で示唆的である。

参考文献

宇治市教育委員会 1990「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 15 集

宇治市教育委員会 1991『宇治二子山古墳発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告』第２冊

城陽市教育委員会 1986「久津川車塚古墳・丸塚古墳発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第 15 集

八幡市教育委員会 1999『女郎花遺跡第３・５次発掘調査概報』『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 28 集

上田直弥 2015「粘土槨の展開過程とその画期」『考古学研究』第 62 巻３号　考古学研究会

魚津知克 2019「鉄製農工具副葬における前期と中期のはざま」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第 54 集

魚津知克 2020「鉄製農工具の分類と様式設定」『中期古墳研究の現状と課題Ⅳ～副葬品による広域編年再考』中国四国前方後円墳研究会

宇野隆志 2017「京都盆地における古墳と集落の動態」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館

梅本康広 2016「山背地域の円筒埴輪編年概観」『埴輪論叢』第５号　埴輪検討会

大賀克彦 2002「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　福井県清水町教育委員会

大賀克彦 2010「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価－半島系管玉の出土を中心に－」『東大寺山古墳の研究』

大賀克彦 2020「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしえの河をのぼる』古川登さん退職記念献呈考古学文集

岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗学博物館研究報告』第 55 集

川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64 巻第２号　日本考古學會

河野正訓 2018「農工漁具」『前期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会

岸本直文 2014「芝ヶ原古墳の位置づけをめぐって」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 68 集－芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書－』

北山大熙 2017「埴輪からみた八幡市ヒル塚古墳」『畿内の首長墳』立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻

桐井理揮・北山大熙・菊池　望・繰納民之 2020「西山１・２号墳出土遺物の再検討」『同志社大学歴史資料館報』第 23 号

阪口英毅 2019「鳥居前古墳出土甲片の意義」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第 54 集

実盛良彦 2009「斜縁神獣鏡の変遷と系譜」『広島大学考古学研究室紀要』第１号

角早季子 2019「鳥居前古墳出土埴輪の編年的位置付けについて」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第 54 集

清家章 2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会

豊島直博 2007「古墳時代前期の刀装具」『考古学研究』第 54 巻１号　考古学研究会

豊島直博 2019「古墳時代前・中期の短刀」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第 54 集

野島永 2011「鉄製農工漁具」『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』 同成社

原田昌浩 2015「古墳時代中期の埴輪生産」『考古学研究』第 61 巻第４号　考古学研究会

広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編　山川出版社

廣瀬　覚 2006「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡五色塚古墳　小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会

廣瀬　覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社

村松洋介 2004「斜縁神獣鏡研究の新視点」『古墳文化』創刊号　國學院大學古墳時代研究会

米田克彦 2020「中四国地方における中期古墳の玉類副葬」『中期古墳研究の現状と課題Ⅳ～副葬品による広域編年再考』中国四国前方後円墳研究会

和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第 34 巻第２号　考古学研究会

和田晴吾 1988「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』４　立命館大学人文科学研究所

8　附編　金比羅山古墳出土ガラス小玉の自然科学的調査

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
田村　朋美

（1）はじめに

金比羅山古墳からは、32 点のガラス小玉が出土している。本調査では、金比羅山古墳から出土したこれらのガラス小玉の製作技法と化学組成の特徴を把握することを目的として、自然科学的調査を実施した。以下、その結果について報告する。

（2）資料と方法

調査対象とした資料は、金比羅山古墳から出土したガラス小玉 30 点（分析 No.1 ～ No.30）および２個体分の破片である（破片１および２）。すべて紺色透明を呈する（第 33 図・第 34 図）。

これらのガラス小玉について、顕微鏡観察による製作技法の推定と、蛍光 X 線分析による化学組成の調査を実施した。蛍光 X 線分析にあたっては、顕微鏡下で風化の影響ができるだけ少ない場所を測定箇所に選定し、超音波およびエチルアルコールを用いて洗浄したうえで実施した。測定結果は、測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料（CG-A、SG5、SG7、SGT5、NIST620）を用いて補正した理論補正法（FP 法）により、検出した元素の酸化物の合計が 100％になるように規格化した。

測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（エダックス社製 EAGLE Ⅲ）である。励起用 X 線源はロジウム（Rh）管球、X 線照射径は 50 μm である。管電圧 20 kV、管電流 200 μA、計数時間 300 秒とし、真空中で測定した。

（3）結果と考察

①製作技法

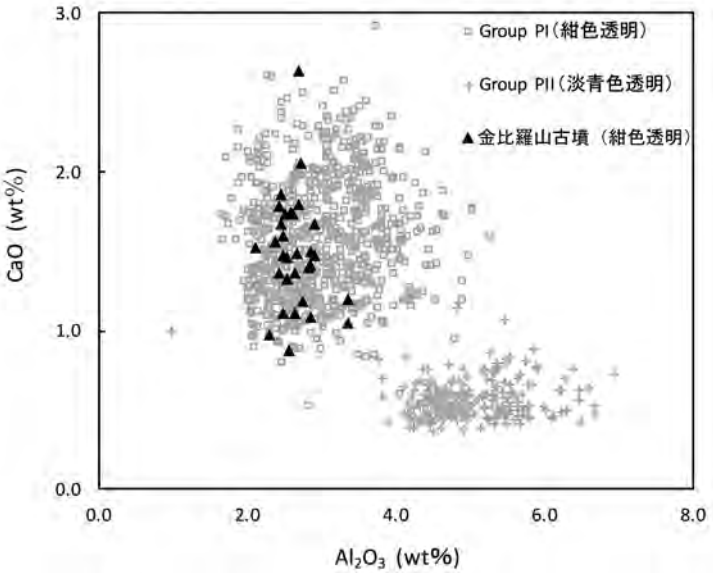
ガラス小玉については、すべて引き伸ばし法で製作されたと推定される。引き伸ばし法は、軟化したガラスを引き伸ばしてガラス管を作り、それを分割して小玉を製作する方法で、孔と平行に並ぶ気泡列が認められるのが特徴である。

②蛍光 X 線分析による材質分類

蛍光 X 線分析の結果、金比羅山古墳出土のガラス小玉は、いずれも K_2O を 10.0-17.0％含有するカリガラスであった（付表 8）。着色に関与する成分として、いずれも CoO を少量含有しており（CoO：0.05-0.12％、平均 0.07％）、コバルトイオンが主要な着色成分である。コバルト原料の特徴として、不純物と考えられる MnO を 1.21-3.04％含有し、CuO および PbO の含有量がきわめて少ない（0.1％未満）。

既往研究において、日本列島で出土するカリガラスは、CaO と Al_2O_3 の含有量から二種類（Group PI、Group PII）に大別され、さらに Group PI はコバルト着色の紺色カリガラスに、Group PII は

銅着色の淡青色カリガラスに対応することが明らかとなっている（Oga and Tamura 2013）。本調査の結果、金比羅山古墳出土のガラス小玉については、基礎ガラスの種類と着色剤の関係において先行研究の分類と一致する結果が得られた。すなわち、金比羅山古墳出土のガラス小玉はいずれも、Al2O3 含有量が相対的に少なく、CaO 含有量が多いタイプのカリガラス（Group PI）に相当することがわかった（第 32 図）。



第 32 図　カリガラスの細分

Group PI のカリガラス小玉は時期により大きさが変化することが知られている（大賀 2020）。具体的には、弥生時代後期前半までは直径が３～４mm を中心とする小型品に限定されるが、弥生時代後期後半から直径が５mm を超えるような大型品と直径が２mm 前後で紫色味の強いものに入れ替わる。古墳時代前期には流通量が激減するが、中期前半に再度流通する。この時流通するのは大型品であり、端面が顕著に研磨されるものが一般的である。金比羅山古墳出土品はすべて小型品であり、端面も研磨されていないものが多い。すなわち、小型の Group PI のみからなる金比羅山古墳のガラス小玉の構成は、古墳時代では極めて稀であるといえる(注)。したがって、ガラス小玉から金比羅山古墳の時期について限定することは難しい。

（注）材質分析は行われていないが、和泉黄金塚古墳東槨から類似の構成のガラス小玉が出土している（大賀克彦氏のご教示による）。

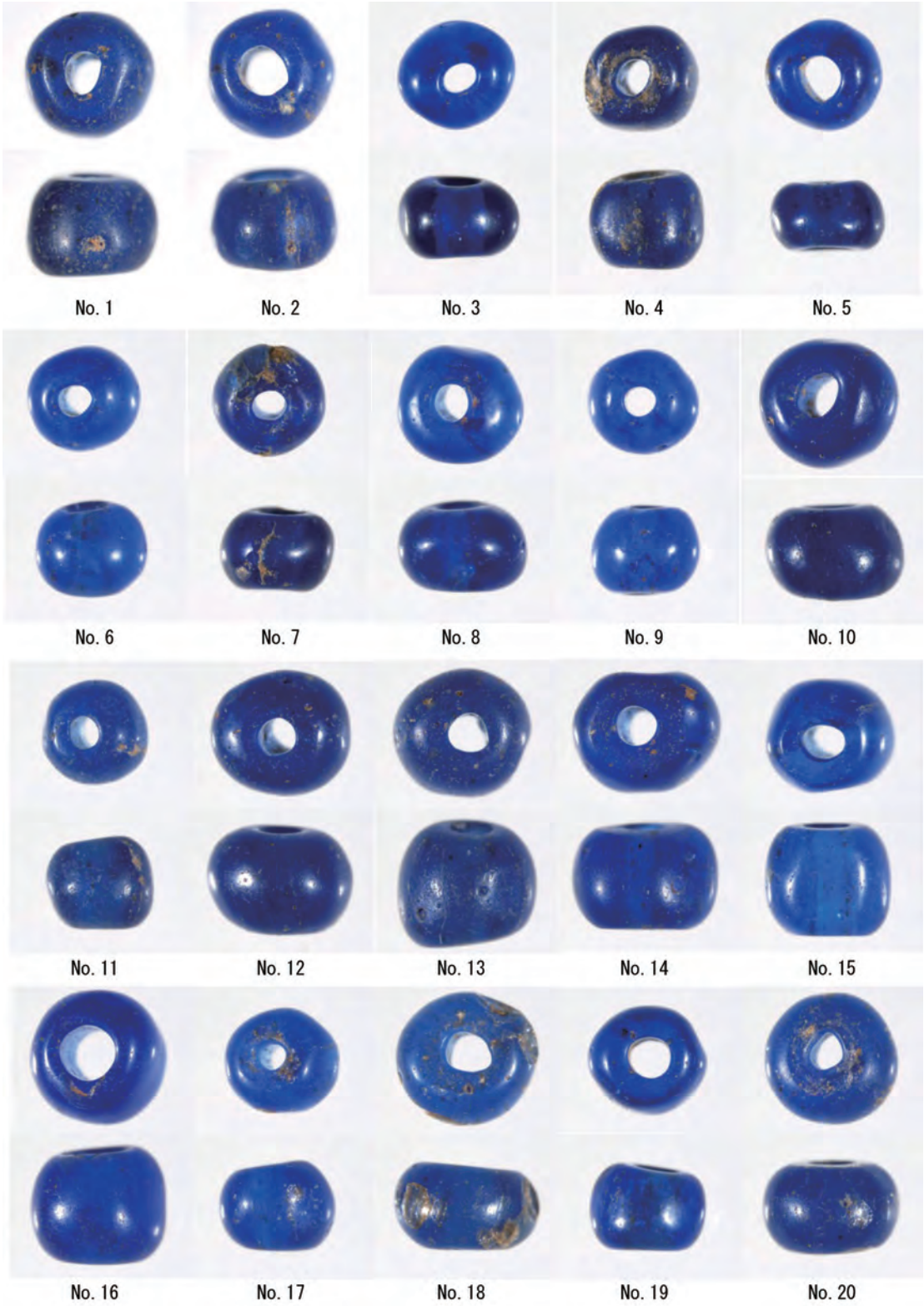
参考文献

大賀克彦 2020「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしえの河をのぼる　古川登さん 退職記念献呈考古学文集』55 ～ 64 頁。

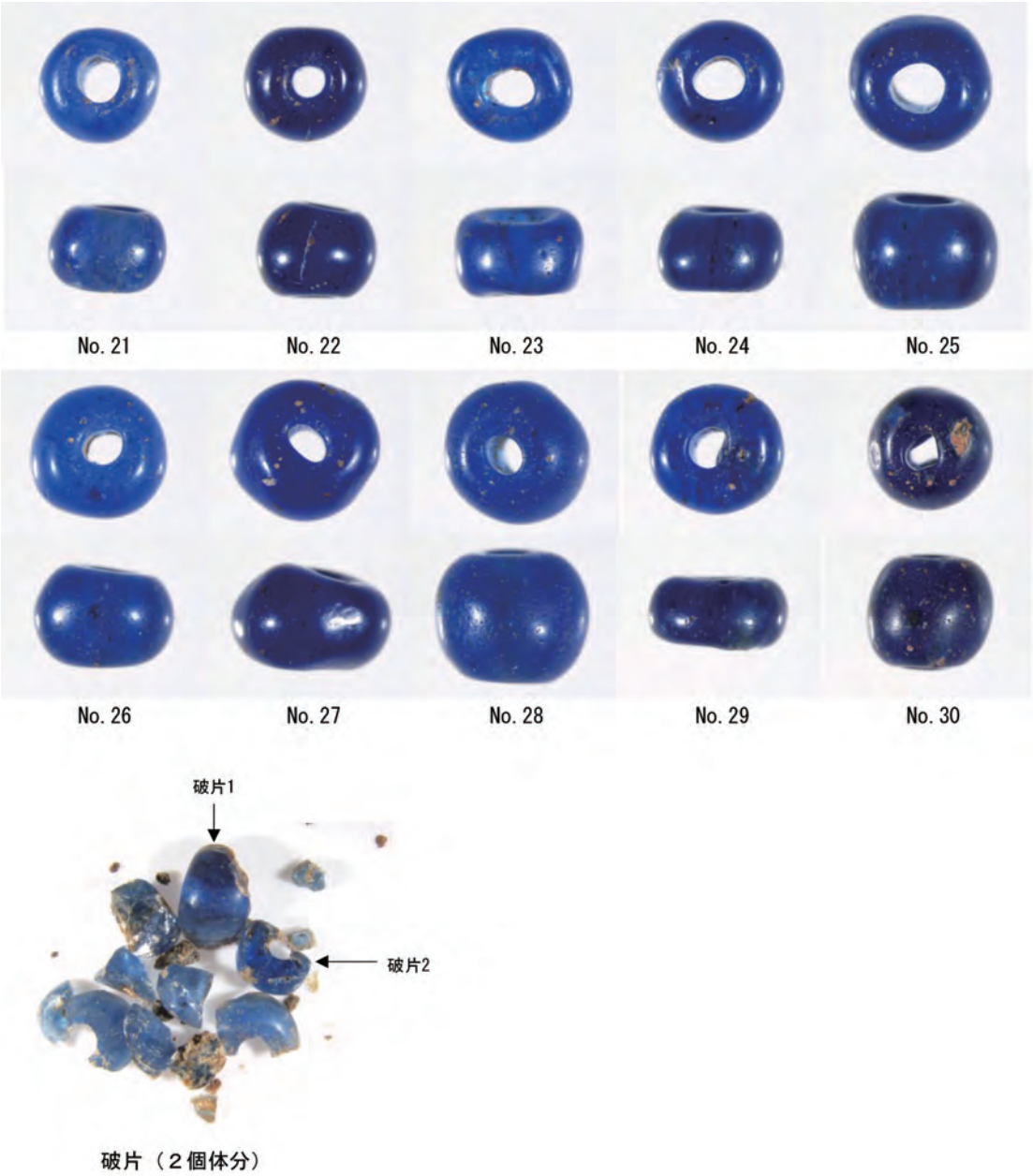
Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). Journal of Indian Ocean Archaeology, 9, pp.34-60.

付表８　蛍光Ｘ線分析結果

分析№	色調	製作技法	基礎ガラス	着色剤	重量濃度（%）																	
					Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb_2O	SrO	ZrO_2
1	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.1	1.1	2.7	76.8	0.1	12.0	2.1	0.22	0.02	1.74	1.84	0.06	0.04	0.02	0.04	0.05	0.04	0.12
2	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.1	0.9	2.7	78.9	0.1	11.3	1.8	0.13	0.02	1.55	1.19	0.07	0.04	0.02	0.02	0.02	0.03	0.11
3	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	2.2	1.1	2.7	75.1	0.0	13.2	1.1	0.20	0.02	1.94	2.03	0.08	0.04	0.01	0.02	0.03	0.02	0.10
4	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.3	1.1	2.5	78.9	0.1	10.0	1.7	0.18	0.02	1.78	2.02	0.08	0.06	0.02	0.02	0.06	0.03	0.06
5	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.8	0.9	2.5	74.0	0.1	15.1	1.3	0.17	0.02	2.10	1.52	0.09	0.05	0.02	0.03	0.04	0.03	0.09
6	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	2.0	1.0	2.6	76.3	0.1	12.8	0.9	0.27	0.03	2.00	1.82	0.09	0.05	0.01	0.01	0.03	0.03	0.08
7	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.4	1.1	2.9	72.5	0.1	14.9	1.5	0.20	0.03	2.74	2.14	0.12	0.06	0.01	0.03	0.05	0.04	0.10
8	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.8	1.1	2.4	74.9	0.1	14.2	1.8	0.18	0.03	1.52	1.62	0.07	0.03	0.01	0.02	0.03	0.04	0.11
9	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	2.0	0.9	2.9	76.4	0.1	12.7	1.1	0.16	0.03	2.02	1.40	0.09	0.05	0.02	0.02	0.03	0.04	0.08
10	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.8	1.1	3.4	73.8	0.1	13.9	1.2	0.23	0.03	2.27	1.90	0.09	0.05	0.02	0.03	0.04	0.03	0.10
11	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	2.0	1.1	2.9	74.5	0.1	13.3	1.5	0.26	0.03	2.40	1.69	0.07	0.04	0.02	0.02	0.03	0.04	0.10
12	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.6	0.9	3.4	74.7	0.1	13.7	1.1	0.20	0.02	2.21	1.80	0.07	0.04	0.01	0.04	0.04	0.04	0.11
13	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.3	1.3	3.2	71.0	0.1	15.8	3.0	0.21	0.03	1.78	1.94	0.06	0.04	0.02	0.03	0.04	0.04	0.08
14	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.9	0.9	2.5	75.8	0.1	13.8	1.7	0.16	0.02	1.39	1.55	0.07	0.03	0.01	0.03	0.04	0.03	0.10
15	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.2	1.0	2.7	76.9	0.1	13.0	1.4	0.17	0.02	1.70	1.58	0.06	0.04	0.01	0.03	0.03	0.03	0.08
16	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.6	0.9	2.4	77.2	0.1	13.1	1.6	0.13	0.02	1.60	1.16	0.07	0.04	0.02	0.02	0.03	0.03	0.09
17	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.8	0.8	2.1	75.0	0.1	15.6	1.5	0.14	0.03	1.60	1.08	0.05	0.03	0.01	0.02	0.03	0.03	0.07
18	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.0	1.1	2.5	79.5	0.1	11.2	1.5	0.16	0.03	1.48	1.27	0.05	0.08	0.02	0.03	0.04	0.04	0.06
19	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.7	1.1	2.7	75.0	0.1	12.6	2.6	0.20	0.02	2.15	1.51	0.08	0.05	0.02	0.02	0.03	0.03	0.09
20	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.5	0.7	2.3	78.1	0.1	12.8	1.0	0.18	0.03	1.62	1.41	0.05	0.04	0.02	0.02	0.04	0.03	0.09
21	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	2.5	1.0	2.9	76.7	0.1	11.6	1.7	0.16	0.03	1.79	1.32	0.06	0.04	0.02	0.02	0.03	0.04	0.11
22	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.3	0.9	2.8	73.8	0.1	14.7	1.4	0.22	0.03	2.55	1.89	0.11	0.06	0.02	0.02	0.03	0.03	0.08
23	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.5	1.1	2.5	74.7	0.1	14.0	1.9	0.17	0.03	1.89	1.85	0.08	0.07	0.02	0.02	0.04	0.03	0.10
24	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	2.2	1.1	2.5	72.2	0.1	15.7	1.5	0.20	0.02	2.16	1.94	0.09	0.06	0.02	0.03	0.04	0.04	0.11
25	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.7	0.9	2.6	74.5	0.1	14.3	1.7	0.18	0.02	1.92	1.80	0.07	0.05	0.02	0.02	0.03	0.03	0.09
26	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.5	1.2	2.5	77.2	0.1	13.2	1.1	0.14	0.03	1.57	1.31	0.05	0.04	0.02	0.03	0.05	0.04	0.09
27	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.5	0.9	2.5	76.0	0.1	13.1	1.6	0.18	0.03	2.15	1.67	0.10	0.05	0.02	0.03	0.03	0.03	0.10
28	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.5	1.1	2.8	77.9	0.1	11.8	1.2	0.16	0.03	1.73	1.47	0.06	0.04	0.02	0.03	0.04	0.03	0.08
29	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.8	1.2	2.8	72.3	0.1	14.7	1.4	0.24	0.03	3.04	2.03	0.12	0.07	0.02	0.02	0.05	0.05	0.11
30	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.6	0.9	2.7	73.2	0.1	14.8	1.5	0.21	0.03	2.67	1.88	0.10	0.09	0.02	0.03	0.05	0.04	0.11
破片1	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.5	0.8	2.4	76.1	0.1	15.0	1.4	0.15	0.02	1.21	1.12	0.05	0.03	0.02	0.02	0.04	0.03	0.10
破片2	紺色透明	引き伸ばし	カリガラス	コバルト	1.3	1.1	2.6	72.2	0.1	17.0	1.7	0.18	0.03	1.53	1.94	0.06	0.04	0.02	0.01	0.05	0.04	0.11



第 33 図　ガラス小玉の顕微鏡写真①



第 34 図　ガラス小玉の顕微鏡写真②

図　　版

図版第１

（１）調査地遠景（南から）

（２）第１埋葬施設検出状況（南西から）

（３）第２埋葬施設検出状況（南から）

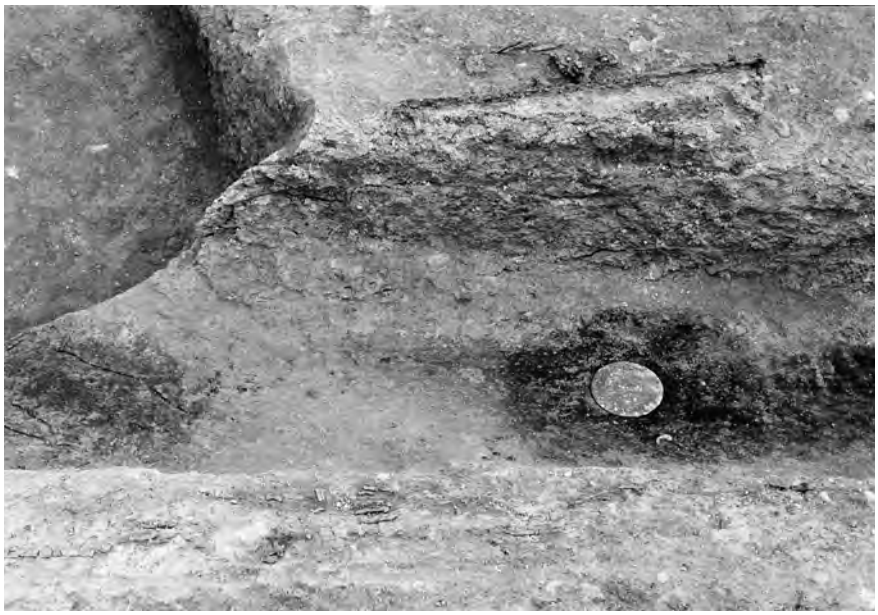
図版第２

第１埋葬施設被覆粘土検出状況（南から）

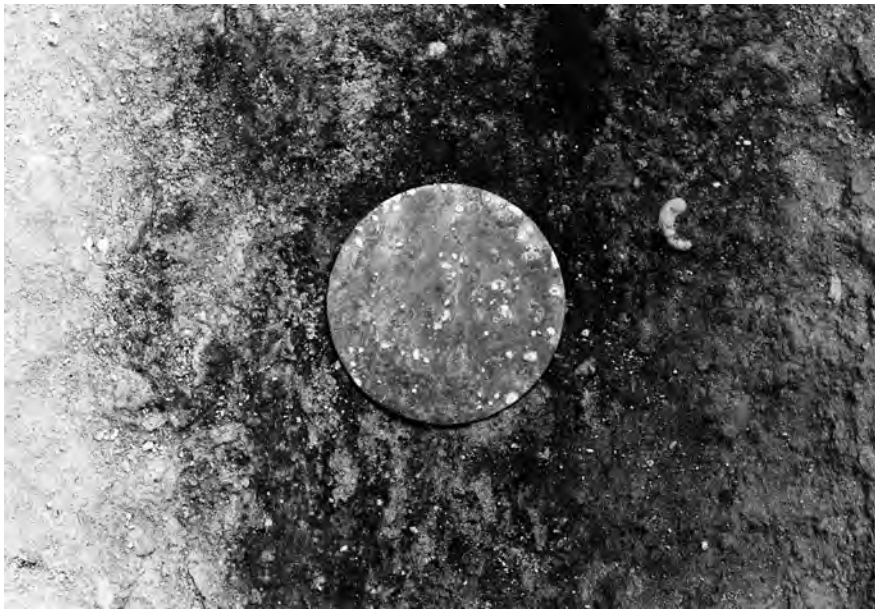
図版第３

第１埋葬施設副葬品出土状況（南から）

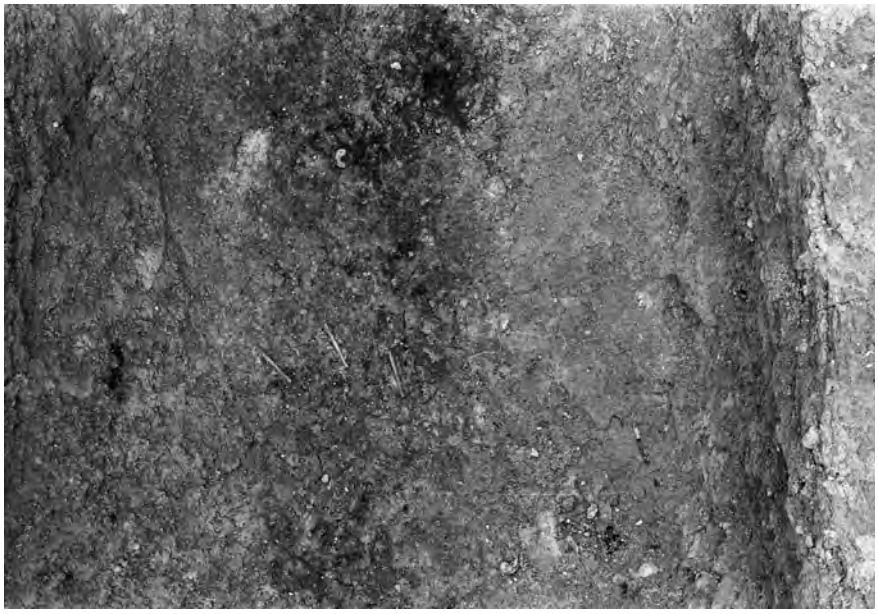
図版第４



（１）第１埋葬施設棺内中央部遺物出土状況（西から）



（２）第１埋葬施設棺内中央部銅鏡検出状況（上が北）



（３）第１埋葬施設棺内中央部玉類検出状況（上が北）

図版第５

（１）第１埋葬施設北小口部棺外刀剣出土状況（上が南）

（２）第１埋葬施設西部棺外刀剣・農工具類検出状況（上が東）

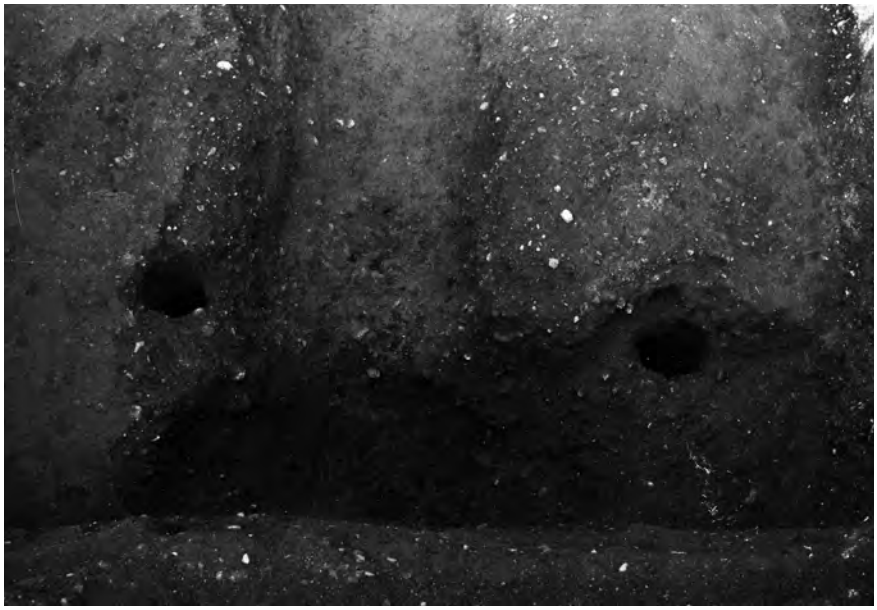
（３）第１埋葬施設南東部棺外刀剣・農工具類検出状況（上が西）

図版第６

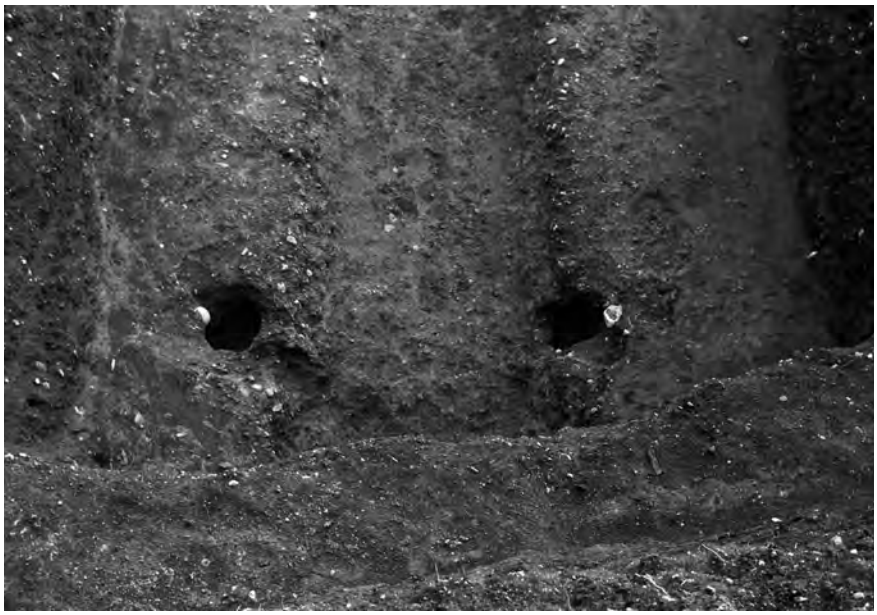
（１）第１埋葬施設北小口部（南から）

（２）第１埋葬施設柱穴検出状況（北から）

図版第７



（１）第１埋葬施設南小口部柱穴検出状況（南から）



（２）第１埋葬施設北小口部柱穴検出状況（北から）

（３）第２埋葬施設被覆粘土検出状況（北から）

図版第８

（１）第２埋葬施設被覆粘
土掘削状況（南から）

（２）第２埋葬施設被覆粘
土東西断面（南から）

（３）第２埋葬施設被覆粘
土南北断面（西から）

図版第９

（１）第２埋葬施設被覆粘土半裁状況(南東から)

（２）第２埋葬施設被覆粘土除去状況（西から）

（３）第２埋葬施設棺内遺物出土状況（北から）

図版第 10

（1）第２埋葬施設墓壙底部周溝内礫検出状況（北から）

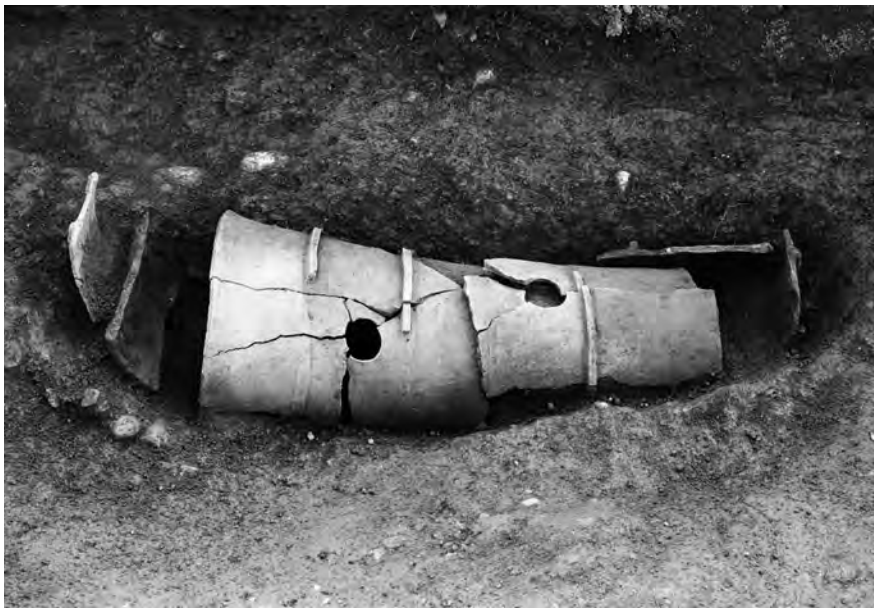
（2）第２埋葬施設完掘状況（南から）

（3）埴輪棺１（東棺）（東から）

図版第 11

（1）埴輪棺２（東北棺）
検出状況（北から）

（2）埴輪棺２（東北棺）
（北から）



（3）埴輪棺２（東北棺）（北
から）

墳丘西側斜面（西から）

図版第 13

（1）墳丘西側上段斜面葺石検出状況（西から）

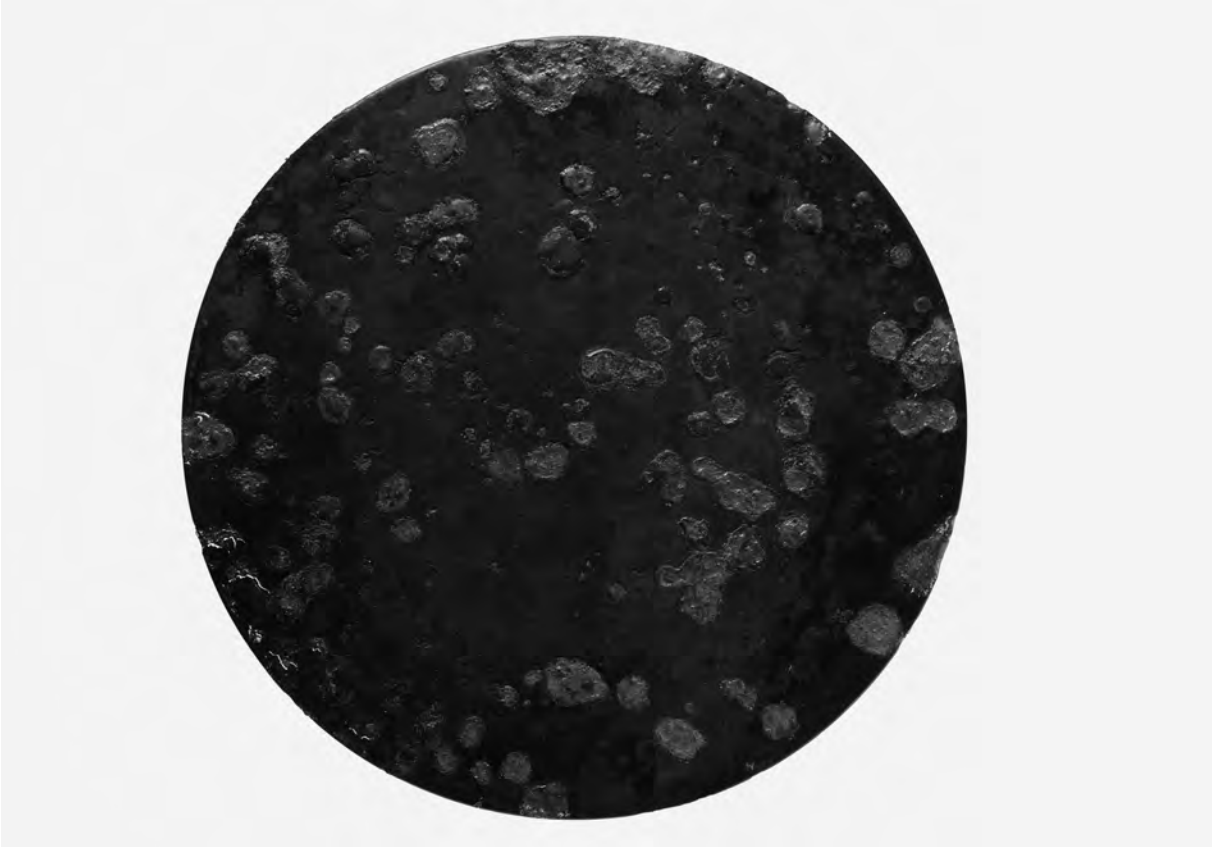
（2）墳丘西側基底平坦面埴輪列検出状況（北西から）

（1）西側基底平坦面埴輪
列検出状況（北から）

（2）西側基底平坦面埴輪
列検出状況（上が東）

図版第 15

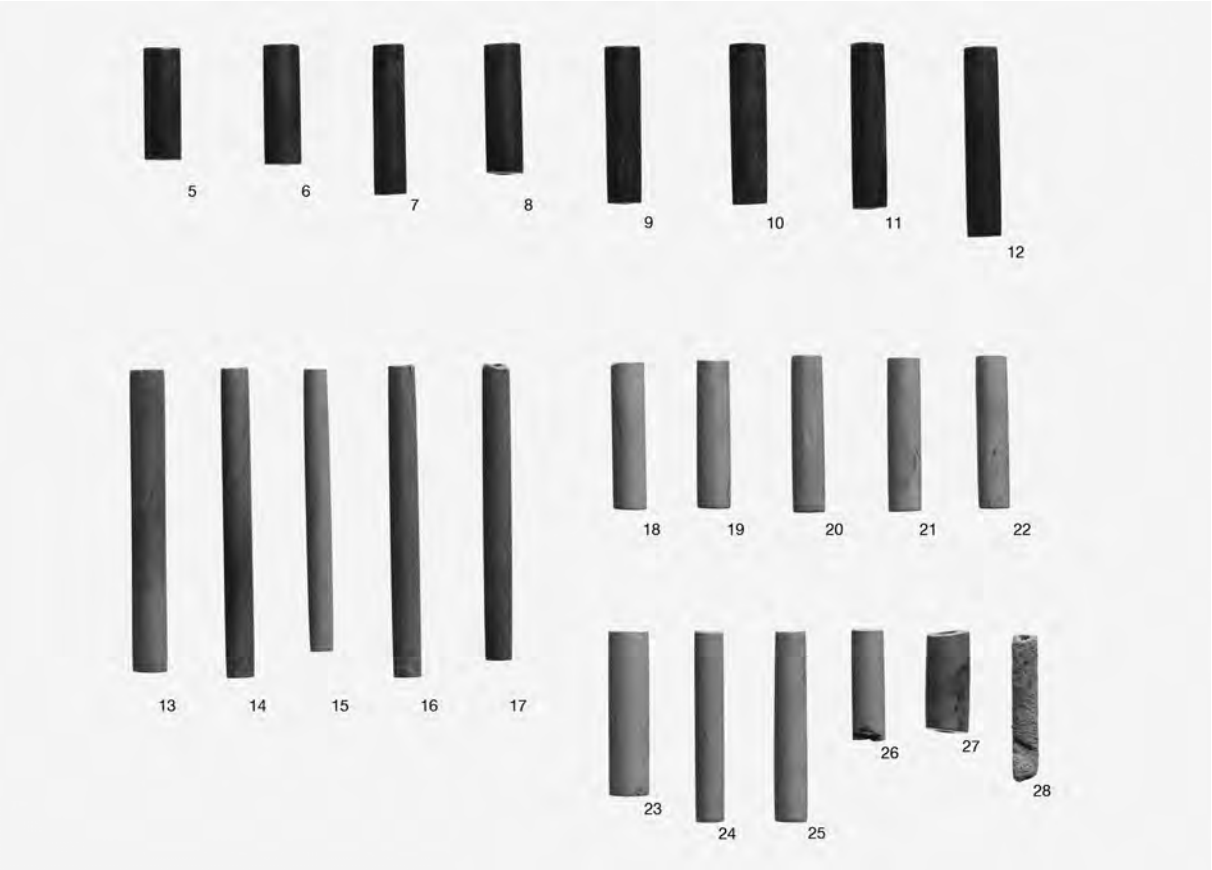
（1）斜縁二神二獣鏡



（2）斜縁二神二獣鏡　鏡面

（3）勾玉

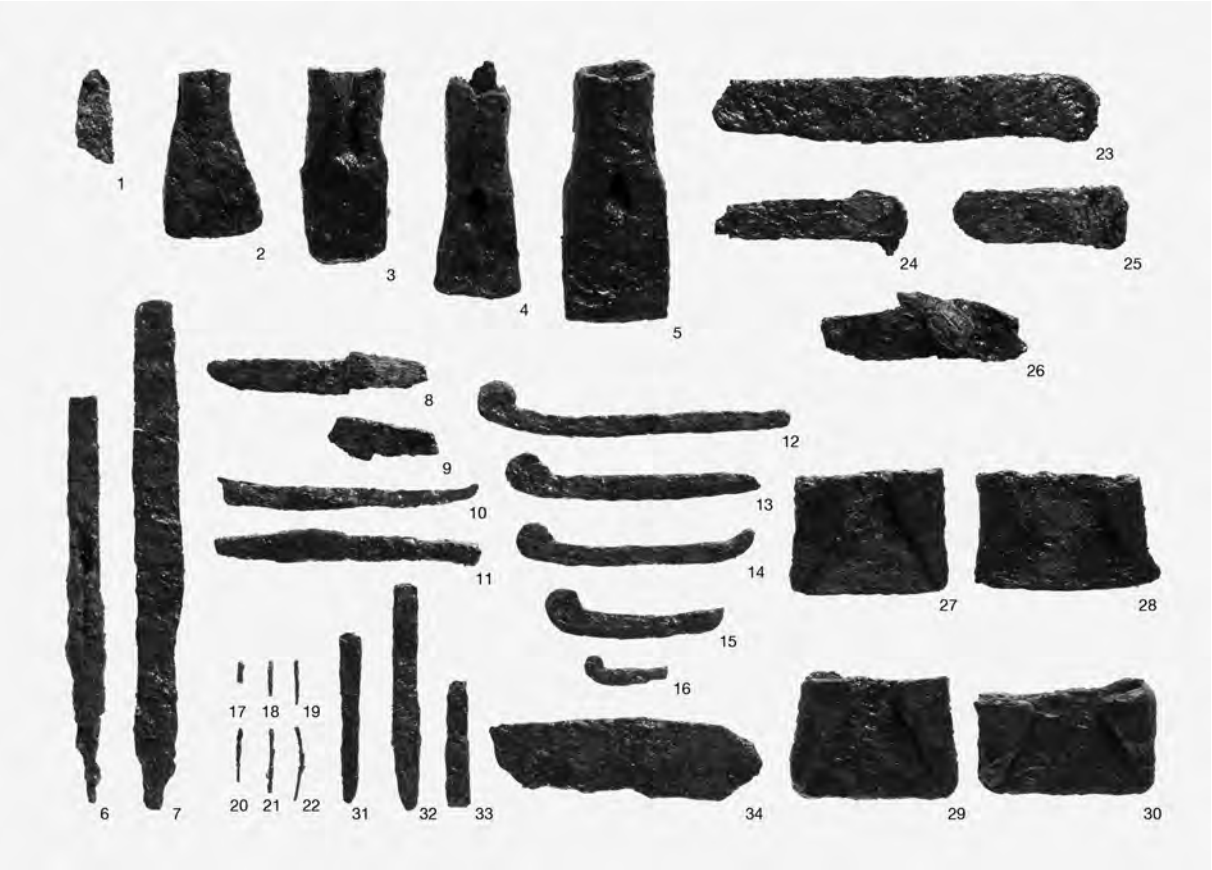
図版第 16



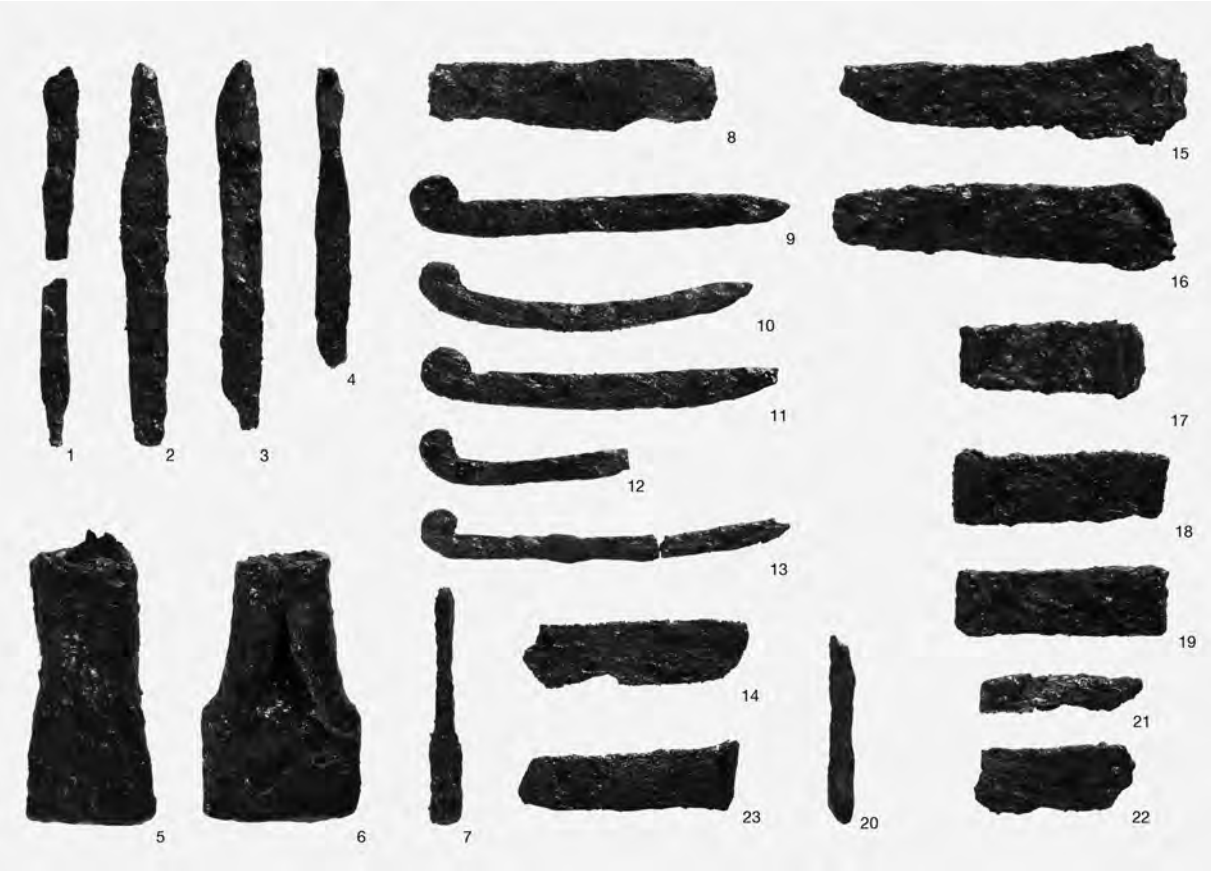
（1）管玉

（2）鉄剣・鉄刀

図版第 17



（1）第１埋葬施設出土　鉄製農工具



（2）第２埋葬施設・墳丘出土　鉄製農工具

図版第 18

（1）第２埋葬施設出土　鉇（刀子転用・表面）

（2）第２埋葬施設出土　鉇（刀子転用・裏面）

普通円筒埴輪（集合）

図版第 19

形象埴輪（集合）

普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪（埴輪棺）

線刻埴輪（埴輪棺）

図版第 20

普通円筒埴輪（底部）

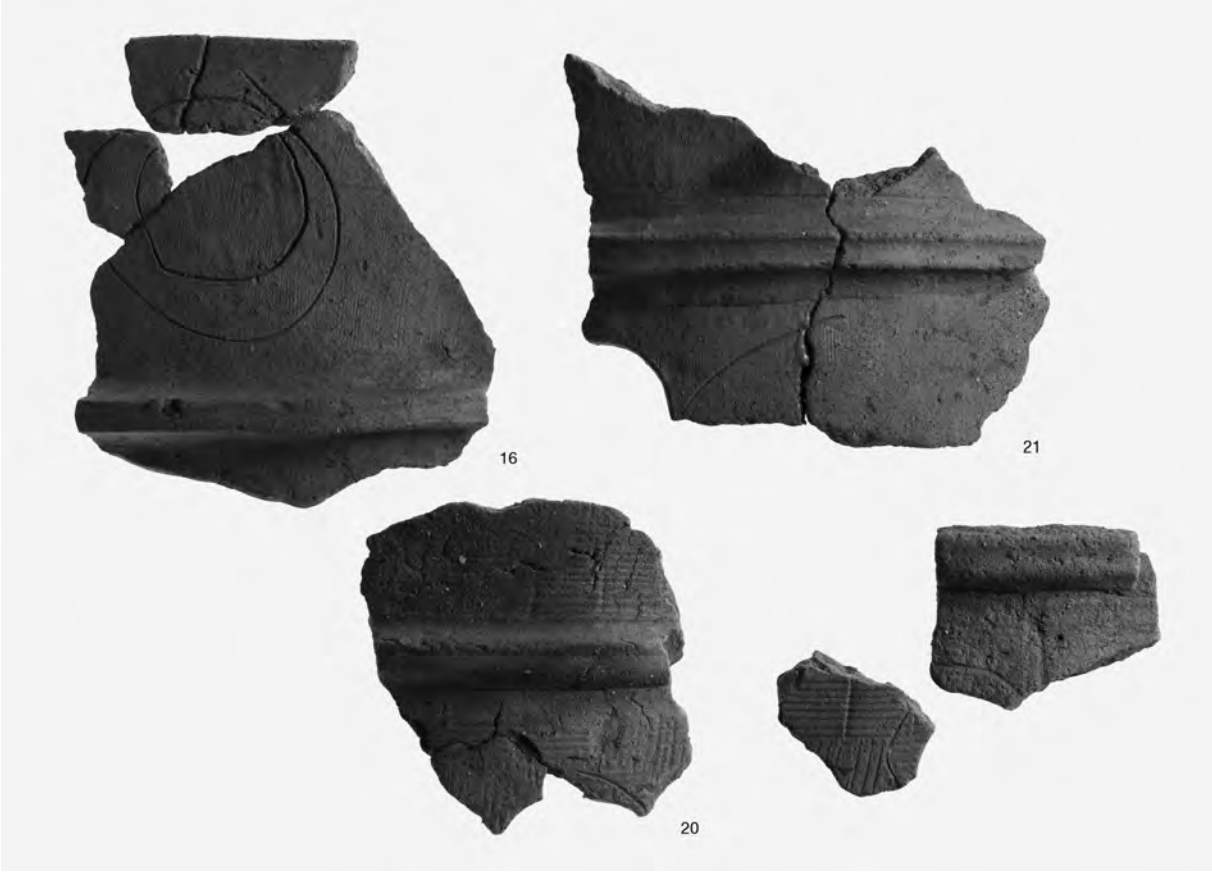
図版第 21

（1）普通円筒埴輪（体部）

（2）普通円筒埴輪

（3）普通円筒埴輪（（2）と同一個体）

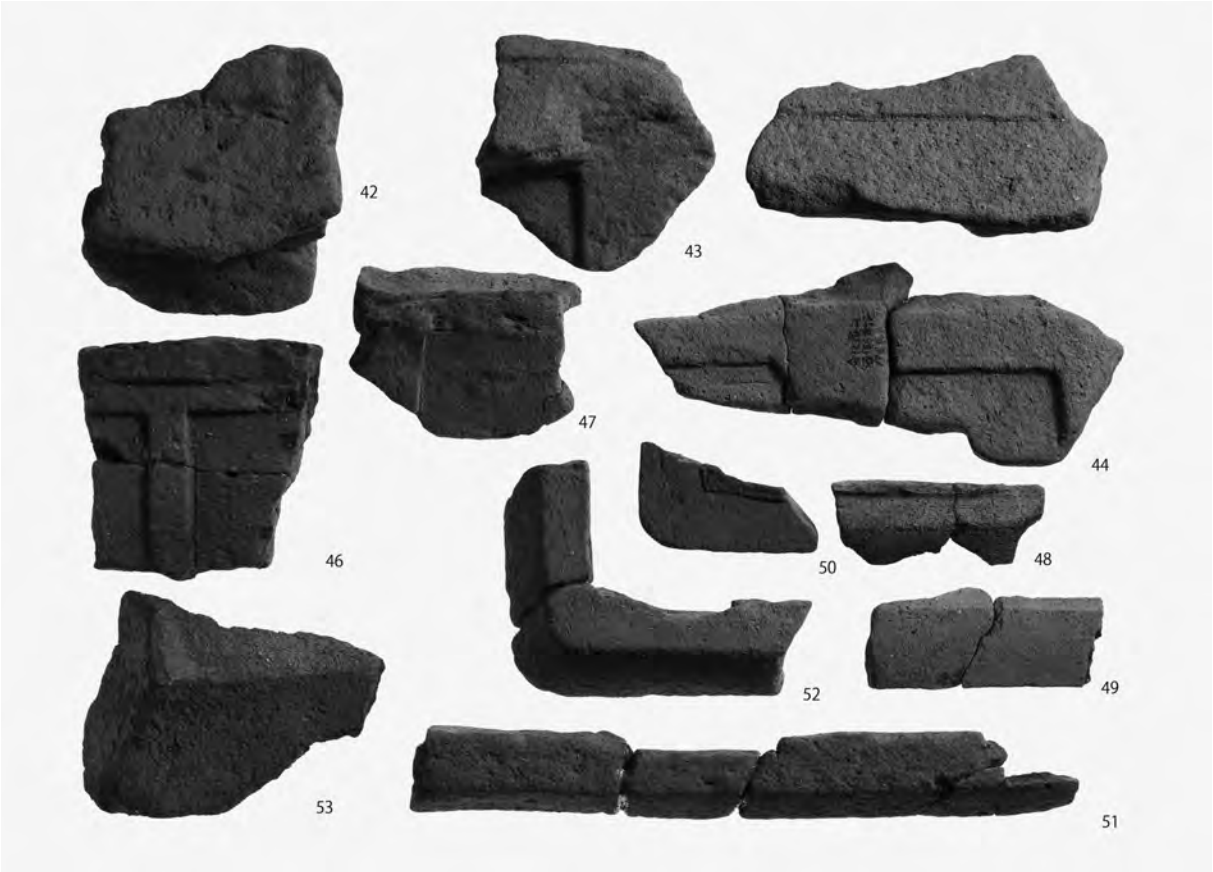
図版第 22



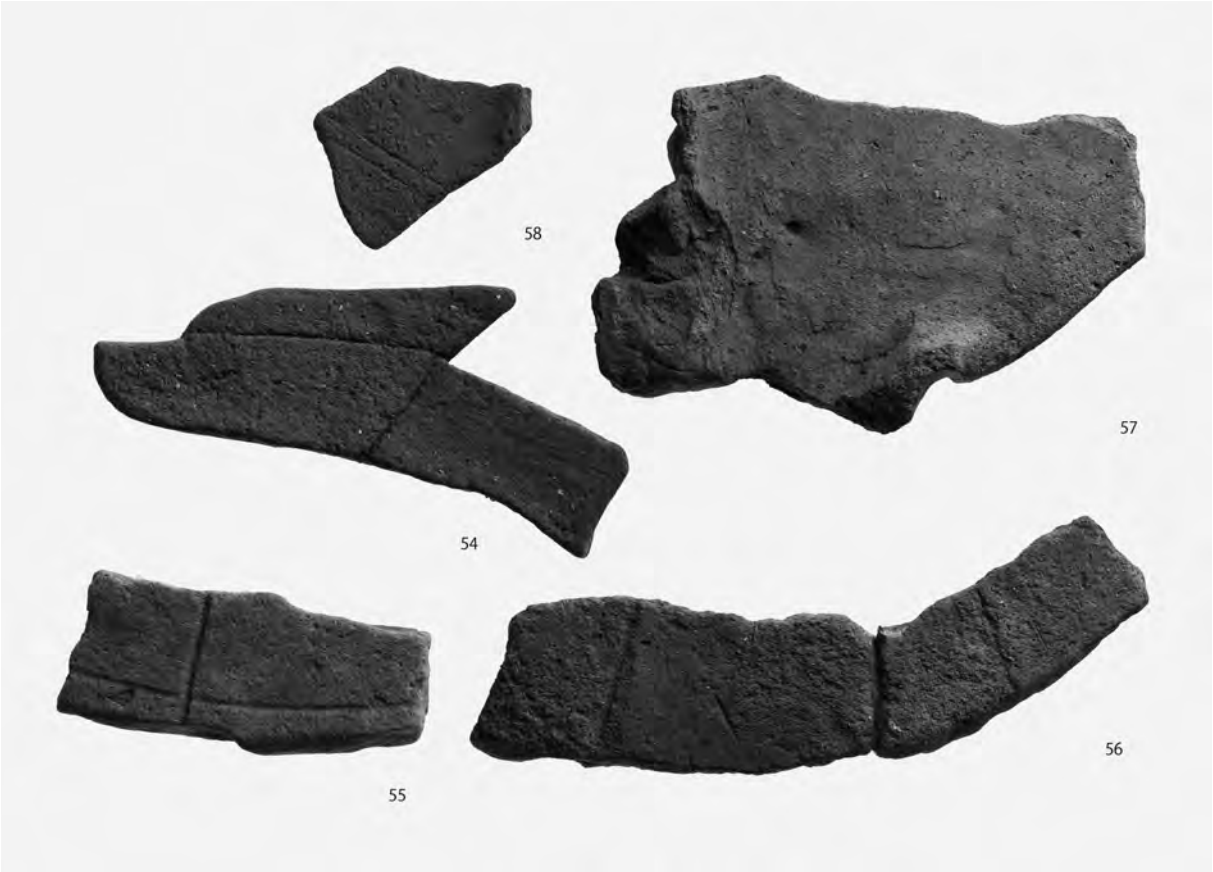
（1）普通円筒埴輪ヘラ記号①

（2）普通円筒埴輪ヘラ記号②

図版第 23



（1）家形埴輪



（2）蓋形埴輪

図版第 24

（1）鞆形埴輪

（2）不明形象埴輪

（3）円筒棺　蓋 A

（4）円筒棺　蓋 B

報告書抄録

ふりがな 書名	こんぴらやまこふん 金比羅山古墳発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	古川　匠・中居和志・北山大熙・川崎雄一郎・吉本堯俊・田村朋美
編集機関	京都府教育委員会
所在地	〒602-8570　京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町　075-414-5903
発行年月日	西暦 2021 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金比羅山古墳	京都府宇治市広野町寺山	26204	018	34° 52′ 18″	135° 46′ 56″	19640820 ～ 19641018	約 1,200	宅地開発

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金比羅山古墳	古墳	古墳時代中期	粘土槨、円筒棺、周濠、周堤	銅鏡、勾玉、管玉、ガラス小玉、鉄刀、鉄剣、鉄製農工具、円筒棺、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪、靫形埴輪	昭和 39 年度に発掘調査された金比羅山古墳の正報告

要約	金比羅山古墳は、宇治市広野町寺山にかつて所在した直径約 40 mの円墳で、昭和 39 年（1964）に京都府教育委員会が発掘調査を実施した。墳頂部から粘土槨と円筒棺の２つの埋葬施設が検出され、斜縁二神二獣鏡、玉類、刀剣、農工具類といった副葬品が出土した。墳丘上及び周堤からは埴輪及び埴輪棺が出土した。 金比羅山古墳出土品は、古墳を構成する多様な遺物の一括出土事例として注目を集め、古墳時代中期前半の標識資料とされてきた学史的な資料である。しかし、埋蔵文化財保護体制が未整備な時期の発掘調査であったため、報告書が未刊行な状態が長年続き、正報告書の刊行が望まれてきた。 令和元年度・２年度（2019・2020）に出土遺物の整理作業を実施し、未報告の資料を提示することが可能となった。また、発掘調査記録についても現存する調査記録から新たな知見を加え、ここに正報告書を刊行することとなった。

報告書抄録（英文）

Title	Konpirayama tumb report					
Writer	Takumi Furukawa, Kazushi Nakai, Daiki Kitayama, Yuichiro Kawasaki, Takatoshi Yoshimoto, Tomomi Tamura					
Copyright	Kyoto Prefectural Board of Education 〒602-8570 Yabunouchicho Shinmachi-nishiiru Shimodachiuri-tori Kamigyo-ward Kyoto-city Japan					
The date of issue	31.Mar.2021					
Site	Location	North latitude	East latitude	Excavated term	Excavated area（㎡）	Origin of excavation
Konpirayama tumb	Terayama Hironocho Uji-city Kyoto-pref	34° 52′ 18″	135° 46′ 56″	19640820 ～19641019	1,200	housing development
Site	Sort（class）	Period	Features		Artificial description	
Konpirayama tumb	Kofun	Kofun	coffin, ditch, burial mound		bronze mirror, iron tools, beads, jade and jasper magatamas, jasper kudatamas, haniwas	

KONPIRAYAMA TUMB REPORT
COPYRIGHT ©Kyoto Prefectural Board of Education, 2021
Kyoto Prefectural Board of Education
Shinmachi Shimodachiuri Kamigyo-ward Kyoto 602-8570, Japan
edited by Cultural Properties Division Department of Guidance

Kyoto Prefectural Department of Education
Published by Kyoto Prefectural Board of Education
No Parts of this publication may be reproduced or by any means Without prior permission of copyright owner

金比羅山古墳発掘調査報告書

発　行　令和３年３月 31 日
編　集　京都府教育庁指導部
文 化 財 保 護 課
発　行　京都府教育委員会
〒 602-8570　京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
印　刷　三星商事印刷株式会社
〒 604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町 300

KONPIRAYAMA TUMB REPORT

KYOTO PREFECTURAL BOARD OF EDUCATION
JAPAN